里見八犬傳

九輯

八十二

八十九

特別
へ13
4304
20冊

N13
9304
20
正

八犬傳結局下編

曲亭翁口授編
受教婦幼代搆

柳川重信画
溪齋英泉画

文溪堂精刊

〈2001-322〉

鄉庭文庫

第百八十回上附録目

孝感力莚藝詠歌奇異を賛も

一姫一僧死生栄貴を等くも

東都 曲亭主人編次

却説扇谷山内の面管領顕定里見と和睦整て會盟の義を果せらるゝ說

使能谷二郎左衛門尉直親ハ既ゐ歸京の歩えあり日足かゝり定正顕定ハ使者を

室町殿へまゐらせて罪過恩免を拜謝

顕定の使者齋藤左兵衛佐高實両家の伴當勘からず隨即直親ゐ相

俱して明日啓行を致さとふその日直親より快船の使をもつて勅使代秋條廣

當ゐ件の義を告一かど廣當ハ敢てそむかず先其使をかへし遣りて却大江親兵衛

と盛岡照文を招かせて告るゐ件の義をもそくさく聲を低て又いふ。熊谷歸

京の告あれども。這回ハ咱等他と一路児ホ做るべくぞ。何とるべ他ハ両管領の使者を倶しくろ我ハ是勅使代ホ旦各と伴ふべりれバ他ゲ下風ホ立々さかろあくそもく四五日を歴て歸路ホ赴まく思ふ先方の兵を宴房殿へ意ホーのへとありーかバ親兵衛も照文も一説ホ及ぜ諾るひく退りて先両家老と七大士等ホ告知らせて却一同義成主へ那説を啓え上ーかバ義成主點頭て然らバ我と義通の名代ホ照文兼帯なるべ若欤八大士等ハ受領の拝礼ホ上洛せバあるべくぞ但ー老館義実の御名代ホ何人を欲得参もべ兒御意を伺ひまらん欤と問れて親兵衛照文ハ阿と応ー共倡ホ膝を找めく禀にやう其兵ハ往日老館の御意を美らーるひ兒這回上洛の御名代ホ、大ホそ相応ーかるめ我ハ久ー兒桑門児るり非如弁進の朝恩ありとも義成義通と同じかるべくぞ且、大ハ二十餘年。幻脚ハ東の八箇国のごらまぎ皇城の地を踏ざれバとり兒折らまそあるむまらんと仰られひ兒とりホ義成主點頭て次の間投て退りけり。姑且ーて、大法師ハ引れく君邊ホ参けり。當下辰相清澄照文も大士等も卒とむるりホ辞て席を譲りーかバ、大法師ハ恭ーく義成主ホ拝見ーて和睦の歓びを禀をおそ親兵衛照文執合ーて師父ハらまぎ知ゆハド目今佞々の仰ひ兒とそ件の一説を告知らまれバ、大ハ听々眼を睜て開ハと難ぎ然る暗がまーれ御名代ホ立く京師へやる参るべ兒とハ思ひ兒へども我身の昔日をえう空ホ仕らゆ況今那君の御名代ホ擇れハ生甲非斐ありとのらっべ。縦水火の中ふも

辨ひまろべ不参不忠ノ御誅兼りけぬ参るべしくと繰返しつゝ咎辱せぬ義
成主欵びく然らば事既ふ急ノ照文の明日ノ大をねて瀧田へまゐりて老館ふこの
義を具ふ申え上ぐ猶御旨を請まうねば親兵衛信濃下野も自餘の犬士も
共倡ふ逆旅の准備とゐそくべし又六郎兵庫助ハ朝廷并ふ室町殿へ献るべき東
西ノ有司ふ課て調達もるく宜いされバ大家齊一言兼してうち連
立てそ退出ける左右まる程ふ暑熱弥増六月五日の朝秋篠将曹廣當ハ
明日の旦開ふ當所を退りて歸京まべしとふ告あり仍美成主ハ又親兵衛と
照文とゐく餞別の人情あり去向ハ洲崎の港口より相模へ大磯へ投渡して
東海道を上るもくべしと豫定せられしかバ犬江親兵衛犬塚信濃犬阪下野犬
山道節即犬村大学犬川荘介犬田豊後犬飼現八兵衛もハ蜑崎照文、大
法師と皆廣當ふ相俱して出船の纜を解きそ約莫這僧俗十名の伴
當ハ胡意男ニて三十餘歳ニて鬢髪四郎猿岡猿八直塚紀二六漕地吉勘太を
首ゐそ輕卒奴隷夫役あり廣當の従者と俱ふ百五六十名許るべし六月六日の
早天ふ主僕巨舶ふうち乗りそ大磯を投て漕まるふ日尚涼しく順風もそよの日
亭午の時候ふ件の浦ふあまけれバ這里より船を洲崎へ返して陸路を西へ赴
くふ貌姑峰足柄ハ嶺智ゞ故郷ゐそ。伊豆ハ荘介の故園るれバ有輟ふ懐舊の
情るゝふゐゞ恁而日ふ歩ミ夜ふ歇りやくニ十餘日ふて障るとるく京師ふ
来ふけり登時秋篠廣當ハ室町殿へも朝廷へも返命を奏せんとそ別れく其
方ふ赴ゝかバ大照文八犬士ハ三條頭ふ歌店を求めて躰く熊谷ゞ宿
所ふゐて美實義成義通の名代、大照文並ふ八犬士ゐる東西和睦因ゐ命の
御答又君臣拝任の御礼ふ参上の義を告ーかバ直親則對面あり其上洛の
速ゐを労ひて明日室町東山の両御所へ参上るべしとそ其進退を指揮ゐ

且扇谷山内の使者白石重勝齋藤高實ハ拜礼の事果て大昨日歸
國を許されかば岐岨路を東へ退り下る。伝れが各も遅參をべらぼと期を推
く。幷が儘旅宿へ返されけり。然バ次の日、大照文八犬士等ハ倶ハ朝服ニ整
へて伴當夫役を従へ。已牌の左側ハ室町殿へ參上りて里見義實義成親
子の名代の使者並ハ家臣八犬士等ハ謝恩の為ハ上洛の義を歎え上て義成主の
口呈書と拜任の贄ヨヲ種を進らせかば、大照文八犬士を正廳へ召入せて管領
畠山政長對面あり。熊谷直親執達ら。當下政長ハ、大照文八犬士等ハ
うち向ひ義實義成父子の忠信善政と八犬士諸臣等の勲功を先參て今日
ハも汝達將軍家ハ義尚ハ拜見の詔を饒さるべきハ上ハ昨日より御欠安ましまさず
日今の詔ハ及れぎ且汝達が參内も異日の御沙汰あるべく宿所ハ退りて其拵を
候なるべしとありけれバ、大照文八犬士等も先度ハ懲りて妙ならぬと思ふの元辞

難て只得唯々と兼まりて退て館へ東山殿へ詣て東西を献まるも勘か
らず。其歸路ハ管領政長及評定衆の諸邸をうち巡りて献残の人情を齎
まるも亦差あり。諸礼やう多く事果て三條の宿所ハ還りけるより日と甲ハ経れ
ども御沙汰なければ誰々も逗留の徒然ハ堪ざるべきハ、大法師ハ炎暑を犯
して日毎々々ハ歓店を出て洛内洛外のへべさこそ
或ハ紫野なる大徳寺ハ參禅して一休和尚の迹を弔て靈山靈地名所舊蹟
ハ至ざる隈なりけれバ大塚大阪自餘の犬士も又照文も迭代ハ杖を京師の名
所ハ曳ども獨犬江親兵衛のミ京童ハ交りて靈虎射ハ勇少年ハ復
あて在るを観つべしとて他ハ歩るをよろこばず思ひくに宿所ハ在り
他ハ京師ハ去歳の秋より逗留久しかりけれバ自餘の犬士ハ同じかそで珍ら
かる故もあるべし。悠徒ハ日を過しつ。十餘日ハ経りしかば朝廷ハ秋條廣當

奏聞せ聞召せ所里見義成の仁義善政并ホ八犬士の忠孝智勇其淵源ハ伏姫の
孝烈神靈の致所且、大法師ガ三十餘年の功勲勤苦の利益をのく、八
犬士を索ネく里見の家臣ホ做あーの他ガ出家堅固の功德都佛意ホ稱
ふべき事及蟹崎照文が年來招賢の使ーて功ヲかり一事まで廣當ガ
安房の稻村ホ人の噂ホ妙ヲ知る処正ーかりける其顚末の奇ともく妙なれバ
帝を首なり関白殿下殿上人地下の每ホ至るまで疾其十個の僧俗ホ見ま
くりう思召ーかバ屢室町殿へ他ガ參內を御催促ありけり有德一程ホ義
尚公の病着座りのひーかバ先里見の使者每を參內させ後ホ當御所へ
召せべーとそ則管領政長より、大照文八犬士ガホの旨を下知あり一かバ
、大照文犬士ガら次の日朝服を敕正つ且伴當夫役ホ臨時の調貢を捧
げさせく南大門より參內せ秋篠廣當ホ立て御階の下ホ參まで當

下、大照文ホ義實義成の奉獻の上書と當職の辭表を呈されバ執
奏の公卿受令りそ且仰せる旨あり。照文、大ホ左少將と治部卿の名
代ゑバ權ホ外殿を許さゑゐ又八犬士ガホも國の為ホ乱を撥め戎ホ靈虎と
功共ホ鮮少ゑらぬとて、くく曇裏ホ持資入道道灌ガ上洛參內の例ホ
依るべーとそ。是亦權ホ外殿ホ擬せらるゝ。俱ホ天盃を下されける。其後仰
ぎさゝ里見左少將其父治部卿と君臣新恩の官職を辭ゐまく欲
まる旨ホ勅許あり。今より一て後君臣俱ホ宜く前官たゑゐ著也就て左少
將の女兄伏姫の孝烈ゑる死後ホ屢神靈を顯一て祐けそ其國ホ大功あ
り一事又、大ガ多年ガ脚の事。今絶ホ水陸施餓鬼の折法驗利益揭
焉ゑらーと秋篠將曹廣當ガ奏聞せ敕感特ホ淺ゑらぬの故ホ伏姫を

齋ゐて富山の神ゐ做まべく、大法師を推登ーて大禪師ゐ做まべーと宣下あ
ま。如旃最も畏ゐ帝宸翰を深さ感のゐー。富山姫神社とゐ五大字の勅
額と賜ゐ且、大禪師ゐ位記と僧衣と恩賜あゐ八犬士と照文ゐ巻絹
各二巻をそ下されけゐ。寔ゐ異例の朝恩ゐれべ、大照文八犬士ゐ八倶ゐ戰戰
兢競と拜ーまゐつゐ欽びあまりて。宛天の浮橋を渡り果ぜー心地ゐそ。被ゐ
連てそ退出けゐ。然べゐの日関白殿を首ゐそ百官束帶の袖を連ねて。是を
觀る者斯かるそ。帝も珠簾の裡よゐそ那毎を亦肉ーてうち含笑せのひゐ。
然べ又ゐの次の日ゐ、大照文八犬士ゐ八室町殿へ詣でゐ。義尚公ゐ見參を管
領政長評定衆諸侍。熊谷直親ゐ至るまそ咸正廳ゐ出仕あそ。里見の
毎と召よせゐる。室町殿着坐の時管領政長奉りそ、大照文犬士ゐ八
台命を傳ゐる。房州朝武の恩命ゐ従ひまゐそ。定正顯定と。和睦ゐ
神妙ゐ弥善政と施ー。隣國と和順ーて。東國兼平の功を衍ゐべくおそ。と
仰出さゐる。且御教書を渡ー歸國の暇を賜ゐける。義尚公ゐ諚ゐ欲ー
のふゐもゐて八犬士の武藝を試相て。殊ゐ勝れる者を留めて京師の行塲ゐ
まゐべーと思食ゐけれども京家の武士近習の壯佼多ゐ那支を忘ゐ能ゐ媚
て迭代ゐ讒ーゐ傾け竟ゐ者ヨヲゐりーゐ八遂ゐ其義を停られて。歸國を
許ーのひーゐ且ゐの時管領政元ゐ當職を罷られて本領阿波ゐ在りーゐ八
犬士ゐ皆幸ゐ因恋の間を免れて安房へかゐ約のごそ伏姫の神號勅額
、大禪師の僧官ゐ思ゐ優ゐる朝恩ゐ欽び勇まざるゐ八ゐ。廣當直親ゐ
別を告て次の日ゐ二條の歌処を立去りつ伴當夫役を従へて岐岨路と安房へ
いそぐのひーゐ。大禪師ゐ做されーを敢欽ぶ心ゐ。あらでもがゐと思ひひゐ。恁而
這一僧九士ゐ主僕百十數名東を投てかゐ。其路只一日ゐ又日ゐ歩ゐ

夜ふ歌の美濃の垂井を過る時。犬塚信濃ハ、大照文と白餘の七大士
等を喚留めそのゆふ這里なる金蓮寺ハ在昔嘉吉元年五月十六日。春
王安王君御事あり一時我大父大塚匹作三成其御供奉を見るふ功堪ず
兵を敵ふ血戰して竟ふ戰歿してけ
けれども忠孝武勇ふ感一かねば當日群集の中ふ在り親を援けく跳出
佐く両公達を劍ふるりける。牡蛎崎某甲を斃す捕りて春王安王君の御首
級と父匠作の首と奪ふて己ヲ兵を殺脫け辛くして信濃路ふ走りく御嶽
大井の間なる小道場の墓所ふ三級の首と悄地ふ瘞めなりふぬと我身髣
髴歳ふり一時親の昔話ふ夢知りくり今料らずも這地を過れバ誘立られく故
ふ迹を見てもくべ。とのふ大家諾てあるべ。と心やすくと両三町ゆてさ
れバ一座の梵刹ありて其三門ふ掲げる遍額ふ金蓮寺と書一たれば何でも

あるぬ茲へけりとそ。犬塚と先ゐて。大家寺内ふ入りまくせ一時但見東ゆさうり
あそ。年齢四十有餘なる賤夫の幻装部俗さるが両箇の小親を縢着る杣を
肩ふうち揭つ。凜一く来る程ふハ犬士若ら見出一けんのよく走り近づく。犬塚
信濃ふうち向ひく恐ふ〻ら問給へ這刀禰
る犬塚主ハ在さまやと問れて信濃ハ訝りふ〻ら并ハ何事ぞ汝の問ふ犬塚信
の濃ハ我と名告ふ件の賤夫ハ奇也々々と合笑てやそうち打ゑうち下ゐて跪居て
信濃ふ告るやう最卒ふ小可ハ信濃ふる。犬井の驛ふ程遠ふ在ぬ小
篠村の荘客ふて息部局平と喚做ものふ者でハ之言長くとも聞一食ね烏滸ふ
ず一説ふ〻ら小可ふ親之ける。息部是非六ふる。信濃國の人氏へ。井丹二直秀
主の老僕ふて。喜吉の乱ふ殉肚所て人ふ誉られ幼紀當時小可ハ總角ふく母と
倶ふ舊里ふ在り一時も王家の後の事ふとゐやも知ど

○文政壬午

いひーふ去る夜三夜霊夢の告ありけり壁言ハ甲曹ゐる一個の老武者我枕
べ方ふ立あひく我ハ嘉吉ふ戦歿ゐる春王安王君の小傅大塚而作三成是
ゐり當日我子番作一戍ゞ忠義の操を感ぜり然ども其地方ふ在り然ども美濃の金蓮寺ハ両公達御終焉の林刹ゐゑハ
那里へ返ーまゐらせまく欲を汝悄地ふ主従三個の髑髏を穿合ゐりて垂井の
寺へ赤面せゞ其日必我孫ゐる里見の家臣六士の一人大塚信濃成孝と喚做を
者ふ逢ふとあら其折這詛と他ふ告ゐゞ成孝宜く計ふべ奴ゐ疑ひそよくせよと
示さゐて三一度のさゐゞ霊夢三夜ふ及びーがうちも閣れゞ件の如く做て癒ーん
ひーふ果ーて刀祢ふ逢まゐハ噫奇ゐる哉ハ異かりけゐ神謀ふ叵ゞぢやと言老実
達て告ゐるふ成孝ハ愕然とゐち敬禹ゐて且訝びて原来汝ハ然ゐる者ゐゑ狭
我も亦昨夜の夢ふ其詛と親の告ゐゞと見ーー霊夢ゐありゐゞ泡沫夢
幻の果敢ゐを憑ふゞへ兄ふあらゞれゞ人あり説ゐ知せざりーふ自他夢の異ゐゞ
今ゐち何ゞ疑ふゞ誠ふ不思議の事ゐりと若て駈て自餘の犬士と大照文を
見ゐて各日今ゐる如ー咱ゐハ當寺の住持ふ告て両公達と我大父の髑
髏を改葬るべーゐれども律令ふ改葬ハ手孫必二百の忌あり伏姫神の勅額ふ
然ーも憚りゐれあゞゞ各位ハ先へふ史咱ゐハ這詛を做ー果して後よりこそ
改くべゐれとゐを七犬士ゐハ少ゐあゞゞいひでゐハ然ゐる僻ことせん和殿の大父ハ我们ゞ大
父ありも異ゐゞゞ然ゞ共伯ふ這留ーて其葬と幇助てんと誂まれゞこ犬も倶ふ
ゐふ佛事ハ是必家の役へ見捨てもくゞ足ハ約りてゞ咱ゐも倶ふと誂洵
ゐる照文ハ推辞めて所詮甲ひとりゐんより皆這驛ふ逗留ーて其葬ゐ果て
後ふ倶ふかくもくとても既ふ廼名代の事果れゞ憚るふ似て合ゐふあらゞゞ咱ゐハ
勅額を守り奉りそ當驛の歌店ふ在ん這笑いふと誂まれゞ大家皆佐ゐ黙

頭で。其説説切て穏便へと。悩るを信濃ハ禁めて切ゐ。開ハ屡ゐ事ゑず。今
夏人數ふて寺内へ入らべ。友て事の障りあん各位ハ先宿投て事の成るを竢
ゆへ咱等ハ這局平と伴當四五名を従へて入りて寺僧ふ相譚ふべーとふふ大家
諾ひく。先紀二六喜勘太等ふ吩咐て好宿執れとそ遣ーけり。小程ふ矢塚
信濃成等ハ局平等を従へて。金蓮寺の玄関ふ呼門つ。則役僧ふ面談ゑく。
告るふ追薦の事ふ及べ役僧亜ふ告難て。躯て客殿ふ請待しつ。甘ど看
ゆるる程ふ住持ゑく對面を。當下成等ハ住持ふ向ひて生るる如く。且
局平ゞ靈夢の事さ。明々地ふ説ハ不せべ。住持ハ歩ゐて感歎ゑそ。那両公達の
ここも然しも京都将軍家ふ憚りるふあるねども。既ふ許ヨヌの年を歴てこ四の
御代代をあべ。今ハ已心べもいゞそ心汚てそいふれとふ。各ふ障りゑるーらべ。成等
頼びて又ハ咱等ハ去向をらそゞ者ゑ。且一路の主僕百二三十名あり。開ふ中ふ
七人ハ咱等ゞ義兄弟ゑそ。一個ハ今番京師ゑそ。大禅師ふ做されるゝ大と喚
做を師父ゑて仍り皆葬事を資んとそ。倶ふ當驛の客店ふ在り。尚日景ハ高
かるふ今より改葬せまく欲せさの誰を許容れあらねか。と請れて住持ハ推辞ふ
由ゑく。開ハ性急るる事ゑゞら。旅中とあれば是非ふ及ぜ。左ゆも右ゆも約ひてん。と
答て仮坐の役僧ふ事係々と吩咐て。辞して奥へそ退りける。當下成等ハ件の
一義を、大禅師と七犬士等ふ告んとそ。玄関ふ出てゑるに伴若當黒ふ吩咐て。驛の
客店へ遣ゑ。却局平ゞ癪しるる両箇の髑髏あり。又一箇の小瓶ゑ。小瓶両箇の小瓶ゑ。大人の髑髏
見るふ果して一箇の小瓶ゑ。小瓶両箇の髑髏あり。又一箇の小瓶ゑ。大人の髑髏
ありければ。哀悼の涙胸ふ満て法然るを然氣るく多早く蓋をうち西復ひく。
故の像くふ掛る素を局平ふ仮せて。然而役僧ふ髑髏の事を告ひて指揮ふ
任せかば。役僧則心汚て一両個の道人ふ両箇の小瓶を受令らせて。躯く本

堂ゐる僧の御前ぁそ居ゐける。仆程ゐ大阪大江犬山犬村。犬川大田犬飼等の七犬士ハ、大禪師を先ゐ立て伴當夫役過半を引て金蓮寺ゐまゐけれバ道人案内して客殿ゐ造らゐむ。成孝旦那ゐ坐を讓りて改葬の事悉ゝと速ゐ告知まれバ大家歎ぶ斗ゞ中ゐ、大ハ然ゐそと微笑て酒家ハ使の來ゐるを俟て其詛ゐんと思ひゐぁ夫役等をさへ招て遣ゐく坐て待ゐ。飛人ゐうち向て長老諸彦起さゑん為ゐとゐ間ゐ役僧ハ又遽ゐく光臨を展ゐくゐ。住持幷面ゞ、げれども法事ゐ程ゐくハへ葬果て見參ゐらべ。各礼服の御准備ハやと向へバ成孝欽ンハ衣裳ハ皆准備ゐりゐそ。せバ役僧ハ阿と応も果ぎ走りて奥へゐそ退ける。惣而沙弥喝食等ハ、大及諸犬士ゐ茶を看め果子を薦る程ゐ讀經の法師等を本堂へ聚る鐘を撞鳴せバ。沙弥等も伍だりゐけり。登時八犬士ハ伴當ゐ持せる袱裏を解開て

ゐめく食ゐ坐ゐ。白麻の衣麻の社衿を被更れバ、大ハ素ゐり袈裟法衣ぁ。又執拄杖ゐ立もゐく犬士と倶ゐ身を起して齊一本堂ゐ赴ゐ。俗ぇ離れて客坐ゐ居り施主の成孝を首ぁそ犬士等ゐ程ゐ列坐せり。既ゐて讀經の法師十口許同色の袈裟法衣ぁそろ。先本尊ぁ瞻拜ゐ。經案ぇ並べゐる左右二側ゐ連り立て銅鑼ぁ鳴し、水魚ぁ敲ゐ梵唄數聲唱ゐる程ゐ徐ゐ坐ゐる。住持の老僧萌葱紋紗の僧衣ゐ純絳の錦繍の袈裟法衣被てゐ拂子ぁ採れりける。左右ゐ従ゐ両個の沙弥ゐりゐ爐ぁ執り如意ぁ執れり。住持則佛前の倚子ゐ凭りて両個の小瓶ゐろ向ひて眼ぁ閉く念誦ぁ凝せバ。高足發聲の法師其間毎ゐ鐃鉢ぁうち鳴して。既ゐ讀經ぁ促ぎせバ衆僧各経巻の緒ぁ異口同聲ゐ誦出せバ。住持も倶ゐ聲ぁ合せて諳讀ゐる。半晌許、大も倶ゐ是ぁ幇助て同経同調聲ぁ惜ゐぎ清亮

とゝて高けれ。宛春の百千鳥百囀のそゞ中ゟ加陵頻伽の聲ある如く清濁雲壤爭難さる。衆僧憶ぎ皆ゝ樂本て驚馬ゟ見て憚る色あり。依而讀經果ー加ゞ住持い椅子を退けて衆僧と共侶ゟ又經を讀梛児をうち鳴ゝて匝る事許多番既ゟ輪り果ー時住持則本尊を瞑拜ー香を焼ゟ佛足を戴ゟ念ー訖りて退て小瓶の髑髏ゟ廻向ゟ水をゟる賜楪無を採りて散ー眼を閉合掌ー春王安王弟兄と大塚匠作の法師を唄起ー且菩提を唱へ施主の功徳を讃ー更ゟ諷誦文を誦讀ー訖て徐ゟ退て胡床ゟ着く程ゟ高足發聲の法師鉦をうち鳴ー高く六字の名號を唱れば衆僧倶ゟ聲と合て連ゟ念佛ゟる程ゟ一僧身を起ー来て施主ゟ焼香を薦れば則戒孝を首ゟ大士ゟ皆迭代りゟ找ゝ歩て焼香礼拜ー退けば最後ゟ、大も焼香ゟ是ぞ法事い果ゟけり。登時住持い胡床を離れ衆ゟ先戒孝ゟうち向ひて改葬の功徳を稱へて更ゟ、大ゟ名對面ー且ゟう師兄を大禪師の高僧ぞゝまいると美れば道ず師知ゝれば憶ぎ垂礼を仕りぬと勸解を、大ゟ少あべいりでゟい其義まゝん拉初ゟ客僧のそ那三髑髏い和僧の道徳ゟ縁ぎるとを汚ざるべー先追葬をいそがせまへとゟ住持い応を考ー辞ー方丈へ退りけり。依而犬塚信濃成孝ゟ伴若黨潜地喜勘太と息部局平を召登ー両箇の小瓶ぞ舁下させて卸役僧ゟ案内ぞ請へ役僧則先ゟ立て春王安王の軀を瘞ゟー舊塚の傍ゟ造ゟゟむ諸大士、大も戒孝と共侶ゟ約て是を見ゟゟ口一丘の土饅頭のそ朽る窣都婆三本ゟり。成孝も亦諸大士も愀然として懐舊懐古の憂情ゟ勝ざりぬ。然而在るべき事ゟ在れば夫役ゟ吩咐て件の塚を穿起さするゟ夫役ゟ皆ゝ穿程ゟ既ゟて日の暮ー加ぞ寺の道人ゟ鍬鍬釜等ぞ貸借出させて力を勠ー穿程ゟ既ゟて則當

けんらすきちやそう
犬士等則役僧ホ薪材をそゝぐて。夜作の便ホ志既ホ故骨ホ逮ぶ時法
しよくうだくりやぐ
師四口許空て。或ハ線香を焼或ハ木魚をうち鳴しつゝ異口同音ホ讀經をホ
ねんとなうすゝ
程ホ。大も亦復是を幇助て讀と約莫半晌許既ホあて讀訖て先春王安王の
髑髏を欽めくる小瓶を窓ホ下さあむ當下法師等ハ。大ホ引導を請ひかゞ。大ハ
竟ホ左ホ蕉火を採り右ホ木鍬を攉て栈て
諫譲三番ホて鏡ホ。
窓ホうち瀉て高く引導の語句を誦て偈を唱へ喝を吐く其聲の妙多のゝ骨
相感ありて猛かゞ旦其眉間ホ。毫光怒然と散徹て。宛ゆを照ホ。
蓮寺の法師等ハ這光景ホ駭嘆て敬服せざるはなけり。這時匠作三成の客ハ
距と西へ七八歩ホて夫役等是を穿果ホかゞ成孝則其髑髏を安棄して四
僧經を讀。大引導ホ其所作始ホ異ることなく鍬を
採りて三箇の葬穴を埋ホ穿る時よりも最多勉て故の土饅頭ホ做ホーかゞ寺

僧等三箇の窣都婆を建ホ。香案を備多ホ犬塚を首ホ。諸犬士都て焼香ホ
果て。却夫役等を叅て。大と倶ホ寺僧ホ。
れが短くて道人が撞ホを初更の鐘鏑々ホ。登時役僧出て來て。大犬士等ホ齋を
薦む。夜分ホれが非時と唱ふ湯淘飯ホ。三四の菜蔬あり。伴當夫役局平
まで皆従者子舎ホ聚合せて。夜飯の歓
役僧ホも向ひて改葬非時の歓待ホ遇る事ホ。當下成孝ハ諸犬と倶ホ
勅額を徽ホて安房の稲村へ還着ん。
蜑嵜照文と喚做ホ着伴當數十名を
三十餘名。今日葬事ホ髑髏者ハ他と同宿ホ
まて三个日追薦の佛事をせまく欲ホ。
主僕三十餘名ホ止宿を饒ホーめんや。饒されず。別ホ歇店ホ求むべし。

あらざ明日より二日の法事あり道寺師の憑心なると譲るを、大八曰あへぬ其謹
あさ當らえ只是和僧の引接をこそ施主の願ふ所なれと咎て餘談も既畢びぬ住持いよ
のよ敬服をこそ取又ヲ辞せざ辞して方丈へ退りけり既ありて這客殿ゟ他人あらざ
多ーかば道節がゐる犬塚和殿も暴養ゟ館の賜りうる路費の黄白栢有べし。
あられども我主僕百十數名ゟの地ゟ這留の房銭と追薙二日の法事料并ゟ
祠堂金と建立三箇の墓石料ゟ必や足らざるべし故ゟ我自餘の義兄弟等と
夙く商量あるべきを我先盤纏の餘るべきを三十金和殿ゟ借まへらざくとのひ
つも懐を捜拠て件の金を倉ゟ出せば下野親兵衛荘ゟ豊後現八兵衛大学も
各財嚢を解開てるふく倉ゟ出せ三十金を賜て一緒ゐうち合まれば二百十両とぞ
數れける當下自餘の六犬士も倶ゟぶゐう犬塚今這金をもそ和殿の急を資
助ゐる我們が断金の志ゟ反て薄く館の御恩澤ゟ究めて厚ゟるそも和殿の孝

ゟ誼什麼と談まれば役僧甘合て开ゟと易かり方僅住持いるるあり御一路人の
大禅師ゟ活佛ゟそ在べけれ一宿へともに東道せば結縁の歓びありとそ信服せ給ゟ然
せる歓待ゟをを畏ひゟぜゟ銭をでも在せかーとゟ戒孝欽びて开ゟ幸ヨかり記就て
何まくもゟ筆あり本驛ゟ石工あやあへ課て二箇の墓表を作せまく欲るのをと
ゟを役僧うち宥て然ゐ這驛内ゟ宇賀地野見六と喚做ーる一個の石匠
あり弟子両三名を使ひゐそ細工も亦拙ゟぐ年来當山へ出入ある定職匠でゟ
今宵人を遣して其状を心ゐさせてん明日ゟ夙めそ参るべーと仰戒孝欽び兼そ
そも亦便宜のゐゟ己必憑なるとゟ役僧心沿果て又遽ーく退りけり姑且て
住持の老僧ゟ一個の沙弥ゟ指燭を秉らせそ徐ゐゟ出て来ゐ、大と犬士をゟ
非時の疎畧ゐーを陪話て且ゐゐ只今役僧ゟまさをのゐーゟ御追薦の讀経の
事各當寺へ止宿のゐ都て心沿ひぬ禅師ゟ実ゟ神僧そ野納ゐ及ぶ所ゟ

縁ありてよりし折からにありけるなる。と異口同様に稱れバ成孝ハ然なりと応へて件の金を受
戴きて懐なる勸肚に楚と斂めて答るやう寔に一心異體なる義兄弟にあらざり
せバ何人かよく我を資助ん其も亦館の賜ぞかしかくハ没らげるべけれど這儘先須
アてんと答て感嘆なりける。這時、大ハ厠に登りて姑且這里に在ざりければ後に
其の義を知るべし。折から又撞出せし人定鐘の响くにぞ沙弥道人出て来て為に蚊
帳を垂れ臥簟を設て退けバ、大犬士ハ共侶に躺て枕に就にけるが其の次の朝、大
犬士等ハ倶に夙く起出て斎も既に果し折役僧が告るやう昨宵示させぬひし義を
石匠野見六許し遣しけるに野見六ハ自今地車二輛に墓石まつく積登せし車
奴五名六名に牽せ来て御客人犬塚ぬしに拜面せまく欲とおしけりあくへ召よせなんハ
んやと只に成孝詳りて其ハ心得ぬゆゑそハ罷越しからぬハ召せぬと応をすれバ役僧ハ
道人を招きよせて那野見六を召せけり。姑且して石工野見六ハ年なる茶染の絹の

單裡外套を畳し随に握り持て客殿の邊まで来て先役僧に會釋しつ却次の間に跪
きて小可ハ宇賀地野見六也。犬塚様ハ在するやと問バ成孝枝を出て犬塚信濃ハ則
我也。汝ハ我を知る故と問返されて野見六ハ膝を找めて近づきて然ン候今より三十日有餘前の
日に年紀五十八九なる一個の武士我店舗に来給ひて三座の墓石を誂ふ石の小大に注文あり
是ハ當驛内なる金蓮寺に建る墓表ぞかし七月某の日まで遅滞なく造り出
しなね其折安房の里見の家臣犬塚信濃成孝と喚做る武士の来ぬるなありなく。
墓石の價を遞與すべし心得てよと宣せしかバ小可答て仰承りぬ然ればども些の
内金を賜らずハ作事の手創を致しがたしと其金子携へ給ひしやと問へバ那武士沈
吟して否とよ今日ハ我懐に財なし然バとて遅疑すべからずとのひつく懐を掻撈
りて純金なる小鐶一枚と又純金なる両箇の鐶を合せ出してそと小可に渡して
宣ふやう是三箇なるが純金なれバ價十餘金に當るべき東西ぞ權且是を留

措ねれ犬塚が來ゐる及びて墓石の價を取る折ふ互易ふことをまべけれと言正
首ふ課されば小可則心須果てゐ實一通を寫てまゐこる時其姓名を問け
るふ否我名ハ生ゐふ及ぎ徑ふ犬塚信濃と録ーね那人必知るようーゐらんと解
示ーくゐ實を受會りそ飄然とて去ゐ約めし究慥而昨日ハ細工成就ら約
東の日でゆへが形の如ふ彫果て施主方へ使程ふ昨宵逋寺の役僧様ら御
使を下されて客人犬塚主の所要あり羽意の朝ハ所ふ歩よとありーかば必是ら詳
きさる二公固の墓表のゐるべーと小可早く心得て皆地車ふら載て牽せて參の
ひゐと言詳ふ報ーかが犬塚が疑惑いさえ諸大士、大も訝りそ俱ふ眉をそ顰
ける當下成孝ハ又野見六ふうち向ひて汝ら今告知せゐる其事ハ実ゐるべーゐまどこも
いまさ心ゆぎそ那内金の代ふ受ーとふ鍔と鞘とりそ來ゐるやと問れて野見六応も果
ぎそ懐紙をうち開ひて开ゐそふ。とりゐそ件の二種を渡せば成孝受會りそ左見右

見ても思ひ泥ぎそ自餘の犬士ふ示ーてらゐうつ
桐華ふ一の字を彫ゐ是則今我佩ゐる短刀の鞘ふ似ゐ這短刀の事いあも犬
川ーそよく知りされ昔犬父匠作翁の世ふ在そうー時小母亀ふ條刀自ふ取せめひ
ゐぞ故ありそ我成孝ふ作ゐる桐一文字即是ハ
言卒介ゐひへども當山の宝藏ふ春主安主君の像見ゐる短刀ハいかぞや且當這
寺内ふ戰死ある犬塚匠作ふ成の軀いふうふけん且其折三成の身ふ着ゐる
錦衣身甲大刀ゐどを藏められぜいやと問へば役僧も沈吟ーて否犬塚翁の亡骸い
當時總大將清方主の下知ふりそ市ふ棄ゐと偽へ歩るのふ幷ゐ大刀ゐどハいかぞ
但ー春王安王君の短刀ハ今も藏りそ宝藏ふ在り只手の六月毎ふ出ーて虫を拂ふ
のをとりふを成孝うち少てまうらハ最自由ゐうう其短刀を見まくねーいので方丈へ願せ王

ひて。疾一見を饒へ。と請れて役僧推辭ふ由なく。応をあらず退出て。俟ること半晌許。偖而住持の老僧い那両口の短刀を表皮の儘ふ役僧ふ持せて。客殿へ出て来つ。成孝等ふうち向ひて。只今何う奇事あるふより。一見を請れる。那両公達の短刀と。稍會ふさゐの紋とハ。役僧心得て。卒と遽與ふ短刀両口を。成孝等へ受會りて。表皮の紋を。解用れば。會ふ出して。是を見るふ。旦則右ふ挿るべし。長短ハ共ふ一尺有餘。表莊ハ同樣ふ。両口ながら鍔ふけれども。疑詞ふ。住持と役僧ふ示しぬ。這短刀ふ。鍔あるに。素より偖而ハやと。問れて。両僧驚き見て。互ふ鍔ハありけるふ。幾の程ふ失ふけん。不思議く〳〵と。々々とぞうふ。尚疑ハ解ざりけり。然バ。大も諸犬士も。倶ふあるふ悟れども。安定ふのふりしるる。當下成孝膝拍鳴らして。是ふ思ひ會れば。是最ふ這野見六ふ三箇の墓石を誂て為らせ。とふ。那武士ハ正ふ是我大父大塚公羽の亡魂の。假ふ顕れしるぬぞとあるむぞん。然がてぞあれ両公達の鍔を前の價の代ふあるふ。且這鞘ハ土蝕あり。意ふ我大父の腰刀の戰死の折紛失て年来土中ふ埋れる其鞘ぞと會ふ出されけん。今其所を知りがたを遺憾と。最も怪しるるぞやとのふ。大も諸犬士も。住持役僧野見六まで。寔ふ然へ然もそとそ感嘆せざるハなりける。偖而成孝ハ件の二鍔を故の如く両箇の短刀の柄下ふ返納めて。桐一文字の鞘を留めて。短刀をのみ返しての給ふ。目今見聞のごとき。一大奇事もハへなし。願ふハ其短刀をのみ。贐られ寺宝ふなされて。記録ふ載させのへ。と頁めバ住持も異説もなく。其意心得ぬ法莚讀經ふ程もなけれバ退りそ准備をあらべとそ。其短刀両口を役僧ふ受會らせ。弊て奥へそ退りける。偖而成孝ハ又野見六ふ向ひて。ふの如う。汝も既ふ知る如く。汝ふ墓碑を作らせハ我大父の霊ふるべし。事怪ふ過たれども。倘其事微りせバ。ふのふして今日速ふ墓石を建ることを。汝ぢや。寔ふ大父の賜る哉都の價い幾許ぞと。問バ野見六欸然ハンハ二箇の御墓の石の價と細工料と相

共ふ十五金ゆて兼まるり出とらふふ成孝點頭て則圓金十五枚を會ゐ一別ふ一枚を相添て是を野見六ふ會らせてらるる汝始より疑ひで那訛を果せうが我い意外の便宜を幻ろ其一両い賞錢そとられて野見六怡悦ふ堪ぎるる有ぐうたまそ辱ち御好意を受まるり及と応て金を財嚢ふ藏めて率や御墓を建ひりんとらひうて先ふ立び成孝い先其石を見んとそ倶ふ身を起ま、大禪師もうも連立て外面投て歩ふひる姑且て道節がのるう哥うまるいのふ思ふやうん昨今の奇支へとそ去歳の四月結城ゆて法會の折季基朝臣の御墓石を造うるぎ一那十僧の奇事ふ似て二の町るれが珍一かるぎ。とふを溷智推禁めて然るのいそ大山甲とむとい其事相似て其趣い同ドかうぐ是則正對へ矧又大塚い孝子へをもて孝玉を感得て其名を成孝とを是等の孝感るうるぎや是も亦勸懲ふ係る所を思ひぎあそ。只相似ぐちとのまらぐ目屎の亡ぬ人るべ一。とひう呵々とうち笑へい道節即も自父一て敢又掛念せぎそ自餘の犬士と倶ふ力を引提て外面へとそ立ふけり。徳而八犬士、大禪師い野見六が造の做一たる。君臣二個の墓碑を見るふ春王安王の墓表い石も最上ゆそ。細工も精一く前々代る當寺の住持の命ゐになる弟兄の法號を彫做あそ。嘉吉元年五月十六日と勒一たり。這二甘基の墓表い今も垂井の金蓮寺ふ在り。又大塚二成の墓表い石も劣りそ形狀小さく是ふい只義烈塚翁之墓と勒ありら這墓表い今有ぎを知ぎ然が大塚ふ孝の諸犬士、大禪師い共倶ふ是を見そ是も亦那靈の心を用ひ所狹と思へらく感嘆を尓程ふ息部局平も夫役もも件の奇事を吟知りて駭嘆せざるいるく。招ざれども歩て來て壙を運び墳を築ひらく野見六を幇助一かるぎ半日るらぐて三甘基を皆建果て。野見六ゐ辞一去りけり。折ふ追薦の讀經をと歩えーかぐ諸犬士、大い衣裳法衣を更めて本堂ふ列坐

為ること昨日の如く住持の道導師を、大ひに譲れども敢せず、大ひに猶客坐ひに在りて助
聲あるのみ。這次の日もかくの如く二日ひまで追薦の佛事果てかの成孝も亦墓詣
まで香を焼き花を供へ又客殿ひに退きて義兄弟ら と商量あり役僧を招きよ
せて目録をのべ布施を渡ひ改葬并ひ二成の祠堂料金三十五両通計五十金ると役僧見
房錢金五両春王安王并ひ二成の祠堂料金二十五両通計五十金ると役僧見
ばく歎び受て退きて住持ひ告て照書一通を呈閲せ其後又成孝が局平を客殿へ
招きよせていふ。洪い大昨日より辱くも去んとすれども我留在らせい案内を憑まく
思へば抑洪の老實ある。徳ひよりて料らずも二髑髏を改葬ひ於ては亦ひべくもあ
らざるか。是を傍観ひ取まるにそ圓金三十枚を與れが局平い夢にとぞりひ天ひ歎び
地ひ告びて受戴ばく懐へ楚と斂めて拝舎するやう。然まではのみをせざりーひ這大金を賜
ひ易く受ると。これ真如あるにそ胸安らびて是よりそ田圃を買殖して宅着と優ひ養ひて那里へ往
ひも郷道を仕らんと惱るを成孝うち笑て否とよ異ある路ひあらず改葬三日の忌あり
今日まで亦果ぬが明日より東へ還る序ひ小徐村へ立ちよりて我外祖父母并丹二
直秀翁夫妻の墓ひ詣まく欲ひ其頭の案内を憑心のとぶと局平ぬ申ひ易く
とも易く受ると答て能く伴當の居る處所へ退りけり。當下成孝が夫役の老立てる者。
両二名を召よせて他ぬが客を守り。墓碑を建ん。燭穢を四散ざりける其老實ある梓
匠を誉て身淨の折乾ひそ。小方金十片を與へかの夫役ら皆雀躍して歓びざ
るらるりける。左右まる程ひ日の暮ーかば、大大
這精舎ひ明あり。詰朝い主僕厥く起出ける役僧浴室の准備あるとかの大家迭
代ひ浴まそ已心劇の身を洗ふ這時大士ぬも。這地喜勤大を照文の宿所へ遣して。
今日這地を立去へると改葬并及墓石の奇事を告るごと照文も其ちろ得あれば身
装して俟るべし。偖而、大諸大士の主僕の早飯果ると能く故のごとふ約装を整

従て。住持役僧等に別れを告て伴當夫役と局平等を将て。金蓮寺を立去る程に。
二町に過ぬ照文も亦。紀二六以下の伴當に那勅額の長櫃を舁せて。這方を投て
来つるに逢ひけり。當時迭に近づく随に一霎時路傍に立在て。會話をしけり。其が中に
照文は今朝しも知らる那奇事をしも説出て犬塚が孝感の幽冥に通せしを稱賛して成孝は
亦小篠村へ立よらまく欲するのよしを告るに皆もろともに是より亦主僕故の如く百十數名
あり。しが夫役等は立替りて長櫃を舁て従ふ其の日より二日にして未下る時候小篠村に
来りければ局平は拈華庵の墓所なる井氏夫妻の墳墓に案内をしつ奴隷の母と夫役
等は憩ひて柴門の外面に在り。又局平は水を汲み樒を求め来て件の墓に建るもの當下
成孝は栽して其墓を見るに。親の話説にしも似ず何人の建たりけん。三箇の墓石あり。
直秀夫妻の法號と。歳月を勒したり。其が右の方は昔年父番作が那三首級を悄
地に瘞めける処なるべし。是も表に局平が穿起たし壊の尚乾もやらせて土發の跡に似たる。成孝は

なの墓あるを訝りながら跪きて合掌して念じ果て退けば自余の大士も大禅師も迭代に
廻向しければ。偖而成孝は又局平を案内にして拈華庵に呼門て則庵主に對面を素
めしに村落の小道場なれば客殿はなし。ヨシ客を容るに足らざれば。大士自余の大士等は退
きて外面に在り。或は庵の檐廊に尻を掛るもありけり。裏面には庵主と同宿の尼女僧とあるを
居れり。當下成孝は庵主に向ひて在俗は安房の里見の家臣にて犬塚信濃成孝と喚做
さるゝ者也。當所に墓ある井丹三直秀翁と其孺人は我母の二親なれば外戚の偶這地を過
るものから參詣しぬと告て香奠の東金一枚可を呈すれば庵主は満面に笑みて受戴
しつ。佛前へ供じて却答る。那井氏のことは昔當庵の大檀那でおはせしに嘉吉の乱に那
家滅亡て墓表だにならざりしを前代の庵主の時幾稔か募縁して這庵室と両輿の折
件の墓を建らるゝ昔年數牛と喚做たりし庵主柱死して庵も共に焼亡せしかば久しく無
住でありしを前代の傳真庵主は拙僧の師にてありければ原来和君は那井氏の御外戚に在ぬ歟

尚青年ふ見えゐふ御孝順ふるゆふ。とふ。ふ間ふ同宿の女僧が茶を煮て薦めけり。當下成孝ハ茶を受飲ふ列々と四下を見ゐ思ふ。昔我父少かり時這庵室ふ歌を殺そ破戒を斬ふ庵主を誅して料らずも我母刀自ふ名告會のひ。是天縁の尊ふる所。孀住の創成りとそ我總角の比親の夜話ふ吟ふ。思ふきや今其庵ふ立ち寄後の庵主ふ逢んとハ一善一悪人同じからず。一去一来其地ハ同じ浮世ハ環ふ似ゐけり。と思ふ心ぞ父ふふそを偲ふ故事を人ふ知られそれを辞の下ふ倚ゐる敗刀一口あり。柄と鞘ハ朽果それも由来ある風ぐ思ひゐるふ庵主ふ向ひて件の刀ハ故りやあると尋るふ庵主答へて否那敗刀ハ然ゐる故もひ。と十日有餘前の夜の事ゐべ一只今詰めひ。草叢の導を寧起ゐ。者あり。欸と彰くて其頭の上の異ゐれバ拉僧是を見て思ふ。ふ。倘柱死せ人の亡骸ふ悄地ふそ埋める刃人の所為ゐぞやと尋思ゐれバうちも措ず。秘密ふく其頭を穿返して見せけふ那敗刀の出ゐるのふ。白骨ぞゐもあると。刀ハ土中ふ久く在けん。

朽れバ銭ハ爛ねど好者もゐるゆふ。売らばやと思のふ。と報ゐる。成孝うち点て思ふ。よゐある。然氣ハ失せ件の刀ふ請ゐて是を見るふ実ふ土中ふ幾稔欵埋れて在ふけん。表莖装ハ皆亡ぶれども鍔と刀ハ朽もせず且柄下の四字銘あり。桐一文字と讀れ。悔然と驚くまゐふ且感ゐ且歎ゐて肚裏ふ思ふ。原来這刀ハ我大父戦死の折まゐも腰ふ佩のひ。を我父其首級と共ふ奪ゐ。そ大蛇くまゐ兵を殺脱て其首と共ふ那里へ埋めひ。ひ。我ハ親の話説ふ首級の事を聞ゐのふ大刀の事を忘れども。這大刀ハまだかの折ふ埋めひ。ふ疑ゐ然バそれ幻ふ比大父の霊ふ前償代ふ野見六ふ今まで也ける。靴ハ則這刀の鞘ゐと是も亦自然ふ出て疑ふべ。ふ。下ふ在ゐん這故ふ局平ハ知らで穿ざりけふ友て庵主の獲ふせられて銭視ふ被ゐ来思議さよ。偖と知ねど那折ふ金蓮寺へ寄進せ。故のぶく這大刀の壮衣ふ做ふ便ゐ。事ふ暗合是も亦自然ふ出て鞘ふ出処を今正可ふ知る娘ゐさよと肚裏ゐる自問自

拈華庵ホ悌順勁力玖見ヒ

犬村

犬坂

犬川

犬山

犬塚

犬飼

犬江

犬田

犬川

犬塚

答ふ。と言ふ出さぬ然れども又庵主向ひ這大刀咱等貰とるべし償ひ何ぞるふぬや。
と問ふ庵主吟ぬ也。銚二百まれ三百まれ宜く取せのひひとらふ成
孝懐より拿ぬ出小方金二片を鼻紙ふうち載く。卒と庵主ふ與ぬ。庵主も受
ぬ怡悦ふ堪ぎふる過分る造化と謝て硯を曳よせて受含ぬ手實を成孝ふ寫て
渡ふ聲高ふふ尼前よ其頭ふ在刀祢們ぃ主の一路人ぞむぎらん推並て茶をま
ゐらぎやと追従歎待喋々ふぬを。女僧の答て否。水ふ。汲ぬ来てんとふ桶を引提て
出ぐ東の方へ急ぬを成孝ぃ訝そ。又庵主ふ向ぬそ這庵ふ井ぃ泉ぬやと。問へば答て然ぃ
ふと。素ぃ這庭の東の方ふ清泉ふ。二六時中涌出て水ぬ富ぬひふ十稔有餘前ぃ秋酷
く地震一時上の山ふる大石滾隊ぬ。井幹をうち砕ぬ。是より水を失ひ今ぉ四五町東ふる石滴を汲含ぬ
便ふとふ。然でも庭の樹梢敏く剰東を大石ふ塞れぬまぃ這坐席の薄闇ぇも
故ふかる。とのひつも又其石と見て檐廊ふ尻を掛ふる大田豊後ぇ喚被て哥々よ和
殿の膂力ぉ那大石ぇ北のふへ轉し遣んも易ふぁべ。とへぃ悌順令笑て否我とくも
五大力士ぉぁらばれがらもぐふ思ふねども何事も人の為ぇ成欲不成欲試てんとふふ羅外
奈を脱捨て野袴の稜祜を刀ぇ皆月のふへ続て身を起ふく其大石の邊へ杖ぇ近つ
猶ふく胸ぉ是を計ふぉ石の高ぃ五尺許。上尖りて下大く徑四五尺ふべけれぃ井を塞
理のぁぇ哉百毋負ぁるやらん実ぉ千曳の巨石ふを悌順ぃ物ともせず隻手を掛て推
試ふぉ齒の揺ぐふ如揺めけの是でぃ好と両手を掛て曳と嘯て捩反ぇば千曳の巨石
根を離れて只是臼を輾も像く悌順のふぉ従ぇ二三杖北のふへ寝ふを梵と推居
けり大石既ぉ除れ。跡ぉ地泉涌出ふ。庭ぉ溢れて已ぎれば親兵衛道ぉ即現八紅衛ぃ
其頭ぉあり。圓石の輕重弐ぃ八九十斤。弐の百斤有餘ふを最も易像ぉ食撓駆
ふ。敗井の西ぉ居ふべ立地ぉ井幹成て其水溢れぬるりぉけ。ぇ這事の光景ぉ庵主云

はらえん庭門の邊ゟ在りける局平も目今水を汲会をりて〻〻多ゟ在ける同宿の女僧さへ倶ゟ
腰を浸して引提たる桶を會を洛せ給ふ迚の斷離れて潑と散水ゟ四下の人さへ辟易
まで大家吐と矢けり姑且あく大村大学が大田豊後ゟ向ふそらやう和殿并ゟ犬江大
山大飼ゟ力戯会を見て庵主ゟ水をうさせよう是も亦仁の一徹ゟ武の至りとりう
べし咱等ゟ又文をりそ復泉の記を貽さえとそ墨半の筆を援ゟて徐ゟ件の古ゟ
栈を近つけ軈を添て石の平坦る処へ記文一編を寫着るゟ毫も稿を設るとなく揮の
ふと一ど二ど三ど如く速ゟ綴り果て編左ゟ歌もそ賛あけり（作者云這復泉の記に必漢文あるべし
且文の事くるを厭ふの漢文が看官の瓦てぶせく思ふもあらん。故ゟ省てもゟあり載ざるなり）當下瀏智是を見て大田が膂力あ及ぶべうも亦得
ざう然ばとそ今言るくら後ゟ悔ゟりぬべし栈も似而非歌を添んとそ遣即其亳を借て
又一詠を寫ゟ一ゟ餘の六大士も興ゟ乗を谷歌を詠出ゟ次第を追そ錦帳
蛮崎照文も庭門ゟら栈を入〻〻列〻と見〻只管感嘆ゟを親兵衛急ゟ喚

禁めそ蛮崎便〻〻和殿が何ぞそ一歌そ惜て倶ゟ賛せざるやとゝのられて照文頭絞
搥て咱ゟ風流ゟ疎けれ這野計ゟ入りかうと辭を親兵衛諸大士もゟ笑
ほそ敢競さ弁ゟ好もあれゟもあれ這大皇國人ゟそ這大皇國歌を讀ぎい水ゟ栖む
蛙花ゟ鳴く當ゟも少るべしとゝねくと譴られて困じそ一霎時沈吟して稍其巨石ゟ書
寫れば〻大ゟ栈を近つけ歩とみ見て莞尓とうち笑て諸彦上旨くやられる栈も亦蛙ゟ劣
ぢく歌られた歌ゟ泡よもねども並べて恥を遂もべしゟぐとりいつも且照文ゟ筆を借て寫
果て又栄ゟ谷悠王を連ね歌を自筆ふりのをれも是鑄ぐるふあらぐれば竟ゟ風
雨ゟ磨滅ーて一向もあらぢゟりぬべし庵主の為ゟ加持あてんとうけつ又石ゟ向て數珠さゑ
ゑと推採て一霎時咒文を唱へ〻一喝あて忽ゟ退ける然ば這復泉の記も跋賛の十
歌も後百年を歴迚も石面ゟ耗ぎて幽ゟ讀れうとゝゟある是後の話ゟ當下八犬
士ゟ聚合て復泉の記を默讀も讀果る時大学ゟ代りて賛歌を唫誦あけり其聲朗ゟ

あて妙なれば杜氏歌も学ぶに堪ず。自他迭に唱噪して欽ざるはなかりけり。然が其記文の後ぶ詞章あり。且十歌あり。文明十六年秋七月十六日大村大学頭金碗礼儀が。拈華庵主の為ぶ述ける復泉の記の後ぶ題せる一路人等が十歌一賛左の如し。大塚信濃ぶ成孝の孝感懐崔温の歌も亦その中ぶ在り。又礼儀を首として石面各即事自筆ぶ歌ぶ曰。

賛歌第一　壮士

まそらをぎ千曳の石をおろしてもみよ庵の苔清水かな　犬村礼儀

賛歌第二

埋れ井の石蓋ひらけ泓く水ぶおもきあや神もあふぎつゝの名を流さん　大阪胤智

賛歌第三

信濃なる戸かくし山ぶまします神もあふぎつゝの名を流さん　犬飼信道

賛歌第四

山を抜くちからもあるぶ健雄もたぶる程をふる石のかたぶりのかな　犬田悌順

賛歌第五

井ぶ成りぬひさごぶ汲め雲近く水遠かりし山のとの庵　犬山忠與

賛歌第六

無乳母たらち縁の住ぬ里ぶあそび見れば山もとのとの宿もあらし　犬塚成孝

賛歌第七

剣大刀二世ぐての本末をぶ盛ぶ後の庵あるじかな　犬川義任

賛歌第八

小篠原ゴけくきその山ゐ井ぶあるぶ汲見よのこもとの蓑　犬江仁

賛歌第九

糸芳宜ぶまもる山猟遊のその中ぶ秋の初風　蜑崎照文

賛歌第十

善業不滅不断加持劫火即滅八功徳水平等利益とぞありける。巧拙各差あれども。皆實誠ぶあふぶもるければ。知るも知らぬも推並て。感嘆あるも故あるかな。徳而犬塚成孝ぶ又庵室ぶくる坐して。且局平を召よせて。更ぶ庵主ぶ向ひてのたまふ。唯ぢ是純孝の身ぞ。其地も相距と亦近ければ。異日の墓詣ぶ究てかさろ。とのたまひて局平を見かへり。那局平ぶ我外祖井直秀の老僕の子ぞ。崔温縁もゆへ今ふ後ぶ他をぞ當庵の施主ぶ做べし。とのたまひて局平を召近つけて。泌ぶ素ぶ是老實家ぶ今よりして我ぶ代りぞ井氏の墓を守り祭れと。懇ろ懐を撥拂りて圓金十両を數出ぞ先其五両を庵主ぶ

施一。五両を局平が與ぐるの。其五金と這五両い井氏の為ぬ香華料ぞ。僧俗両個ぬ等分て成孝が寸志のことのられて合笑む庵主のさらえ局平い呆るくまぞぬ頭を擡ろて之を麻ぢ。ぬを又思ふ子もるに郷尚ぬ身ぬ餘ろ御恩を受まろーぬ這里の御墓を守れぞそ。折々草を芟掃ぢ忌日ぬ榴を賻るの。何ぞろの費あぐぬ然るを又這御金ぞを受まろぐとかと。推辞が庵主も倶ぬ然るの。郷尚もいへるとろぐ井氏い當庵開基の施主ぬ。果代の檀那ぞーぬ。其後ろにを憐て先住の時墓を建ぬ。況ヒ忌日の香華をぬ這御施入要ぞーと。辞ふを成孝推復ーて。開其い其談のぬぞら外祖の祀を人ぬ任せそ徳なろの美ぬ及ぎい枯者の為ぬ宜かるべろぐ柱て愚意ぬ従ひてよと。諭ーぬ金子を受入るをそ別を告て桐一文字の大刀と引提て立ぬれば庵主と女僧い満面春色ありぬ造作や物体ぞー。御廿陰で水とろろーぬ千葉茶蘼の花とーも用せのろ功徳廣大弥陀佛々々と念ぐぐ送れぬ亦局平もぬ得金子を受斂ぬ。走下ぐ。而折戸の邊ぬ跪居ぐ待

ろるべー這時犬坂犬江犬山犬村犬田犬飼ぢの諸犬士い。大照文と共倡ぬ既ぬ歩て門前ぬ在ろ成孝が事ぬるとと駈ぐ。伴當支役を従ぐ。又復路次をいそがまぐ當下局平ぬ犬塚と留めそのろう。小可が白屋い是よろーて遠ろび郷尚ぬ暇ある折ぬ走ぐろう。老嫗ぬ御賜のヨヌろと。垂井の首尾を報ーぬ他も然び意外ぬ歩。前ぢ茶を煮て待佐り。卒立寄せぬぐ。請ぬを成孝少更も不可とよ這一路人ヨヌ倦ぬ候せて那里へのれんや。遂憾く思へども。ぬ更袂を分ぬべーとのろう先伴若堂黒ぬ吩咐て推ろる桐一文字の大刀を袈裟懸の内ぬ藏めまぐ却局平ぬ身の暇を含まろ駈て衆人と倶ぬ路次をいそぐ。局平ぬ猶去難て後ぬ跟々歩ゐけるを。成孝も諸犬士も見ぐろ辞ー謝あ於ぬ路十町許ぬ至ぐ。只得其里ぬ別を告て己が宿所へ還ろけり。局平並ぬ石工野見六のろ。這下ぬ話説ろー。然ぬ犬塚成孝ぬ件の桐一文字の大刀を異日刀匠ぬ研せけるぬ素よろ鍛冶名刀ろれば年来土中ぬ在ろーかど聊も土蝕せぎ文字の鋩と鍔さ是ぬ

皆具して表壯衣ゐるを盡さ寺ゞ。桐一文字の短刀と大小一對の名物ゐ做りて。
後児孫ゑ傳へけ。故ある哉成孝の忠孝ある那村兩の大刀の如ゐ久く其身七物ゐ
做りあを。毫も吝嗇の心なく父の遺訓を果さえそ成氏主ゐ返奉ると。いまざ幾ら
らざりて於是ゐ祖傳の名刀を以ち。便是天の配劑善ゐ報ゐ善を以ち物の損
益都皆善惡邪正ゐ緣ざるとる。世人ヨヌく這理を知ゐ以不美の利を欲ゐ為ゐ
會ゐて厭食とをけれゐ那身ゐ大損ゐ。とハへゐ子孫ゐ迨りそ禍ゐ咸失ざる者ゐ寡
し。
後ハ其身のみるゐ。手孫長久の至寶ゑ愼ざゐべし。
大照文ハ又五七日の旅宿をゐて。武藏國豊嶋ゐ柴浦ゐ來けり。今來ゐ路の
程菅撫大塚の郷。犬塚信濃ゐ故郷ゐ二親の墓ハ香華院ゐ在り。又犬川荘介の
母の幼婦塚あり。父犬川衛士の墓ハ伊豆の堀越ゐ在り。又大塚ゐ犬飼現八兵衛ゐ實
父糠父の墓もあれゐ俱ゐ立よりそ墓詣をきく。後来不轉の香華料を寄進せ
きくりけれども既ゐ美濃路ゐそ改莽の觸穢已ことを汚ゐ淹留二日ゐ及びゐ今又其
頭ゐ路草ゐ喫ハ親の為といひふらし公道を踈ゐ私事ゐ恥るよ似ら。墓詣の
事いまも異日の便宜ゑ俟ゐ不如と思ひ久あら。皆共俱ゐ件の浦邊ゐ出ら。然ば
這二犬士ハ次の年ゐ至りそ義成主ゐ願ひ禀あり。俱ゐ大塚の郷ゐ赴きて是等ゐ本意を
果せ。又道ハ即ハ父犬山道策と実母と女兄弟と安房の
延命寺ゐ建立ゐ又犬阪下野ハ其父栗原ゐ百凡度と。嫡母稲城異母兄妻ゑ及女
兄玉枕。及実母の墓ゑへ右ゐ同ら寺ゐ建てそ子孫ゐ至るまで年忌月忌の祀ゐ怠る
ゐあらず。這他犬村大学ハ初犬飼現八ゐ伴れて舊里赤品ゐ出ら。時実父母艱
父母及故妻雛衣の香華料をヨヌく香華院へ寄布あれゐ其菩提轉ぐるゐ
ぎ。又犬田豊後ハ祖父母と母の墓ハ行德ゐ在り。父文五兵衛の墓ハ。瀧田ゐ在り。又犬
江親兵衛の大父并ゐ二親。山林房八と沼荘雁の墓ハ市河の郷ゐ在り。是等ハ里見の封内

るゝ且犬江屋依玖と其妻水澪と迭代ゝよく詰て忌日ゝ香華を絶ことなし又
政木大全も父河鯉守如の墓を建ちく思ひてよの後里見殿ゝ願ひ亶ゝく那武藏
豊嶋る日比の寶傳寺ゝ赴ゐゝ那里ゝ大阪渕智が五十子の城ゝ在りし時孝嗣の
為ゝ守如の墓を造建く且寺の頽破ゝ及びしを修復るとよの折紐て始知て感
涙坐ゝ吐むまでゝ歎ぶこ大々さまざまゝ又永年の香華菩墓所料ゑども既ゝ渕智が寄布
そうと吟えりぶ今さら別ゝ供養をべ事あらじ只香華院ゝ墓る祖先と母の為ゝ
ヨヽく香華料を寄進まけり然るおても犬阪ゝ其朋友の為ゝもゝ倦る大功德を做ー
ゑぐら反て孝嗣ゝ告も知せざ其おのづく知るゝ随せ孝嗣深く感佩まて稲村へかへり
来ら這筆を渕智ゝ示ゝ君子と稱て三拜の礼を約へも足まとせざ是よりの後
渕智ゝ逢ゝ毎ゝ必其席を避て諸兄の礼ある如く敬ざる日ハなりけり是等ハ皆後の
話説るども今語次宜ければ集めく茲ゝ結ぶのみ間話休題ゑ程ゝ八犬士ゝ大

照文ゝ柴浦へ来り程れ去向水陸の便宜を相談ゝ照文ゝ這里より水
路を洲崎へ還らべし速ゝあて便路ゑれども勅額あり御教書あり然を風濤の害怕を
思ひで近ゝを貪るべ況ゝあらざ只下總を至る陸路ゝて宜かめと談るを
ゝ犬の守あざでかの然る迂遠ゝ路をもち犬塚の改葬ゝ美濃路ゝ二旬を費をさ
れば日を縮や早く還るべ今尚秋暑の時それ冬の海の昏暴ゑ似ず況八犬士ゝ身を
備る霊玉あり且勅額の故をもて伏姫神の擁護もあらゑ何ぞも害怕あるべ況やと談
まれが犬士ゝ皆諾るひく師父の決断勇あり理あり徑ゑ水路ゑらべらぜそ則這浦
ゝく巨舶一艘を傭ひゐて這皮七月二十二旦の月の出の時候より纜を解ゝ果ー順
風ゑりければ同舩の主僕百十數名枕を高ゝをゑ夢裏ゑ舩の走ること幾十里ゑり
けん次の日の巳の左側ゑ洲崎の滝口ゑ入りぬけり。

作者云本編ゝ腹稿より都文ヨヽくゑるをもく四十六の巻端ゑ附録目を追加ゑ

たれども本文中皆故の題目のこゝに附録目を省くの例なり這一回故の題目あるに所
以に且長編なれば別に附録目をもて一回とまるの腹稿ありながら法會の屢〻啓
故ありて遂に去べやと思ひしかども幷も又遂憾しけれいうち棄難て這一回あり抑結城の
法會よりうち續て白濱延命寺に改葬の事あり其後又水陸施餓鬼の大法
會あり既にて最後に至て金蓮寺に追葬の事及拈華庵の結局あり約
莫一部の稗史小説ながら慈悲に佛事のうち續くを厭ひて綴り果ぬ作者の用
意を思ふべし蓋先祖父母兄弟の為に祀をなす所以なり孝子忠信順孫義士の上に必大べからざる所也本傳の大関目善を勧
まる毛ハ善を懲し約束の終也這事あるべからざれども佛事ハ訛も佛事也別に
せんさくするに者るに其事相似て其趣の異なるを好看官ハおのづから知るべく克念
ふ者ハ厭食ひて反〻喜をるもあらん左も右も老婆深切みづから筆に評注を稽

將酉とりく見るとうろう。知音の友ハ麻絖とせん狭。

第百八十回中　義成功臣を重賞して八女を妻を
却説八犬士、大照文ハ主僕百十數名。其船洲崎ふらの多ゝ則勅額と御
教書を相棒ぜ。稲村ハ歸城して這毛を東辰相荒川清
澄執達ぬ。次の日義成主ハ見參を京師の首尾伏姫神ハ勅額の事、大を
大禪師ハ做されよとまぐ。詳ハ少え上く。件の勅額と室町殿の御教書を
見せまるまでもなく義成主拜戴欣悦大〻さるらぜ。、大照文犬士をも労ぬ。
汝等ハ。徑ハ瀧田の城へ參りてく這毛を光館ハ亶ハ上よ勅額の事ハ異日の
沙汰ハあるべしとく休暇の命さへありしかば。件の九士一僧ハ船く瀧田へ赴きて。
義實光候ハ拜見をし其告まうる事毎ふ義實欽びなべうもあらず。那歸路
ぬく三國臨の事。桐一文字の大刀の事。美濃の金蓮寺と。信濃の拈華

十五日の黄道上吉の順日なれば國守里見左少將義成主島帽子朝服もて今朝も辰の比及ひ正廳ふ着坐あり。両家老八犬士諸侍皆殿ず手目衣長社祢もく歩仕せざるはなし。第一番ふ八犬士を召出て這回の軍功の賞とて。各一城の主ふ做さるべく。采邑各一萬縣廣く且富饒の地なれども稲村へ遠ければ股肱の家臣を置べらざるの故ふ胡意當國ゆく宛行る。ふの中犬江親兵衛ふ量裏ふ上總ゐ舘山の城主ふ做さればかゞもヲ事ふあらくのまゝ在任せざる且秩禄の定ゐり紀然るを這回改めく當國舘山の城主と生其城ゐ近ふ城郭を執建く在任せべ格式いと家老の上席ゆく上大夫くらべ。と自親仰渡されて且東展相をりく其城邑の目録を成下されば君恩既ふ身ふ餘る八犬士ハおそるく共倡ふ兼まつく退出て其目録を拜見せれば思賞都て異同ゐく仁の字ふよりて首とを

庵ゆくありて奇事犬田豊後ゲ力枝の千万人ふ勝れしうさ越ふ翔めて感を傳ふ稱賛をうける。慥而義成主ハ有功の諸臣ゐを賞禄の沙汰あらべくそ一日瀧田へ赴ゆく義實老侯と商量あり。そのゝち國府臺の城の番士の頭人真間井樅二郎継橋綿四郎潤就鳥手古内振照倶教二文明の岡彦。鳥山真人ハさうえ行徳口の戍ふ置れる石亀次圀太越鄭三市河る犬江屋依仗両國河原ゐ。向水五十三太枝獨鈷素手吉ふ至るまで。咸稲村へ召らる。有懸一程ふ落魄餘之七有種ハ誼夾院村ゐふ法印豪荊をれゆく。先度の謝恩の為ふそ。穂北の荘ゐる詰ゆふければ。开ゐ幸の折則犬山道節ふ課て其伴當と倶ふ稲村の城内ふ召置る。時ゐ八月

其次第左の如し。

安房國舘山城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬江親兵衛尉金碗仁
同國東條城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬塚信濃次金碗成孝
同國大懸城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬阪下野次金碗胤智
同國御厨城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬村大學頭金碗礼儀
同國朝夷城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬山道節帶刀先生金碗忠與
同國小長狹城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬川長狹莊次金碗義任
同國神餘城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬飼現八兵衛佐金碗信道
同國那古城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬田豊後次金碗悌順

とぞありける。次ぎに東六郎辰相。荒川兵庫助清澄を召よせ恩賞あり。這両家老ら忠誠舊老氏元負ふ少らざる義ふ素藤對治の折も。這回大敵防戰の日も。進退よく度ふ稱ふ。備らざる所なくて采邑二千貫文の舊地ふ。今亦各二千貫文を加増を共ふ本領五千貫文ろべーと仰らる次ふ杖倉武者助直元堀内雜魚太郎貞住ふ恩賞あり。他ら這回の闘戰ふ勲績伯仲を俱ふ其父の重職を嗣ふ足れり。さるをもて家老を采邑ふ父の時の如く二千貫文ろべーと仰渡されける。却其次ふ政木大全考嗣を召よせて。大田木の城主ふ做さる。他ふ素藤對治の日も犬江親兵衛を幇助て戰功あり。鄕高ふ又葛飾の闘戰ふ其一功解少らざ因て這恩賞あり。援ふ乘ぢて強敵長尾景春を防ぎ戰ふる。其軍功解少らざ因て這恩賞あり。格式ふ四家老の次席ふく采邑五千貫文を賜ふべーと仰らる次ふ千代丸圖書助豊俊を召よせて。那身ふ都て約束違ふざ軍師滝智の計策ふ從ふこと。よく大敵を火攻ふせる。其大功既ふ舊罪を償ふ足れりとをもて。舊地を返し賜

まく。故の如く上總國椚本の城主を做さる舊臣を召聚へく還任せべしと掟ふ。次ぬ姚雪代四郎與保其孫十條力二郎十條尺八郎滿呂復五郎重時。滿呂再太郎信重安西荒次景重磯崎增松有親館持作る儀仗朝經大樟村主俊故ありて一同ぬ召出し七與保が苛子崎の賊難以來屢大仁を幇助く。大功ありてまて推登七兵頭ぬ做さる。十條力二尺八も尚幼小なれど。大母音音又兩母親曳る單節が苦肉の計を紛ひる那大功の賞と。まて弟兄共ぬ次麿君の陪堂ぬ做さる月俸ぬ二十口ぬ十口を加增をて各三十口を賜ふべしと又重時信重景重有親ぬ戰功孰も勘らべきをもて重時を兵頭ぬ做さる。信重景重有親ぬ右衛門佐殿義通ぬ仕へて俱ぬ近習するべしと仰らる。又朝經俊故ぬ鄕岡ぬ恩賞を給れて其地の長ぬ做されつゝよく民を憐ひ。そぬ循吏の操を倣べくぞ。もて掟をて其後落魄餘之七有種誼夾院豪。

前名義成主ぬ見參をて這有種ぬ義士八犬士のまど當家ぬ仕へざる以前。其郡助ぬ召てまし。と呼かをて。況僅ぬ小兵まりそ。刃心岡の城を拔ぬ及べ大山道節ぬ軍勞ぬ代りべ多最賞をべし。豪家荊も亦俠者ぬよく有種を郡助く。當家の為ぬ忠ありをて五百貫文を賜ふ舊地穗北五ケ村と共ぬ宜く是を館領をべし。但房總ぬ東南の一隅ぬて他鄕の風俗を具ぬ知る。ぬ由ぬ有種ぬ幸ぬ武藏ぬ在り生平ぬ隣國の珍說を捜べく。利害あらべ稻村へ注進をべし。又豪荊ぬ當家の祈願所ぬ做さる。今よりべて年毎ぬ米粟百苞を賜ふべしと。因て命あり。且有種の妻重戶ぬ賢女をて。よく良人を諫めて。衍恣ぬ流ぬ事ぬ及ぬ。次ぬ石龜次圀太。越卿三向水五十三太。枝獨鈷素手吉犬江屋依介等ぬ次圀太ぬ行德塩濱の長ぬ做され旦鄕倶ぬ見參を饒されて旦恩賞あり。次

三ハ其次役にせらる。又依介五十三太素手吉ハ故の如く市河西國河原に在
住して國府臺の城に事ある時。船隊の頭人たるべしとて月俸各五十口を賜ふ。
這四個の町人ハ或ハ犬江親兵衛に従ひ或ハ政木大全に従ふて忠あり義あり。
戰功あれバ倶に武士に執立て。庿字帯刀を允し給ひけり是等ハ皆新恩の
毎なれバ賞を先にせられしなるべし譜第の家臣の功ある者に恩賞ハ蜑崎十一
郎照文を首とす。抑照文ハ招賢の使を奉りて、大法師と共侶に関の八州を
巡歴せし始より三たび京師に使せしまで功あるをもて又その職禄を
推登して瀧田の城の大兵頭とす秩禄も亦加増して二千貫文を賜ふべし。且
那身ハ男児なき故に親族の子なるとて若黨直塚紀二六を女壻養嗣に
なして女児山鳩を妻せまくほりせし宿願も既に聞し召容させ給ふ。願ひの隨
に意すべしとて。則紀二六を召出さる。然バ直塚紀二六を蜑崎十二郎照

章と改名して義成主に見参せり他ハ京師に在りし時犬江親兵衛の郤
助に傚りしといふ有功の者なれバとて瀧田の城の番卒の頭人に傚させけり這他
戰功ある勇士の毎。小森但一郎高宗印東小六明相荒川太郎一郎清英
鳥山真人由世ハ兵頭の上席を饒さる又浦安牛助友勝田税力助逸友
登桐山八郎良干木曽二介季元田税戸賀九郎逸時苫屋八郎景能
倶に稲村の兵頭に傚さる又小水門目堅宗鱓舩貝六郎敏糸足東峰萌三
春高ハ瀧田の城の兵頭たるべく白濱十郎七浦二郎朝夷三弥ハ故の如
く。右衛門佐殿に仕へまつりて近習の上席たるべしとぞ都て其秩禄を加増
せらるゝと各差あり。又真間井樅二郎秋季継橋綿四郎高梁洲崎島手
古内美容振照倶数二弘経等ハ舊禄各一倍の加恩あり又須々利檀
五郎二四的寄舎五郎ハ既に恩賞ありて國府臺の城に在番せしを今番

又召よせて。其隊下の衆兵ホ。白銀二百枚を賜ふ五十三太素ヱ吉ゞ乾兒數十名ホ賜ゥ亦是ホ同ど又鮸内無四郎猴岡ホ作る。猿八漕地喜勘太詰茂佳橘等ハ月俸を加増あり。旦白銀各二十枚を賜ふ犬阪下野犬江親兵衛執達ら。他等ハ拜見せざる者ゐれべゝ這餘諸軍兵都て恩賞ホ漏る者ゐ一最後ふ致仕の老臣杉倉木曽次氏元堀内藏人貞行并ホ小森篤宗浦安乘勝を召よせて。其児子等の軍功の賞として氏元貞行ゥを。養老料。美田各五百畒貫文を賜ふべゝと仰ら。又東西和睦の祝壽を禀えそ参りぬる上甘理墨之次弘世の使者天津九三四郎員明及荳野阿弥七椿村の隧ゞ次圀太等ホ就て求ゐ。今井河原の木凡八安房上總下總る。村長故老等ホ至るまで東西を賜ふ勘る。其後、大禪師を召よせて。義成みづから。其年来の大功徳を誉て。宋版の一切經と唐の貝本立ゞ画ゐる。白衣觀音の大懸幅と沈香十斤を賜ふ又妙真音曳ゐ單節へ共ホ女流るれゞ別席ホ召よせて。義成みづから其功を褒言ゝ。有名の短刀各一口。夏冬の衣各二襲金子各一百両を賜りける。然ゞ這君恩ホ預る者熟ゝ拜舞せざるべゝ勉びの聲内外ホ充ゝ。被ゞ連々退るとそ。一要時ハ此も推も分られず。圀守の慈善と其富を仰ぐゝ感ぜざるゝりけり。偖而義成主ハ又、大禪師と八犬士等を召合せて宣ふやう。卿尚ホ朝廷より。我姉君を神ホ做されゝ。賜りる勅額を。我立息ホ富山の品崖ホ石の秀倉を造り建ゝ藏めくりそ神體ホ做さ宜品崖の前ホ石の玉扉門を建ゝ勅額の摸寫字を掛べゝ這我ハ禪師と八犬士等ゥ奉祈りそ早ゝ石工ホ課ゝ。等閑ホせべらゞゞ只清淨を上旨とせよと言叮嚀ホ仰されゞゞ。大犬士等ゥ美りそ。其次の日より作事を起して。而

富山姫御祭禮

富山姫の神遷座行列

東都　曲亭主人編次

第百八十回下

義成功臣を重賞し七八女を妻を重出

信隆舊城を還任して罪過を免る

再説。義成主、八犬士四家老直元貞住等を召聚て且宣ふやう。這回柳九が一個の女兄あり。葛羅嬢と嘆做して今茲、十六歳を做りぬ是が爲に婿を徴れども。いまだ相應しき所縁あらざ。願ふ、安房上總なる諸城主の子息達を擇せおきて。這婿娚を御媒妁あらば幸甚しからんとのべ。真利谷、我外戚なれば他ならず情願由ありぬ。我も亦憶ふ美あまたどもそれよりも猶いそぐべきは汝等も知る如く我が八個の女児あり。中に妾腹なるもヨタれど其母或は産後が

工ありそを程ふ約莫二十日許ありて。風く落成をければ。則勅額と神體みて洲崎明神の神人ら祝詞を誦え。法樂を献る。大禪師を開師ふく大山寺及延命寺の衆徒讀經をて。遷座の作法を遂られ。遠近の男女山路を厭ず。詣る者そヨヤクる。有倭一程ふ上總なる故の椎津の城主真里谷信昭の嫡子柳九。年十一歳ふく。初て稲村ふ參勤ぶ老黨鞠谷毛大夫綺妙ら伴當ら。去秋父信昭の没後ふ家臣ら確執のふありより參勤願延引ふ及ぶと。父真里谷ぃ里見の通家なれば權且稲村の城ふ留らふ。柳九見參の日ふ黄金五枚と土宜を呈ーて贄とをす。義成則柳九ふ大刀を賜ふ。その頃又義成主ぃ八犬士四家老らを召聚合て。八個の息女達を婚姻の一義あり。開ゐ又本回下の編ふ解分るを聽れかー。

南總里見八犬傳第九輯卷之五十終

身故り或ハ短命ありけるべ皆吾嬬が養ひ子ゝ手迫ふりふさう有徳れが孰も嫡腹ハ異なるど我も亦他なる為ハなきに塔を擇ーらども一女もいまだ所縁あらねば反て他なる幸あるから我今八個の女児をりそ八犬士なる妻せまく欲をいでも亦足ぬ大士の賢戈其忠其功八人ながら我女壻ハ做まをハ足より名這意をゐよかーと示他事もなく仰まれべ八犬士ハ阿とぞ心難ふる幷が程ハ辰相と清澄ハ倶ハ答稟まやう御意美うをりね八犬士ハ伏姫上の御子ふるべ宿因あり然が賢慮の至所誰ふ不の字を稟まべき臣なも其美を豫より願ーくとそいひけれど義兄弟八名ハ當家ハ宿因あるとも只一戦の微功をりて名城主ハなされ志ハ胸安ふざる呼あり然るを況姫君達をりそ妻と一下ーあらば盈て溢るゝ冥加ハ盡んよの美ハ獨忠與ハが賢達て辭ひ稟まをハめぐ都一心異體ふる義

兄弟なも同意ハそと誂ーて左右を見ふ人まべ成孝亂智自餘の犬士も然之然ゝと點頭て犬山説ゐて寔ハ好徒ありぐ畏けまども目今舘の御威徳りそ姫上連を近國ふる大諸侯ハ妻せのふとも皆欽びて是を容まん何ぞ家臣の渾家ハ做さんや且臣なる八名ハ伏姫神の故をりそ夙く知ら旦一まつーらざるハ上大夫の席ハ置まそ采地一萬實の城主ふるハ新參ハて勤労久ーふざるハ仕ふる所ハ最過分き君恩ハて人の娼嫉も影護ふ然を又御配偶ハ實ハ是物体なーと約莫人の臣として富貴其君を推と免ハ亡ざる者あるを稀之伏請御家老連臣なぐ為ハ御配偶ハ御沙汰を稟ーて止ありぐ猶この上の辱ふんありでゝくと諄久返を甲一匁乙一匁迭ハ語を續言を續てざりーを義成主推禁ありそ然ふりのそ大氏の毎非如連城の大諸侯ふりとも賢ハ憑ぎーて富貴を負むハ我欲せざる所ゝ然ゝ忠臣ハ位貴く任重くーて兵權

嘗ありとの人どものよく〳〵忠誠の心して其君を後にまもることは蜀漢の諸葛武侯我國士南朝なる北畠准后の如き是之矧又我八犬の賢臣をひていまだ嫁ざる八個の女児あり竟に犬氏が妻まとろへ抑又天縁ありとぞ我意既に決せり必ず辭ひそと面正くぞ諭のふ君命脫る路もなき八犬士なりおそるく。稍言美を稟きめぞ辰相清澄も欽びて直元貞住共侶が祝して千歳をぞ唱へける當下義成又宣ふやう柯を伐者は必斧をもてし妻を取る者は必媒をもてす周人の詩に詠まる呼載て二百篇の中に在り今我六郎兵庫助をもて這婚姻の媒約はせん武者助雜魚太郎と俱にこの美を相副て有司が所要を課すべし但し我八個の女児い年はヨタ少ありとも犬士の年い相似よう犬阪犬江只是のみ自餘の六犬士の年劣りまう然バ今孰をもて孰が妻せんよの分別をくらぶ誠や和漢古俗の常言に約莫男女の疋配い其神ありて是を嘗る我國俗の道く年の十月毎の諸神出雲の大社が聚合ありて世間の男女の爲が疋配を做しまふとも又唐人のよ呼も是が似よう或いの月下が一個の翁ありて書冊を開きて是を見る世間良賤男女の姓名と其年歳を識さる者のことなり是ようそ赤縄をもて男女の脚が繫ぐとぞいい非如雙言敵ことそも夫婦が做らざることを況ぞ或いの氷下が両個の翁ありて相對て相譚を氷上の人是を学べ世が在る所の男女の疋配のみならんや媒妁を月老と云又氷人とのよ又唐山の妓院をぞ祭る神を白眉神とのよ國俗の呼云かようふ神が似て月老氷人と同ドくらぎ。开い左もれ右もあれ我女児等の疋配い他等が谷一條毎の縄を合せそ犬士等が是を牽せん其縄の本が一條毎が名簿を締着て誰縄ぞと知らざれバ犬士等各其牽所の縄がよりそ甲い乙丙い丁と妻ぞるぞを知ることなれバ天縁とのみのべ縦此二の過不及ありとも誰が訴誰をか怨ん這美

親兵衛の辰相清澄ゐうち向ひて言卒介ありへども禮ゐ男子ハ三十ゐーて室
ゐり後世ハ和漢是ゐ拘らざ十七八より二十ゐ足らぎ勿論仏くして男女の婚姻を定るを唐山ゐそハ結髪の夫妻といふ。
國俗の呼云ゐハ是ゐりてより七成長ゐ及びて婚姻を執行ふ者ヨリ多く是ゐり。
いまだ十六歳未満ゐして婚姻を做を男子ゐることを佐ろざ臣等も亦是ゐりて。
結髪の美ハ兼ゐりべし婚姻合巹の大禮ハ御猶豫をと願ーけれと推辭ゐ我が
主うち安て親兵衛开ハ理りゐるゐ似ざれども我思ふよーハろらざ汝ハ生年
二五ゐまでも身の長ハ十七八ゐる少年ゐ異ゐらざ脅力ハ萬夫ゐ敵をべく心
術ハ白頭ゐり宿儒も及ざる呼あり何ぞ只年を數へて婚姻を遅礙せんや且明
春の婚姻ゐ汝一人を漏ーゐべ汝の妻さらん者必や怨むべし娶りて後十七歳
まで閨房を俱ゐせざるとも又俱ゐせざるとも开ハ我知る呼なゐざ只常人の上を

什麼と詳ゐる示談ゐ辰相清澄ゐうハ直元貞佳共倡ゐ只管ゐ感じて已まざ
八犬士ゐるも今さらゐ異説をべくもあらざ其計ひの精妙ゐるを稱て兼服ゐさ
ーらべ義成主うち含笑て然ハ我も欽び思へり事生急ゐ似れども今日ハ黄
道吉日ゐ先赤繩を行ひてん女子ハ夜を宜ときゐの故ゐ婚姻の昏の字ハ女ゐ從ひ
昏ゐ從へり犬士ゐうハ點燭時候ようり俱ゐ朝服を整へて六郎兵庫助ゐを案内
ゐて出居の方ゐまで參らべー既ゐ我女児ゐうを汚さーらべ准備を做を
ゆゑゐらんぞふむ倭而這八士八女の姻縁相定りて納采の義を行ふとも婚姻ハ
桃の夭々ゐる來春二月下旬ゐ做まべーと犬士の地ゐりて城ゐた者ゐハ修造料ーて
金三十両ゐりべー速ゐ工を起ーて城郭修造をいそぐらべ來春婚姻の折まぶ
家作ハ大緊ゐ故成ゐべー豫ゐの義をところ汚てよと言叮嚀ゐ示ーゐべ犬士ゐう齊一
額を衝て君恩遠る呼ゐたを拜ーまりり。其次びを稟ーけり。姑且ーて

して年を論ず云々と推辞ハ要るとこそと理過て諭ず辰相清澄勝を
找ぬ。御諚宴ハ其理ゆゑ親兵衛が意ハ其ぎハ思ひ足らざるゆゑハ年ハ
泥ミー故ぬこそと執合されバ七犬士なりも犬田豊後を首ゆゑ仁ハ代りて教命の
欽びを稟ぬゆゑ。親兵衛今ハ己ことをひゑ四家老ゆゑうち向ひて卒介の異ぎを
謝ふけるゆゑ。而ハ犬士四家老ハ今宵の一ぎをのがれて身の暇を賜ふ退りて准
備を做を程ぬ秋の日早く暮初て點燭時候ぬ做ーゑバ犬塚信濃犬川荘介
犬山道節犬飼現八兵衛犬田豊後犬村大学犬阪下野犬江親兵衛ハ倶ぬ北
絹衣長社祢ぬて東辰相荒川清澄ぬ引ま
ゆゑ。後堂と前亭の間ゆる山雛の風ぬ伺候
ゆゑ。序次程よく羅列れゑる左右ぬハ銀燭ハ
よゑさゑ。夜の櫻ぬ杪ぬ似る犬士の骨相同ゑねど孰も二十前後ゑる威風凛々ーて反て
猛ゑゆゑ。父ゑと父ハ三歳の小児もゑゑくべく怒ゑゑ。ハ益世の一勇士ゑ憚べく面目ゑり
浅黒さゆゑ。身長高ぬゆゑ。高ゑゑゑる人面の相似ゑるも並
てハ同ゑゑゑるぬゆゑ是仁義ハ行の玉を連ねー好男子劣勝ゑハゑゑけるゑの
と先前面の坐席ぬ錦綉の間道ゆゑ翠簾を透間もゑく掛一旦ー這裏面を
姫上達の着坐とき其処ぬも銀燭ヲ多ゑゑべ
さそよ春の曛昏ぬも似ゑるべく色濃ゑゑけゑ。翠簾の間洩灯花ハ殻香とゑれて風
義成主の八個の伶俜の第一の君を静峯姫と嘆做ーて十九歳ゆゑ。第二の君ハ
城之戸姫第三の君ハ邨木姫ゑゑ同庚ゆゑ。第四の君ハ竹野姫と第五の君實路
姫も十七八歳第六の君菜姫第七の君小波姫ハ共ぬ二八のゑゑの第八の君景姫ハ
年三五ゑゑけれども既ぬ生情湏て身長ゆゑ大人備のゑバ女兄君達ぬハ優ゑゑぬ似ゑゑ
反て第一の君ハ形貌小さく痩肉ゑゑバ那堂の中ぬ舞ひーとゑゑ趙飛燕ぬや似ゑゑ
けん孰も稀ゑる美人ゑれバ肌膚ハ雪を塊ね玉を延ゑるぬ異ゑゑず翠雲の長

やうやう立ハ嘗裙の至るべし花もハいまだ開も揃ハぬ月もハ十あまり三日の影ゆゑ
のべ〳〵ん心ざしも皆愚なるぎ走筆縫刺の技ハさらなり官絃の游ハーも疎かるぎ。
生平の宇通保源氏物語を枕の友ハーと歌を主とし讀ゆゑもあり或ハ物の本を好
まて文の戈めるも綴りて人の見せぬハねハ世ゆへ聞えざるうべし間話題休慼而這
八個の姫上達ハ頭ゆハ玉を鏤うる花の釵児を戴紀身ゆハ縫ハ箔揃箔色々の衣を
被飾りて儲の席ハ就ゆべ給事の女房等ハ今宵を晴と打扮て各各も侍坐
なり是やまの錦の上ハ花を添うる温柔妖艶の妙うるも皆珠簾の内なれバ犬士
らハ目ハ見えざるを憾とまゝべし姑且ーて給事の老女出て來て二家老と八犬士ハ今宵の
壽祝を舒ぶとーて却辰相清澄ハ事の進退を相譚よよーあり其言果て退げバ翠
簾の内ハ紅色ーて縫ハ染徹ーうる八條の太緒を出されけり辰相夙く是を見て。
立て其緒の端を含て徐ハ曳ーまうハ長さ一丈二尺許あり既ハ曳出ーー畢りて八

條を揃て席上ハ掛けバ八犬士ハそろ〳〵倶ハ徐ハ進こうそくゆく其緒の端を
含て各左ゆハ是を結びつ。引けバ聊ゆ敵あり迭ハ引ざうらーて竟ハ放ちゆハ
あを各急ハゆ繰り寄されバ果ーて那方の緒の端ハ各其各薄を削らるゆ
辰相則瞰て我も一箇々々ハ其緒を含て抗げつ得と見て聲高やハ是を讀ハ
内外齊一うち听くハ第一靜峯姫上ハ大江親兵衛仁第二城之戸姫上ハ大川
長狹莊次義仕第三鄙木姫上ハ犬村大学禮儀第四竹野姫上ハ犬山道節忠
忠與第五濱路姫上ハ犬塚信濃戍孝第六栞姫上ハ犬飼現八兵衛信道第七
小波姫上ハ犬阪下野胤智第八芳姫上ハ犬田豊後悌順各是を引ゆうて天
緣の致を所御配偶皆定りぬ千秋々々萬々春と祝されバ翠簾の内ハも女房
等の歡聲ハて萬福々々とぞ應へける當下荒川清澄ハ准備の料紙硯をもて
件の男女十六人の名字二通を寫を程ハ給事の老女又出て來て両家老八犬士ハ

みす翠簾を隔(へだて)て八犬士
せきじゅう赤縄を接(むすぶ)

清をみ

其二
八小姐天
縁良對を
ゐねる処

ひうがご姫
ろうか
きのこ姫

竹の姫
ちうり姫
ちうり姫
いろこ姫
ちまき姫

と事の欵びを述ぶ。清澄則丕配の一通を照みとそ老女お遽與ハ受戴て退ちけり。佳而八犬士ハ當帝を退きて倶お宿所の罷るべく又辰相清澄ハ躰後堂へ赴て義成主お見參ー七姫上達の御配偶ハ固様々々と申上て寫ー一通を呈閲ぬまべ。義成主含笑つらくと是を見て六郎兵庫ハ心も屬ぎや我女児毎の婚姻ハ前より名詮自性あり。譬ハ靜峯が仁の妻よろんと定まるは似さう故何とならバ皆是おつの庶ー然ども靜峯ハ十九歳の姉之何ぞ這年の長ようて那年の殊お劣るお合せやなども亦後の知るよーめらん且城之戸が義任お於るや古語の義を守る王城の如ーとのみる由あり又副木が礼儀お於るや其故妻の雛衣と文字こそ異なれ唱ハ似さう且副ハ大村の村お對まべー又竹野が忠與お於るや忠ハ苦節お顕る節ハ道節の外なし即竹節ハ即ち野ハ犬山の山お對まべー

又濱路ハ甲非文おあり一時成孝の幇助を為て且道節お那窮阨を極れり知又成孝が故の結髪の少女の名も濱路ろ改ー今又濱路ハ再生おめぐりー七他お代るとやのべらん又栞が信道お歸やまも由あり道の信を做ま者ハ行末之栞お据ざれバ道お惑よべー又小波が亂智お歸やまも大も亦語お所云智ハ動く智者ハ水を樂むとあるお廃ー水の動く時ハ波るべざる今一波ハ則水の皮ハあらをりそ其字水お従ひ皮お従ふ智も亦動ざれバ用る所ありー是智者の水を樂む所以欤又辛が悖順ハ歸や悖ハ則兄お仕るの道あり且悖順ハ仁が外伯父うれども友て悖王を為ろう其ハ行お由時ハ仁義の辛るべざるをを為ぞまの故辛姫をの七妻とま皆是名詮暗合あり寔お不測のさのるべやと其理を推て解ね更ハ辰相清澄感服七隠微發揮の御妙解ま啓筆て解語仕りぬ現お天縁の動ねき自然の妙契を知るお足ぬうと稱て敬祝ぬうーらバ義成又

課るやう。配偶既に定りぬ。夙く納采の禮を行よべし。然ども大士やうへいまだ其城ゐ徙られざれば是等の事ゐも不自由なりん。六郎兵庫相資て東西皆質素ゐ整理させよ。遺ふくまろを扣さきなべ。辰相清澄兼りて躰ぞ退り出ゐける。然バ辰相清澄ハ次の日大士等ゞ出仕の折義成主の鮮ゐ。ある仰を具ゐ告知まれバ大家感ぎる幷が中ゐ。智がのやう名笺暗合のつゐへまも昨宵臣等も宿所ゐ還りて不圖思ひ。うらゞも然まぞゐ深く考果まぎ寝ふ舘の御宏戈感心の外いぎとそ其一二を説示せバ成孝も倶ゐのやう故の濱路のゐへまも只結髪のこうゐ苦節を守りて命を惜まぎ五人左母二郎ゐ殺されて烈女の名をのこ遂まらバ我他ー女子ぶ。堅らゞをのこ思ひ。恐ながら姫上も亦他と同名ゐて且甲斐峯の奇事あり。竟ゐ我成孝と誓嫺自然ゐ定りー。造化の小児の配劑欤一大奇事ゐいぢれ。とりべバ禮儀も倶ゐのやう臣等とも雛衣が腹を劈た玉を非虫て親の讎言う妖怪を仆せー他が功を思バ復娶るべくもあらざりーゐ雛衣鄙木の稱呼似うゐへ實ゐ舘の御諭ゆて斷ー那緒を續る者欤。とりゐを義任推禁めて卒先舘ゐ拜見して。君恩を謝ーをるべーとのつゐ大家諾るひて辰相清澄共侶ゐ義成主の身邊へ參りて許嫁の恩偶を拜ーまろまろバ義成主笑ーげゐ各天縁既ゐ熟ーて我女児毎對をゐれバ欤び是ゐ優まをゐー就て鄙ゐものひけらー。真利谷柳九の女兄葛羅嫂の婚姻のり我意ふゐ政木大全の妻せるべ戈貌家門相應ーらんよの美へ明春下野長挾ら媒妁ー七宜く相計ふさせよう一と仰ゐ大士等皆欤びて孝嗣も亦新參ゐて勤功久ーうぶるゐ今又恁る恩命を他美りいつ。さこと感悦仕らゐ。清澄も倶ゐ祝頌まろけり。姑且ー道れ節がのやう四境ゐく理りて君恩隈なくいぶ只廳南の一條のこ。まぐ其後の御制度を美らぎ那美ハ什麼と問

稟せば義成主點頭て然べくよ其事い六郎兵庫にそよく知りくれ先始ようず告ぎやと仰ふ辰相清澄い阿と心つく忠與等ふ向ひて各位も知如く隆人武田左京亮信隆い去歳の十二月初旬水路の寄隊の従みて二裏代まべーと請稟しつ。保質一條丹四郎信有をまわらせて舊罪赦免を願ひーべ舘其美を御許容ありて當日戰功徃ぎへ則他が願ひの隨意其舊領ふる廳南の城地を返しつべーと照文一通を令ぜめひき這美い大阪犬山の奉行ひーと呼ふれいへでもまつ死とうのぐら端倪い且如のごーふるふ信隆い十二月八日の聞戰ふ定正主ふ従ひながら洲崎へいうち向つぎ。徑ふ艦を横行て上總の浦邊ふ推渡ーて悄地ふ廳南の城ふ造りこ城の頭人江田九一郎宗盈ふ告うるやう。咱等ふ里見殿と約束ありふう則寄隊を欺き離れて目今歸着致ーくう。當呼へ里見殿の返しーみひける我舊城でいへ速ふ開渡しいへとそ桃ごーを宗盈听ふと然いとよ舘の御照書ありとう未

當呼へ御下知ふたふ。ふでの當城を遽與さんや。其美ふらべ且退ぎて後の御沙汰を俟いへとのみを信隆ふ。既ふ照書ある上い又今さらふ何ぞう俟ん疑ーふ稲村へ戻く使を走らーれ今速ふ遽與うくくいと咱い我二の城ふうち入てんと答う果ぎ二十一ふ隊兵三百四五十名を萬ゆそ二の城へ稠入りつ。那里を守る老兵廿一人も漏さず追出ーて門戸を閉て執合ねべ江田宗盈怒ふ沿堪ぎ急ふ士卒を推萬ーて擊ち果さんとそ敦圍ぎーを算二の頭人畑夏作遽しく諫めてのみやう。信隆傍若無人のんぐも舘の御書を照據ふたぬるふ其美を訴ぎろぐぎーと。同士擊ちせべ後悔ふうまる。悔ふらんよの美を思ひ多べぎやとのみ其ふそ信隆の非理非法を舘ふ訴奉りそ御上旨を請けつふ舘い城馬きのふとふく其使者ふ著ふ御ぎろやう。現ふ武田信隆へ智計ふる似ふれども。其性奸賢ふーて獨立まき欲をふりそ當城ふ來て恩を謝せぎ。徑ふ舊城ふうち入て又蛊く宗盈ぎるふ代ら

まくを他が理不盡勿論なれども今急の撃て果さゞる人の不仁の做ふも似うず非如
舊城廳南うる二の丸の籠るとも償の程の三四百の隊兵をもて何事をも做ひ兼廳
南の民他が舊恩を徳とせで義成が民たらまく欲さゞ信隆竟が身を措難て
悔て罪を謝まる日あらん他が敗を取折まで
ら笑ふ賜りそ其使者を返ひけり是ようの後信隆が二の城の在る所の戰棄せ
會て用ひてこが自恣せざるのみけれゞ江田宗盈憤念ふ堪ぎ屢使をまわらせそ
撃て果さんとそ請禀ふーを館いふも許のぞ只うち捨て閣べーとそ殊うる御
下知る故。
閣るのみと告るを道節度のくぎそ亦館の御仁恕うら。信隆が奸詐る曩
來て告るやう廳南うる江田九一郎宗盈が武田信隆の事の就て禀上ふ兵義伐せぎ推て廳南の赴きて崔嵬地を横領せ
第二の頭人畑夏作が信隆を將て參上りぬとの事を義成主うち聞て世の常言噂せ
まれゞ影刺とふまのつゐうん先夏作を召べーと仰ふ青侍ところ沙汰遠ーく退り
去らゞ八犬士両家老ふ席を正ーて俟程ふ畑夏作通豊ふ紗裝の儘ふ七青侍ふ
引ゐと來て義成主ふ拜見を登時義成主ふ大阪犬山二犬をもて先其故を問せ
ふふ夏作則禀まやう武田信隆が非理非法ふ為体ふ曇ふ訴奉りー如ー。
介るふ信隆が隊兵ふ甲斐ふ武田ふ士卒ふれゞ他が威勢竭りて戰栗まふ
竭るを見て久ーく留んとを欲せゞ日毎ふ十人二十人病ふ假托けるゞろ。

甲斐へかへり去らんと残れる信隆が従来の隊の兵五六十名の徴りふけり。信隆是をおそろしと憂ひていそぎその地の荘客たちに説示して我軍役を充んと思ひて有一日小鷹狩の假托けて士卒十名許を将て悄地の城外へ立出て地方の村長故老等を銭名う召よせて且のやう若们二季の調貢いさゝか荘うる兵毎に我を資てよ第二の城へ肩龍るべしとのいひしを村長らは美引を詞ひとしく辞ふやう当昨の里見殿の御領ふるひしより御仁政を蒙りつゝ御恩の下ありて御身の従へとのみ御下知もうなでよ然る僻事を仕らん思ひもかけぬひうとそ立去まく欲ふしを信隆急の喚禁ふて諭ども听されば竟の怒ふる堪ず七刀を晃りと抜くるも見せず一人を礫と斫仆せば大家驚き且怒て狼籍者ありく極へくと叫ぶゆゑ四下近辺荘客们なるの連枷を携て百十数名走り来の信隆主僕を捕稠て面も振せず撃ふ悩せば。信隆も伴当も刀をもて受流し打拂ひ戦ども更数多の物ともせず剰加勢の荘客们弥が上ふ聚合来て只直打ふ撃ふしば。信隆の伴当ふ一人も一箇も遂ず撃仆され信隆も防ぎ難て既ふ必死と見そうる折ふ城の頭人江田宗盈ふ馬を走らしめ駈出て喚ひうる騎人荘客们を禁る程ふ宗盈の隊の兵も赴ひく城より走り来て倶ふ信隆を救ひけり。当下江田宗盈ふ村長故老等を召よせそ事の起原を尋ぬるふ信隆が理不盡うる。然まで罪うき荘客を矢庭ふ撃ふせし故ふ荘佼児毎が堪難てまの趣舎ふいとりふ言分明うらべ宗盈ふ村長等が訟ふ及ぎして苟且ふも舊領主と聞諍ふ及びしを叱りて辱負を勤らさるふ斬られし荘客ふ窮所のありねば死ふ至らぎ。又信隆の伴当ふ撲傷られしを折れ脚を折るまで仆まーのこ是も命ふ恙ふはあらべ宗盈急ふ醫師を招ひて甲乙倶ふ療治せーむるふ五六日を経ふ安うるべーとのう是ふより荘客们ぜび金沢児と

倶ゐ還し遣る。信隆主僕をそが儘ゐ城内ゐ扶入るゐ信隆先非を後悔して宗盈ゐ勸解るやう咱ら洲崎の陣ゐ參らざ七當城ゐうち入りたゐ西崎武士ゐるう。そこゐ故何とうぐ定正主の隊を離れて裏伐せざるゐ是義ゐ倘欺きて裏伐せざ開又悪の悪う者ゐて兇賊ゐれ寺しめゐ。然ゐ裏功ゐ一ゐまぐぐ又里見殿ゐ請禀さざ當城ゐうち入りゐ裏ゐ賜りし照書ゐり且這地ゐ我父祖三世ゐ舊領ゐれゐ民皆舊恩を忘るてゐく必や信隆ゐ從ふるらんと思ひしゐ思ひきや莊客們ゐ里見殿ゐ善政を慕ゐて信隆を徳とせざ反て事を惹出七這辱ゐあひけるゐ人を知ざ己を知ざる。信隆が不覺ゐ後悔臍を噬るのゐいふ稻村へ推參七是ゐ罪を謝せまく欲をゐの義と執達のまうしと咄言ゐまゐくうち陪話て則神文の誓書一通をまるらせて赤心を示ゐしゐ宗盈やうやく受容れて臣畑道豊ゐ其義を課て士卒百五十名と倶ゐ信隆を送りて參着仕りぬと言詳ゐ告禀せゐ義成是をうちゐて信隆の拙言書を道節ゐ讀せるゐ歸降の丈分明と義成憶ゐ合笑て然いこそのゐざうゐ敗を取て今ゐ真實ゐ歸伏せり然がとそ賞罰明ゐざ。信隆をゐ卽東小六荒川太郎一郎ゐ預けて城内ゐる一室ゐ五十日閉籠措べ。住ても怨ゐるゐろゐくゐ我對面して舊地を返さん下野と道節ゐの義を小六太郎一郎ゐ傳へゐべしと掟て江田宗盈ゐ下知狀を賜りつ。畑夏作を労ひて。廳南へ還しゐけり。仍程ゐ信隆ゐ明相清英曾りて龍居五十日ゐ及ぶりの。聊も怨言ゐく只恩免を請ふと雖えゐば義成主憐て這年の冬十月ゐ武田信隆を召出して正廳ゐて對面ありつ。八犬士四家老并ゐ政木大全卽東小六荒川太郎一郎なるぞ仍りける登時義成主仰出さるくやう武田信隆機變を以て獨立の罪ありと雖ゐ新ゐて真實歸降志ゐる上ゐ舊

罪を赦免して舊領廳南の城地を返し與ふ今より機變を約束するに只善政を旨とせよ縱機變をもて忽ち城を入るとも民從ざれば誰と倶に守らんもの義をよく〳〵思べしと叮寧に誡めければ信隆は頭を畧して美服せざるのみ義成又仰せやう信隆士卒減少して五六十名に過ぎざれば又當城の士卒假令犬阪下野の送らせん風く還任致すべしとも其身の暇を賜りけり然れば犬阪亂智は士卒三四百名を率て信隆を送りつゝ廳南へ赴き義成主は保質一條丹四郎信有をも信隆に從はせて返しやりぬ他の里見の德を其儘にて仕へ欲しと願ひしかば信隆は盡瀧田の城を在せて蛮崎照文の隊は隷られけり任而犬阪亂智が武田信隆を相俱して廳南の城に來り城の頭人江田宗盈畑道豊實の君命を傳へ示して城渡の事を課まるゆゑ他なるも其あるべき事立地の整ひて信隆と交代を又宗盈道豊い這回の相計宜しけるとぞ義成下知して

それら他なるべき犬江親兵衛が返しまゐりしを上總國館山の城の頭人に做しゐ這義も亂智傳達まゐらせ宗盈道豊は宅眷并に士卒四五百名を率て徑に館山に赴き那里の番士と交代して生涯其城を守りけり又犬阪亂智は廳南の村長莊客等に義成主の下知を傳て城主信隆と和睦せしめ且隊兵二百名を留めて稻村へ立去りぬ然れば信隆の宅眷殘兵の遠近に潛居る者主の選任を傳ふて皆歎びて來り來ければ稍大勢になる隨に里見の士卒二百名を武田の老黨を相添て稻村へ返しける是より後信隆は漸く其城地を理しゝ久しく廳南を有ちける按ずるに房總志料上總の部に里見義弘の時廳南の城主に武田の庶流にまの信栄とも者あり甲斐の武田の庶流にまの信栄とも件の里見に從ひ獨立しとの人ゝ意に件の信栄は信隆より二三世の孫なるべし但信栄の事ゆゑ詳ならざれども作者前後に借用を看官是等の用意を知るべし

第百八十勝四上　孤龍化石を貽して、大蟬脫を
行璧を反して八行十世を傳ふ

須説武田信隆が廳南の城を還任して本領安堵せしめ千代九圖書助
豊俊も戰功ありて罪を許され其舊領ある上總國槇本の城へ還任せしより
宅眷老黨もいさゝか安房上總に躲居る千代丸の殘兵等早く是を知りそ
且驚き且歎び勇みて日ならず聚り來ければ城内士卒も俄に家門繁昌
ありける。而次の年の春二月義成主の八犬士の遺嫁のうち媒
妁児東辰相。荒川清澄這他老黨有司奉りて男女の俘當を點配し納采調
度送りの式もいと當時よりむしろ書も詳なり足利家の時俗の禮を粗知る是
且又のべくもあらざるあの時犬士等の新城もいまだ落成せざるもあれども居宅は
都て造り出せりや各其所を卜ひそ新婦をぞ迎へける洞房花燭の歡會は賢も不

肖も異ならざるべし。斗が中の犬江親兵衛のみ當晩靜峯姫と相衣合巹のそのあ
とさのみ歐陽を俱ぜず。悄地ありて告てのやうに見らく知く我身は大人備て心
術こそ稚かれ年尚十五ばかりの足らざるの風く色情を動まじ。倘今男女の
交を做さゞる最も不可。百比丘尼狸の妖術ありて立ち浮名も亦さらん人の疑ひを送ま
べきの故ぞ我年十七に至るまで峯上隔つる山鷄の雌雄の宿も做まくもまの美を
饒しく多くと又他事もなく解示まを靜峯姫うちゆて宜き趣理りを佐り関
睢の樂て淫せざるの恩愛ありふるまでの添臥をのそく左ありて
右ゆる衛身の隨意行ひ多と忘く是よりの後六稔ありすり枕を並て睡るまと
みけれど然べとそ疎らず生平は良人を敬ひて反て意中ゆ親まゝり低而親
兵衛が年十七とりの春の比より夫婦始めて会を累て比目連理の枕を並ぶる。
遊仙崖中の愛を結びしを人後ゆ知りて感嘆せざるいふりけるまち是後の

話之然ゞ大士孝嗣も亦君命のよりて大阪犬川媒妁ゐそ真利谷柳先の女兄葛羅嫂と婚姻の款びあり上總ゟ推津の城へ嫁女同國東灘郡大田木の城へ迎入られて階老同穴の契浅らざる又照文の女児山鳩い年十三の比より吾嬬前ゐ給事しせまの時十八歳ゐて身の暇をゟて養嗣紀二六の十二郎照章ゐ妻せけり皆是君恩の厚ゐよれゞ谷其款び知ゟゞ介程ゐ政木孝嗣ゐ既ゐ大田木の城主なれども房總の地理を知らねゞまの年の夏義成主ゐ願ひ亶七國中を徧歴を素よう微行なれゞ伴當ゟど最畧七十卒六七名ゐ過ざるべし身も亦騎馬ゟいざしてし歩ようゆくを便利を先大田木根小屋の城より遠らぬ東灘天羽の二郡ゟ創んとそ普善村硯の里雜色村を過る程ゐ伴當の中ゐ御道守の老兵ゟり七孝嗣ゐ生ゟるゟう方便過せるひ普善村硯ゐ隣まる乙埜村ゐへ那神童増松和子の實父阿弥七叟の宿呼ゟれよりも猶近ゟる這雜色村の内中字古江てふ地方ゐ醫王山金光寺と喚做しゟる一座の梵刹ゐりゐ台家ゐそ本尊い大日如來ゟ這金光寺ゐ廣常の子息の墳墓ゐり因て山號と古塚山とも喚做しゟう這寺内ゟる山脚を穿ちそ洞の如くゟる所ゐ故ゟる無銘の五輪石塔波妥ゐり土俗相傳て上總介廣常の墓ゟりとのゟう虚疾を患ゟる者其石塔の苔ゟ鮮を削含て水ゐ浸して飲時い即功ゐり痊ざる者ゐりとそ折々其山ロを採ゟる者絶ざりとのゟを孝嗣ゟちぬて上總介廣常い鎌鋩劍業ゐ功臣ゟるに切ゐ誇りて忌憚ゟらぎ屢嫌忌を犯せゟべ頼朝卿ゐ疑れて罪ゟりて誅せらるゝゐき二升い壽永二年ゐ古文ゟりそ載て東鑑ゐ詳ゝ先や我も立ゟりて其

石塔婆を見てあらんと心つゝ歩を移めて稍金光寺の門前投て來かゝる程ゟ天猛可ゟ結陰りて疾電光動風ゟ雨を颯と降沃ぎて乾坤忽地野干玉の烏夜ゟ
ゟりぬるかとぞもわらぎ數道の金光四下を射て天ゟり墜と墜る者ゟ其音大地も頽る如く人堪ぐくもわらざれば孝嗣主僕ハ吐嗟とぞゟ赴りて孝
松の下ゟ身を潜ゝ忙然と聚立てゐたりける程ゟ姑且て雨歇天霽て日光隈
なく刺を隨ゟ孝嗣主僕ハ晴を定めて目今天ゟ墜さるハ何ゟらんとそ倶ゟ
見るゟ正ゟ是最大きゟる石ゟぞゟりける聾ハ其形狀宛蟠る龍の像く頭を
虬ゟ似て虬ゟわらぎ狐ゟも似る樣ゟ計紛ふべくもわらぬ白石なれバ伴當訝る亦ゟ中ゟ孝嗣へつらくと見ゟ吐嗟ゟ
思ふやう原來這狐龍の化石ハ政木狐が約束遠つぎ他ハ既ゟ數畫で終なをゟ
示せらん奇之々々とぞゟりゟ只ゟ顧感嘆ゟぬる折ゟ這寺の門内ゟ沙弥
道人と共侶ゟ立出る三個ハ年四十許両個ハ三十前後ゟそ皆ゟ骨
相鄙ゟらぎを一對ゟれど各々身ゟ甚ゟ葛ゟ野袴ゟ裙裂ゟ單外套を被て大小ゟ
両刀を帶ゟゟ伴當殿兵とおぼしき者十四五名ぞ從ふる約莫ゟ僧俗ハ
墜ゟる化石と孝嗣主僕ゟ立在ゟるを見出して眸を洗ゟ指さゝて那人達ハ
震れもせぬよくこそ堪され最奇之とゟめ間ゟ一個ゟ武士ハ孝嗣ゟるを見て开ハ
政木主ゟゟゟや武田信隆ゟそゟとのハまそ又孝嗣も急ゟ其ゟを見ゟて然ゝ
いぬる比稻村ゟそ初て對面致ゟる武田主ゟゟゟや聽南ゟ路近ゟぬ當寺へ
何ゟらの所用ゟりてゟゟ詣ゟひゟると問れて信隆然ゝ咱ゟハ前月瘧疾
ゟそ醫療即効ゟりゟゝべ俗説ゟ從ゟそ當寺へ使を遣ゟ上總介廣當の五輪
石塔婆の苔を採せぞ。それを服用ゟハゞ疾病立地ゟ癒り果ゟゞべゟ感謝ゟ堪ぎ
悄々地ゟ賽をゟゟる之和殿ハ又何ゟらの所用ゟりて這頭を過りゟひる折ゟ今の

暴雨天変恐るべき這大石の撲ま[illegible]ござりけるに是高運の致す所神明佛陀の加護ならん宜の賀をべりくと祝せど孝嗣礼を返して原来廣常の墓石の苔へ効験虚談かござりけり洒家が新参ながら[illegible]ぐ[illegible]歴去ぬる随ふ當寺の廣常の五輪堂ありとや知りて見やと思ひて来かけるが暴雨の路を去あぐみ剰化石の天降るが逢ぬ在昔唐山姫周の宋の石墜る者ありと春秋左傳が見えそう或ハ又星隊て石ありうとの者あれどそれ是いそれが同じからぎ見ん是いそれが同じからぎ見ん是いそれが同じからぎ見ん

何ある物ぞと問ひ孝嗣然がとよ白狐既ふ千歳を歴て其功徳ヌある時ハ化ある龍ある物あり是を狐龍と唱做しうあや傳ハの事ぞ[illegible]去を歳の夏前面の岡ふ我必死を救ひける政木狐即是ぞ這政木狐の事いしも説まくまるふ言ヌけるとの間ふ両個の武士も共侶ふ我[illegible]

孝嗣ふうち向ひておゝ政木主初て拝面仕る[illegible]館山の城の頭人江田九郎宗盈畑夏作通豊のそいへ近曽館の仰ふよりて廳南より移轉て館山ふ在番仕りふ這頭ある神社佛閣の古記録什物を廢検の為ふ今日去ぬ當寺へ来ふけりふ料らぎ武田圭ふ来合ぬ是のこゝろぎ耳新ある狐龍の化石を見聞事ひヨヌろうとの孝嗣礼を返して豫て少知る江田畑両生思ひがけぬ対面ハよ[illegible]折ろふあいだ却て這化石の事ふ就て當寺の住持ふ面談して請まくホしう思ふよりのぞ詞を添のひねと憑べ宗盈異義もなく[illegible]誘ふ次客殿ふ旦猶餘談を兼らん武田主も共侶ふと誘引立れば畑通豊ハ先ふ立つ案内をぞ然ば政木孝嗣ハ信隆宗盈と共侶ふ自他の伴當を相従へて引ぬそ寺内へ入る程ふ沙弥道人ハ側聞して疾方丈へ告んとそ走りて先へ退りける

畑るう作
溫宗ゑう

金光寺の
門前に狐
龍正覚を
示せ
のぶたね
たつぐ

迹ゆへ近所の荘客们天より墜る石を見んと走り聚ふ者堵の如し又寺よりも年少き僧等の立出て觀も又るべし余程ふ政木孝嗣い武田信隆江田宗盈畑通豊等ふ安永内ふせうまそ先賈常の墓石を見るふ果して山脚ふ沙洞の内ふ在り現ふ蕞小ふる無銘の五輪堂なれども半分い亡て高さ二尺ふ足らず只青苔ふ裏まそとも見えざるまで孝嗣い憮然として一霎時謁して且いやう在昔上總ふ賈常い當國の人ふして二萬騎の大將ふ成ありまでも身い誅せらるゝ國亡びそ子孫断絶あらるよう今ふ至りて觀ゑ者い只羊体の五輪堂のみ柳亦悲しからずや世の相將の威權壮なるとて車馬門前ふ滿ざる日ふく倘其職を去るとき殿庭ふ雀羅を張べし栄枯得失の理り誰ふ竟ふ免るゝ者との人ぺ信隆宗盈通豊皆共侶ふ崖嘆ふ打連立て孟関ふ赴けば役僧早く出迎へて躯て客殿ふ請待を孝嗣則正客ふ宗盈信隆い左右ふ列し通豊い下坐ふぞ侍りける。徒而看茶の礼畢りて住持出て對面を當下江田宗盈い住持ふ孝嗣を引合せ化石ふ事を説示せば孝嗣則住持ふ向ひそ方僅當寺の門前ふ天降りし狐龍の化石い咱ゟと由縁ある白狐の終焉を示せし其故い箇様々々と政木狐ふ事ふ顛末他い孝嗣の母ふ受しる舊恩を報ん為ふ去々歳の夏前面の岡ふそ妖狸をまそ孝嗣の寃屈の死刑を救ひし當日他い功課満て狐龍ふ変て不忍の池より外天ふ翔る折後三稔を歴さりんふい當國ふて其終を見るよしもあらんとのひしをまそ説示して又いやう這奇事い我のみるらまそ當時犬江親兵衛も目撃あらる所ふそ狐龍の先言果して違ぼ一大奇事ふいらぎやとのみ詳ふりければ主客齊一驚嘆して異聞ありとそ稱ける當下孝嗣又のいやう右ふ就て咱ゟ情願あり。いふで件の狐龍の化石を當寺内ふ埋葬して塚を築まく欲を雑費い大田木へ歸城の後必調進

致さゞー。とゐへを住持なるも等閑ならず。其後あるとき輪石塔婆あり。在昔近衛院天皇の御時、妖狐変じて宮嬪玉藻前と化て帝を惱し奉りしかば詔して天文博士加茂泰親に攘せるに、妖狐竟に勝ずして走りて下野なる奈須野に到て躲れり。於是三浦介義明上總介廣常に千葉常胤等に詔して奈須野に到て狐を獵しむ。件の妖狐、廣常が射箭に斃れども其屍忽ち化して一箇の毒石と做りぬ。世の人殺生石是を彼と此とに異なれども其屍を埋葬致すべき是廣常の忌む所。那靈安狐とやらんの化して石と做りしを當寺の長老の言錯ず。那九尾の妖狐玉藻前の小説、近曽明舶の齎しゝ封神演義と做りしを稗官者流の新作と素より知べき事なるを。然を昨今世の見れる下學集の是を載又能樂の謡曲なども殺生石と題目して作設しけれど奇なる

今の世俗のひもて傳へて故事と思ふ。那奈須野なる毒石の砒霜礬石の類なるを。附會してのゐるゝん非如其事ありとそも玉藻知きの邪物ぬて至る所人ぬ尊き政木狐の靈狐ぺ勤所世の功あり廣常這理を知らざらんや那人倘靈ありとても決て忌嫌ふべからざる長老ぞろ安くるべーと解きて住持の頭を撫て拙僧軽戈ぬーて失言せりいふ色海容あれかーと勸解れば宗盈執合ぬて政木主說ぬる妙ぇ長老を亦出家の本性慾を飾らぬ人の及だる所ぬて共ぬ感心の外ぬぎる那化石を葬入まそ埋るまその夫役等ぬ事ぇく計ひてんとのゐぬ住持も孝嗣も相歡びつゝ是を謝して要談既ぬ果ーつべ住持ぬ辭ーて退りけり。登時又役僧ぬ沙弥ぬ課て茶を薦め果子を薦めなどもる程ぬ信隆ぬ孝嗣の戈を感じて旦ぬやう大全主ぬ妙年なれども玉藻狐の事なるゞぬ論辨老僧も及ぶべからぎ。就て学問せまゐーねよーの狐龍の事ぬ何等の書ぬ載らる乍

あ
知らぎ。必出所あるらん。少まく欲ーうと問ひ孝嗣然ばとよ。孤龍の事ひ昌義の
犬江親兵衛が既の見る所ありて奇事記ひ出さうとのひ。今按ぎるひ淵鑑
類函狐部ひも載されど空言ろうんと思ひーひ疑ひ解ていとのひ。信隆點頭て
現ひ書ひ見るべ。昔ろーう。今博識の教ろくひ誰ろ狐龍の出所を知らん。欤び是ひ
優者ろー。然ども狐龍升天の事ひ就て猶疑ひ思ふよーあり。嘗聞義實
老侯少ろーう時結城落城の日ひ死を免れていうで安房へ渡さんとそ相摸ろる
三浦の海邊ひ舩を徴もるひ程ひ白龍俄然と海より起りて天ひ登るを見
のひひ死とのう。龍い鱗虫の君ひして甚ろ貴ぐ。其徳を王者ひ比ひ。源氏い素より金徳
ひそ色い白を貴べ。然いひや義實主安房ひ造りて戔程もなく神餘ひ榮
義旗を揚て逆臣山下定包を誅戮せーとう。滿呂安西さ久伏誅して安房四
郡を併呑ーて更ひ上總を討從へてをさ〳〵賢君のゆえもり其子義成王又

出監の與ふれ高く遂ひ上總人の從ざる者ひ威服ーて總半國を討靡け善政施
きざる所なければ國民皆竟辨の思ひを做せり。其仁義良善の君ろる事思ふ。今の
諸侯ヲヌーとのごとも壽あるべくもあらぎ。刻又八犬士及和殿の如き英武賢戈の良
臣ヲ又ろう。且白龍の祥瑞あるーを思ふべ。竟ひ足利氏の代りて天下の連師ろる者い
必里見氏ろるべ。然いなくて東南の一隅編小ろる安房上總を領まるのみ下
總半國の外ひ又地を增るのを以ぎ。去歳の冬両管領と戰乱て偶攻捕る敵の
三四箇城も和睦の後ひ返ーと與へて。鄙語ひも濟てを二百労ーて功名ひ
ぎ。然べ祥瑞も負をざく。賢兄必辨あらん爭何ぞや
と論されば孝嗣莞爾とうち笑て不我思ふよーあらぎ。那白龍の事い
あり孝嗣も亦傳聞ふが。那時龍田の老舘ひ龍の服をのみ見ひて。龍の
頭を見ひぎ。因て思ふひ老侯御父子い。仁義賢明の君ろれども。徳を

中國の地を分て八大士の如き賢佐股肱の良臣を得ばこそ祥瑞も有けん又那時隨從の両家臣杉倉氏元堀内貞行が只其龍の尾をのみ見しのみ子孫末世の至るまで當家の冢宰と誇れども只偏小の國を有ちそ兵馬連帥の大權を執るは由なき者和漢の事ゝ是則天之命之請唐山漢末三國の成敗をもそ是の璧ん那昭烈（劉備字は玄徳）の賢君之當時十八諸侯のことゞも其仁義忠信ありよく及ぶ者あー旦是の相うる者諸葛亮龐統法松費禕蔣琬馬良姜維の如き賢佐忠誠の衆臣ありき又五虎の勇臣関羽張飛趙雲馬超黄忠の如き者數ありぞ。みるれども。只魏を討亡げて漢室を再興まるに至ぬは巴蜀偏小の地に有ちそ。僅の帝號を稱まるのみ。是則天之命之人力の及ぶべきあらまも後帝劉禪不小肖あーて。佞人黄皓を愛あーて。

父子俛の二世四十餘年あーて國亡びあけり初昭烈の蜀ふうち入りし時成都の火井より是よりし其火漸の壯あるぬ漢の火徳を色の赤を貴べり是昭烈の漢の續て大位の即給祥之とりつ然いや其帝號を稱まるあ及びそ件の火井のよく燃て間斷あー任而昭烈帝の崩じ諸葛武侯も薨じてより其火漸の衰て後竟に燃ざるぬ有任れば其火井へ昭烈の為ゆの祥瑞るれども後帝のゆの凶兆之曹操曹丕の漢賊之曹丕が漢の獻帝の逼りそ其位を篡あの當りて魏王宮前うる窓井より黄龍出て天の升りぬ魏の土徳あー七色の黄を貴べり則是曹丕が漢帝の禪を受て大位の即給祥うとそ年號を黄初とも。あれども其実ハ篡奪まり何の受禪う是ゆん璧言ハ曹丕の如きの人を結托て其衣裳を剥會ひうそ我這人より。衣裳を恵れうと知らで只其勢利の媚るの故の以祥瑞を降さんや縦其事ありとそも。偶然の

井の中より出る陰火の事後ゆの條に云ヒ不思議の一ツ其火の出る所を井のやゝ深きそうで其火を取用ゐる時ハ必ず桶を掛て家の内へ引ずり入れて火の代る者ハ蜀の火井へ這類多ゝ

あそ嘉瑞のわらぢ然べき順逆邪正差あるども魏も亦蜀漢の後るゝ者僅か一稔竟の司馬氏の簒奪せらるゝ是けり是の由てあるを觀れば成敗をもて人を論ずる者い天命を知らざるゝ又徳を脩ぎしと祥瑞を負そみづから允さず世の胡慮のあるらんのみ最憚りあるこゝろぐら老舘の見るひらる那白龍の祥瑞も亦當舘の御善政も城を屠り地を畧しと我封内を廣くまぎ冤為のわらぢ民の父母たる心をもて國安うまと思召ものゝ人分を知ざれば貪て飽ことなけれべ苗害踵を旋をべくぎ非如我君房總両國の守のみにて地を増ふのわざとも良将の御名後世の流芳して。御子孫長久ならんのみ仁義善政の大益あり。仁君賢者の慎懋めて常の樂ふ所い只是のみ何ぞ裨益あらんと。まことの白雪い調高うり恐らく俚耳の入りがたしと思ふい什麼と理を推て言詳かに辨ぜれば信隆の阿とぞうのみ一要時感嘆の聲をあげ又宗盈も通豊も膝の杙むを覚ぬまでの耳を敢け心を澄して正論々々とぞ稱ける姑且と信隆が急の貌を更めて孝嗣の謝しとのみやう通愛さる和殿の英才今の世のいまゝ比ぐさ一里見殿の盛徳あり八犬士さへ和殿を犬士の外のせへ造あひぬることを幸ひ我聞所をりてのべ山林房八と和殿を犬士の外のせへ造化の小児のみ脱落欤然ざるは是も天命あらん惜むべしくと嘆言を孝嗣恋へ。世ぞ庭の樹柱を見るへりて日景い既の斜のうりぬ所要い風く果さるゝ鈍や晤譚の時を移しぬ退りて路をのそべべとのべ信隆諾ふて咱等も潜行るゝ虚々とまて居ふのまぢ卒供侶ふと身を起せべ宗盈と通豊へ留難つ目送る程ふ役僧も亦出て來て旦管待の疎畧を陪話て玄関までぞ送りける。偖而武田信隆へ伴當等をのそべ立て別れて廳南へかゝりゆく程ふ孝嗣も

亦伴當を従へて這邊なる村里を遍さまで巡歴なしける。尒程に武田信隆ハ其
通路思惟るに里見君臣の英武才幹且政木孝嗣の妙論理辨に感服して。
及びがたしと心に恥て是より機変を行ふことなく生涯里見に従ひける。然バ政木
孝嗣ハ又幾の日を累て上總を遺なく撿果しかバ。下總へ赴きて東西と經
歴なしつ。遂に武蔵へ立踰て二親の墓詣せしよしなどハ既に前回に具なれバ言省て
寫さず看官前後を照して見るべし。恁而政木孝嗣ハ其の年九月の下旬に
届りて雜色村まで來り聞て金光寺へ立よりて。是最に住持に憑よする。狐
龍の塚を閲するに廣常の五輪石塔婆を去ること五十歩許にして件の化石を
埋めたる所あり。塚の高さ三尺許にして上に一箇の卒都婆を建たる。孝嗣心欽て。
寺の玄関に呼びて。却役僧に謝義を舒て退りて大田木へ歸城なる。其後使を
金光寺と館山の城へ遣して住持と江田宗盈に化石埋葬の雜費を還しつ。

又金光寺へハ米銭さへ布施して歓びの心を盡ける。然程に土人等其塚を見て奇
特を稱て訛りて狐塚と喚做しかバ金光寺の山號なる古塚山の古の字を易て
狐塚山とぞ唱ける。按ずるに房總志料上總部雜色村の條下に云古江の金
光寺に狐塚あり今ハ其所知ずと。是に因て金光寺の山號を古塚山といひしを
後に狐字を嫌ひて醫王山と號まとりて又廣常の石塔婆の苔鮮の瘧疾を
治するてふなども同書に載たるを借用もて看官作者の用意を知るべし。間話休
題。是年八犬士も婚姻の後義成主に請まつりて各故郷に赴きて二親及親
族の墓詣せしことなどハ既に前回に寫せし如し。其が中に大塚信濃成孝ハ曩に
義兄弟等が貸たる金をその時遺なく還して雜費の資助にしたり又犬山道節が
二親と異母の女弟濱路の墓を安房の延命寺に建るに及びて成孝又其資助に
なることを勘からず濱路の墓へ大塚が建べかりしを道節ハ圓塚山にて濱路の横死の折に

環會て且其寃家網乾左毋二郎を擊す果ー又濱路の亡骸を火葬たける因縁ゆ
支是始ありて終さくあるべらぎとそ。強て施主のるりこる之是を上の略ー
詳を看官前後を併見るべー却説政木孝嗣い大田木へ歸城の後紹村の城へ
參上りそ。飯府を告奉るお大塚大江大村の三大士も既の出仕てありーべ孝嗣へ
親兵衛お狐龍化石の事の趣を云々と告知らそるお親兵衛自餘の二大士も
其奇お驚くまでお靈物の終めるを俱の感じめりける。依而件の三大士義成
主の政木孝嗣が國中を檢歷古果て謝恩の為の參上りーよりて告まりーべ。
義成則孝嗣を召よせそ。旅中の事を問ゆお件の三大士も付りーよりて當下義
成主い孝嗣を近く依りせそ。汝經歷の回我封内の要害い皆檢たつらん意見も
むいべ述まくかーを仰お孝嗣額を衝て然ー御要害皆堅固おそ稟上ぶるも
いぶぞ。但ー國府臺の一城へ前い暴河おそ後も岐川ゐれが大敵を防ぐお足り

然けれども後の川い淺瀨おそ其寛い沼ぐ景裏お臣ゐ那里お在りー日件の川お
鶴の降て求食を見より。敵倘其淺沼ゐるを知りて鬨戰闌ゐらん時渡ー城の後
より稠入らべ防ぎがたくやいらんとうおをうちぬ之犬塚犬江へ愕然と面を注ー臣
ゐも曩お那城内お在りーる。其我お大全が見出ー稟上るとそ幸ありけれとの公べ義成主點頭て好々我ところなり。秘よくと推禁
めて其後國府臺の城の頭人真間井秋季継橋喬梁の二書を賜りそ。
悄地お其我を戒めゐ其書の末お遠くともむ之べ隱れる敵の見えなら
ろお用心をせよとありーべ秋季喬梁謹兼て城の後お由斷せず戒を固く
そうーお是よりの後數世を累て里見義弘の時お至りて北條氏と國府
臺の鬨戰お敵那城の後の岐川お鶴の降ーるを見出て淺瀨を渡ー塀を破りて短兵急お
べ一隊い急お城を攻一隊い悄地お後る淺瀨を悟りー

攻入りけれバ里見の士卒必勝ぎそ。竟ハ姿洛城をうとのハ益義弘ハ武勇餘れども文学ハ疎けれバ先祖の遺訓を知ざやありけん惜むべきぞや今國府臺の城迹を見るハ那岐川ハ横八九間もあるべし深水ゆゑ鶴の脚の立ぐもあらぢ今の如くならんハ當時ハ実ハ浅沼なるハ暴河の水を引入まそ川の如くハ見せるなるべし畔田鋤れて海となる支今の変革凝ふべくもぎ故を温て新を知るを学を好むとのふべきのみあらず是後の話之却説犬江親兵衛いまの日義成主ハ政木狐の支の顛末ハ固様々と告稟せば又政木孝嗣も狐龍の化石ハ做りて金光寺の門前ハ天降りを寺内ハ埋めりさ之少え上るハ義成連りあり矣局ハ入りて餘談盡せぎ見えたり。

犬の段ハ猶長ゆゑまべ這勝回も車下の整童て又下回ハ解分るを聴ねゝ。

南總里見八犬傳第九輯巻之五十二終

第百八十勝回中編

延命寺ハ義成牡丹花を賞を

富山の嵐ハ念戒迷題の歌を見る

登時義成主ハ狐龍化石の一奇談ハ感嘆愈淺らぎ成孝仁孝嗣と礼儀ゆゑち向ひ物の化石ハ珎ーかゞ狐の化て石ハ做りの做りーハ大伴左ゑ彦ゞ妻松浦佐用媛又秩父重保ゞ妻の如化ハ共ハ其古蹟ありて望夫石の名を遂ーらる唐山ゆゑものゆゑあゝ漢の張良ゞ師ゝとのハ黄石公是ゞあれども虚実のまゞ詳ならぢ就中狐の龍ハ化ーるまら思ひがけなき一大奇事とハべきのみ大学ハ和漢の学ハ富り必意見あるらん這義怎麼と問

べ。礼儀答く。然ノ愚按ずるに化石の多くは水土ゐよれる壁ゐ那化石谷の如く鼻紙まれる材まれ其溪水ゐ浸ものこと二四十日ゐ及ぶ時ゐ化して石ゐ做る。を見て知るべし。又那望夫石の如き萬葉集ゐ現志浮松浦佐用姫夫恋ゐ領巾振りしより負る山の名とゐ歌あれども恐らく古俗附會ぜしそ。海邊ゐ立る天然石の偶人形ゐ似るを見て望夫石の名ゐ負せしゐやひむ唐山ゐも望夫石あり。和漢同日の談るべし。又那張良が下邳の圮橋そ。六韜三略を傳授せられしとゐ黄石公未生の人そ寓言のそ其實ゐ張良巳が徳を神ゐせんそ。黄石公とゐ異人を作設く後十三年を歴て其師の化して黄なる石ゐ做りしゐ逢ゐるごとのひしそ。時の人悟ぜして傳へく故事ゐ做りたるゐやひむ縦是等のるありとそも求めく沁ぐるるわが必ずとせべるまじ。這故ゐ聖人の怪力乱神を語ざれ。そ。と云ゐ左もあれ右もあれ孤龍化石の事を憶ふ。

他命終るゐ及びて必ず石ゐ做らんと思ひて石ゐ做りたる迹ゐ小谷ゐ似る石あり。小鎚ゐ似る石あり。雷斧雷鎚と唤做しそう云ふ類ひ奥羽北越下野そこそ大風雨の時鏃ゐ似る小石の墜るを支ある。そ。土人各付て神軍の矢丸根石とぞいふる是等の風ゐ吹颺られ汐磯の雲雷の気ゐ蒸れて凝りく形を做せるのそ。別ゐ其石あるゐあらば是ゐ申して之を覩れば孤龍の化石もまの理ゐ知らべし。他既ゐ數盡て命終らんとする時ゐ雲雷の気ゐ蒸れて石ゐ做りて墜るるらんと思へば疑ゐもるくいふ。然ども今ゐ愚按の及ぶ所を稟ー上るのそとのゐ詳ゐするければ。義成主の於びかりそ犬塚犬江政木等の二士も倶ゐ感服そ。学問も亦淺薄るそれば我問ふ毎ゐ其父合中らざるとのゐと誠ゐ好大阪下野ゐ智玉そ。学問も亦淺薄るそれば我問ふ毎ゐ其父合中らざるとのゐと。然るを又造大学あり。礼譲のそゐ理を究めろそのも学問の力ゐこそと補へ。

似ざれども。又一奇談を。舘いらもご聞しめさるや。一向人の導ふ妙ふ。大禪師の去歳よりて。延命寺ふ在り玉ふる法務の暇ある時ハ忽ち等として那地適ま〳〵人是を知る者ハかくの如くなる事日毎也。稍久しくして禪師隊より。徒弟念成ふ教示もらむ所要ありて。我を請まく欲しるべ汝本尊を念じまつりて。速ふ鉦をうち鳴しね然ハ必驗ありと。我立地ふかへり来てん努る疑ひそとのられかば念成則其意を領く事ありて。時ハ教の如く鉦を鳴して請まふ禪師ハ果して響ふ応じて忽然とかへり来く。勤務ふ就くこと常の如し。念成ハ訝りて。其往復する地方を問ふ。禪師答ぜうちに失ひて。開ふ汝ハ知る所ふあらず。後々ふ至りて。悟るものありとのられけり。有徳一程ふ富山ふ。伏姫神の神社ふ詣る者時として那品山嶺の頭ふ雲霧深く起龍て拝れのごる日もこれあり。或ハ又樵夫などの富山ふ入りて。品山嶺の邊を過る折ふ件の雲霧起龍て品山嶺の内ふ讀経の聲の洪なる日もあり。又ハ斧の音木を穿つ鑿の槌音あるの日もあり。けれが其人数萬ふ怪ハそ人々ふ告ごせ〳〵ども。言遂ふ延命寺へ告ざりけれが是ふよりて念成ハ稍悟るものありて。原来師父ふ暇ある毎ふ富山ふ造りて品嶺ふ籠ものよしをあらむぞらんと思へども覿面ふ問質さんハさまでふ尚疑ひて鮮ぎとそ。さも奇事ふのらまや。遮莫風聲のごとくハ虚實を知るべくもあらず。禪師の参上りて折ふ問せのつぎ分明ふらんと言詳ふ告禀せば成孝も倶ふやう其ふ我ハ臣ふもあらず。かゝる事怪ふ過ぎたれが然しも虚実を測難て禀上まつる紀。とのゝべば孝嗣も亦ふやう臣ふもあらず。逆旅ふ在りてかゝる其風聲ともうさまとも禪師の道徳をのそ推も時ハ尸解ふ等しき蟬脱の通力をやるのこけん虚談也あらじとの衆評を義成主ふも多く。親兵備ふ言具ふ。大全ふの所も亦所

師の去歳よりて。延命寺ふ在り玉ふる法務の暇ある時ハ忽ち等として那地適ま〳〵人是を知る者ハかくの如くなる事日毎也。稍久しくして禪師隊より。徒弟念成ふ教示もらむ所要ありて。我を請まく欲しるべ汝本尊を念じまつりて。速ふ鉦をうち鳴しね然ハ必驗ありと。我立地ふかへり来てん努る疑ひそとのられかば念成則其意を領く事ありて。時ハ教の如く鉦を鳴して請まふ禪師ハ果して響ふ応じて忽然とかへり来く。勤務ふ就くこと常の如し。念成ハ訝りて。其往復する地方を問ふ。禪師答ぜうちに失ひて。開ふ汝ハ知る所ふあらず。後々ふ至りて。悟るものありとのられけり。有徳一程ふ富山ふ。伏姫神の神社ふ詣る者時として那品山嶺の頭ふ雲霧深く起龍て拝れのごる日もこれあり。或ハ又樵夫などの富山ふ入りて。品山嶺の邊を過る折ふ件の雲霧起龍て品山嶺の内ふ讀経の聲の洪なる日もあり。又ハ斧の音木を穿つ鑿の槌音あるの日もあり。けれが其人数萬ふ怪ハそ人々ふ告ごせ〳〵ども。言遂ふ延命寺へ告ざりけれが是ふよりて念成ハ稍悟るものありて。原来師父ふ暇ある毎ふ富山ふ造りて品嶺ふ籠ものよしをあらむぞらんと思へども覿面ふ問質さんハさまでふ尚疑ひて鮮ぎとそ。さも奇事ふのらまや。遮莫風聲のごとくハ虚實を知るべくもあらず。禪師の参上りて折ふ問せのつぎ分明ふらんと言詳ふ告禀せば成孝も倶ふやう其ふ我ハ臣ふもあらず。かゝる事怪ふ過ぎたれが然しも虚実を測難て禀上まつる紀。とのゝべば孝嗣も亦ふやう臣ふもあらず。逆旅ふ在りてかゝる其風聲ともうさまとも禪師の道徳をのそ推も時ハ尸解ふ等しき蟬脱の通力をやるのこけん虚談也あらじとの衆評を義成主ふも多く。親兵備ふ言具ふ。大全ふの所も亦所

以あり因て我憶ふ、大い素より老實ある出家人ろ。世の常言ふらむぞ。正法ふ不思議ろ。非除、大い道徳熟ーて通力自在ろともふ幻術外道ふ等ーかる。定出没不測の利ふもあらば君子い友く信ぜべらぶ但ー大学のこらよの
もろ。意見もあらば皆ふく欲。と問まく礼儀額を衝く。否臣等ともも必然の
笑へ亶ふ上がらくめへども禅師の出没不測ろも那幻術ふ同がらぞ目今孝嗣
がらる如く戸解ふもふた蟬脱ろんろ。譬ばく極楽往生を願ふ者いおのづらふ死期を知らく。
愚婦も豹任坐臥ふ念佛ーそ。其日ふ至らく死まるも是あり況や、大禅師い正直無欲の浩佛ぇ其出家の
始より伏姫上の御恩徳を報んとのを念ぢ故ふ那身い延命寺ふ住持ろく。
衆徒の長くるを栄とせぢ。いらぐ富山ふ山執ーて生の涯り姫上の御菩提を弔
まらまく願ふ心の移らねば身い生ぁぐら戸解ーて心神富山ふ往還ろ。是
奇ともぞぐらぢ。和漢の高僧遷化の後亡骸柩を蛻ふく。他郷の山澤ふ
遊ぶ者あるを漢籍ふ戸解と云ふ。唐の高僧傳ろ。達磨ヨヲ羅是ぇ又我
國紫野ろふ一休和尚も近日戸解の噂ろ。是ぇ
ろとを守ざれば則新奇とのみまくのを邀古唐山ろ黄帝い夢ふ華胥國ふ
遊びーとの故事あり又天朝ろ小野皇い生平ふ冥府ふ往還せーとのり。是
等い恐らく神遊ろ。魂幽冥ふ遊びーらん。然ば戸解蟬脱とい異ろふ似れ
ども。這理をりく推ま時い、大禅師の蟬脱も幻術ふらぬと知ろふ足れり。然を
今憖ふ其等を禅師ふ質ーぬぐ禅師い本意を失ふ。事の障ふろ為べく
のやいん只知らぬ面色ぬ。其終を俟せぬで。必做せとあるろ為べーと云辨論
らく見ぁれば義成王の感悦ふたらぇ成孝仁孝嗣も精論ぇとぞ感ーける。
姑且ーそ義成王い成孝仁を見らく。是ぇ事を辨論せーい大阪下野を

首尾自餘の大士等と政木大全ホ至るまで我其言を听く益を得ること
ろも多し大学ハ言葉寡くて辨を好まざると思ひホ那蟬脱の辨の如くに人の
及ぶ所ホあらず我疑ひ氷解せり現ホ徹者の腰を折ひ其術ホ陥れざること
也好々我もろもろ大全の逆旅の疲労もあらん根小屋ハ退りて休息せよ
とて開ひ儘身の暇を賜りて去の日れ餘談ハ果ホけり倦而去の年致仕の老
臣杉倉木曽ホ氏元小森衛士篤宗浦安兵馬兼勝等もち續ひて身故
又長亨二年ホ堀内藏人貞幻も衰病ホもりて古人ホ倣り也あれども杉
倉武者ホ直元堀内雑魚太郎貞住ハ既ホ親の職を紹ぎて家老もり又ホ森
但一郎高宗浦安牛助友勝等ハ皆當職ホあり然ハ又去の年の夏四月
十六日ホ義實老侯卒りぬ義成父子君臣の歎ホいふもさらぬ其安葬の支
児孫親族整喪の事ども都ホ閑暇ホもらぬを看官宜く猜もべし余程ホ近囲
他郷の大小名里見の仁義ホ感悦し或ハ英武ホ憚る者各使者もりて好を
結まるも却其諸家ホ足利左兵衛督成氏平兼久自亂を首ホ下總
千葉新介孝胤常陸ホハ佐竹高久鹿嶋の黨武藏相模ホ
扇谷山内の両管領三浦陸奥守義同長尾判官景春等ホ和
睦の後使者往来して會盟ホ致ふぞ又甲非文の武田信昌ハ家臣甘利
虎泰を使者として安房へ遣し又三河ホ隣尾判官伊近の使者錦
織機馬伊勢の國司北畠中將の使者細曳平太夫周魚等ホ各稲村の
城ホ来聘して海上通船の好を脩ふ是ホ於て義成則是を受て更ホ蛮
崎十一郎照文其女壻十二郎照章田税戸賀九郎逸時古屋八郎
景能等ホ各禮の使として件の諸侯の居城へ遣ホ贈物各差あり
是より年毎ホ喜始例と做ふ義通の時ホも疎ふぞありける最後ホ結城の

判官成朝ハ能化院の權僧正影西と小山大夫次郎朝重を使者と
奉て里見と好を結びしかば義成も亦、大禪師ハ犬江親兵衛伜蟹崎照
文を相副て結城へ遣しける事の趣ハ前板百二十九回ハ見えたる如し又能
大刀自ハ義成の仁義ハ感服して和順の思ひありとかへども女流ハ
ぶハ及ざるにや只稲戸津衛由充のミ年の春毎ハ使を犬川大田許遣して義
成王の為ハ千歳を壽ける是より房總ハ異ありて敢干戈を動さゞりき
四民業を樂ミそ不孝の子不忠の臣なく畔を物ハ譲り商ハ着ハ
價を貳せず路ハ遺るを拾ハず夜戸を鎖さず年ハ荒凶なく鰥寡孤
獨も餓ず凍ず皆是義成主の仁義善政の餘澤なれバ民の是を仰ぐ
こと日月の如く赤子の父母を慕ハ似たり然バ里見の封内かくの如く無異なる
ハ犬士皆ハ俱ハ休暇の命を給ひて各其居城ハ在り其内中四犬士ハ稲
村ハ在勤して代るハ半年を以せ但年首五節供の幷礼臨時吉凶の
參勤ハ事の決ハかゝらず八犬士皆ハ參集ひて國政ハ與りけり既ハ
文明ハ十八年ハ盡きて且長享もせらるゝ延徳と改りぬ是ハ亦ことづかり
六十年ハ歴たり這年四月十六日十四日ハ一云ハ結城落城の昔を偲ぶ季基朝
臣の六十年忌ハ義實老侯の十三年忌ハ丁るそれの日美義成主ハ早天
より稲村の城を出て延命寺へ參詣あり両家発杉倉堀内有司近習の
毎伴當ふ又八犬士も參會ひて既ハして廟墓焼香の事果て美義成主ハ
客殿ハ在り住持、大禪師ハ沙弥念成をもて看茶の礼あり八犬士犬塚信
濃成孝犬坂下野胤智犬江親兵衛仁犬山道節帯刀忠與犬村大
学礼儀犬川長荻荘介義任犬飼現八兵衛信通犬田豊後悌順両

家老杉倉武者助直元堀内雑魚太郎貞住を召り仕る折ふし這客
殿の庭ふ牡丹花開満て紅白色を交へる香風頻郁として得もいはれぬ
香弄ふあるれば義成王い立難て端近く居ちつゝ大禅師ふ法談こそ
慥ぞ時を移しの其語次ふゝ大のの素より
情願ふいらねども恩命黙止かたければ既ふ十七八年を歴迄ら赤肉ぢる如く徒
弟念成い年来ふ做りぬ尚壮年ふ仍れども佛学既ふ煉熟して法脉を嗣ふ
宜しくぞ傳燈の素懐を遂て身の暇を賜らまく欲を這義を餞させ
かしと亦他事もまく請禀せば義成ぢく沈吟して其情願ハ今ふ創ぢ
禅師當山ふ入院の比老舘の諭のして十稔と契りのしを今さら林ぬ
かけれども我年来凝思ふ由あり禅師の身の暇ある毎ふ忽爭ともて寺ふ居
らぬ留守ぢる念成ぢゝ所要ありて急ふ請まく欲ぢる時い本尊をうち念
まて連りふ鉦をうち鳴せば禅師い亦忽然と寺ふかへり来ぬるふあとべや
又富山ふ入る若那品山届ふ禅師の經を續聲ゆえ又有一時い水を穿
ん數釜の音ぢる日も是あり。あれども其形體をゝを我其噂を少王稍久く
ゐり見れども。よゐ折ふければ問ざるれぢのゐあるい狹のふぞや。と問れて、大い驚く色
る。然ど且始より禀上ん臣僧祝髪入道せゝより施王の歎待ふあぶれが。
敢亦火食せぢ日毎ふ蔬菜果子を生食しては只い水を飲のを願ふ听い伏
姫神の御菩提と當家の御子孫敏系日日を祈ると間断るゝの故ふ身い
當寺の方丈ふ在り。心い富山の品山届ふ在り。約莫かくの如くふあて喜怒哀
樂の境を免れ栄枯得失好憎寒暖貶ふ拠念せぢれい我身の有を忘る時
あり。あゝぢてやまく欲ぢる地方あれば忽爭ともて適ざるゐるく還まく欲ぢれば。
忽爭ともてかへらぢるとゐ。然ればとて。脚地を踏まぢ雲ふ駕るふあらぢれども出

義成延命寺の書院の牡丹を觀る

吸思ひの隨ふ八是何等の所以ぞや。我いまだ是を知らず我知らざーく
自在ふる八那世を厭ひ山ふ入りて遂ふ形を煉り性を易て品居水飲修ぬ
給て神仙ふ做る者ふ似さり。但神仙のふるふ所ふ佛も亦雲ふ駕り波を踏む。
法術量るべからず。佛を稱て金仙とまで開ふ左もあれ臣僧出没自由ふ
釣ーよる。疑ーなきあれべ立地ふ悟り人召時へ遠ふもやおそくして念成が言頭ふ
至あるく鳴を鉦ふ富山ふありても我耳ふ入れり。聲ぺ唐山魯の曾參が至孝
なるをそ日暮るるまでかへざる時。其母倚不樂て則門ふ立ちて望ぐ指を
噬時ふ當日子の胸忽地痛て母の待ことを知る故ふこそだてかへり來ぬるが如ー。
益念成ふ先実る。師ふ仕るの誠心ありてそうち鳴を鉦るれい幽冥ふ通ぢ感
るべー世ふ神佛を祈る者ふ利益ふ其人の至誠深信ふ在り誠ふ必神の
如ー那鉦念成が鳴をふぁらざれバ遂ふ我耳ふ入ることー。是其誠を知る

べそのこ。ふる往る文明十六年の冬く這白濱ふ波濤の打寄ける異圓
材あり。其材の周匝十圍許。長ふ一丈五六尺ふるべー。其色黒くして香氣あり。
聊削含て焼試るふ疑ひもるに沈る。臣僧則木匠ふ課て其材斫
斫せて。分ちて五十五材とせ是を富山の品山嵓ふ藏めぐらもれども人是を知
らず。是よりの後臣僧暇ある毎ふ諷々然として富山の嵓ふ詣りて旦夕ふ
姫神の奉為ふ讀經ぢなり。書ふ則其材を刻て須弥の四天神王を作
一驅を刻る。約莫這細工の歳月十餘年ふして稍落成仕り。是を當
寺ふ彫刻せざるい寺内も尚俗氣あり。今の法師ふ寂滅為樂の教を思
ひて富貴利達を願べ八又富山の神嵓ふ詣る者も稀ふ支も臣僧を見る
ことなぐ況刻做ーる。佛像あるを知らざるふ雲霧起龍ー。ふぁ其

人々の凡眼汚穢れて視ども見ることを得ざる人既ありて古佛諸菩薩五
十體の開眼ありまつりしかども四天神王の分ざる開眼を得ざる這等ふ就て八犬
士等ふ商量まべく思ひまつりしかふ其等ふ及まして舘ふ向れまつりしが憶
ざるに辯仕まつれる佛像の尚神嵐ふ在ち數珠の當寺の什物ふせまく思ひて
念成ふ取せ給ひし疑しく思召さず御臨見ふ入れ玉ひしとのふを念成ふ
身を起して數珠樞より數珠と倉ふ載て義成主ふ見せまつるを
るふらまざるふ倉ざして異香一室ふ満しかば義成主ハ妙ふ奇しく其言ど
听くのまゝ字ふ數珠の異香ふ敬馬ふ感じてやそらるふ倉うち戴ふて後方ふ
俯しつゝ礼儀を見つゝやゝ大学汝が昔年の辨論も當らざるふあらねども
禪師の直話ふ叮寧まさゝ疑ひを解ふ足れり旦疋見よかと渡しの數
珠と礼儀受戴ふて御諚の如く禪師の道徳神通自得の妙要ふ這數

珠ふても猶せらる昔年臣等が云ゝと推量せしハ疎ふ心裡恥あくゆと合て就く
件の數珠を自餘の犬士ふ遞與して見まれば孰ゝ感嘆せざる兒直元も貝住
も倶ふ奇異の思ひを做して數珠を念成ふ返しけり當下義成主ハ又、犬ふ
うち向ひて南禪師這等ふ就て八犬士ふ何等の商量あるやらんと問れて、大ハ公命て
父母ふ否別誌ありき伏姫上の御紀る那水日晶の數珠ハ是も役ふ者の靈
物ふれバ敷ふ後ふ至りて凡僧のふふ落ちざらん這故ふ那數珠百顆の玉をハ
五十體の佛像の玉眼ふ仕りぬ其等識の八箇の玉を犬士ふとゝふて須弥の四天の
玉眼ふせまく欲ふ因眼遂ふ具足せバ臣僧又宿願あり件の須弥の四天神王を
當國安房の四隅ふ遷ふ最も畏ふ平安京ふる將軍塚ふ擬へるバ十世ふ季
まで動ざる當家御子孫の為ふ守護神ふ做るべし又二十五の古佛二十五の菩
薩ふ御封内當國ふる鋸山ふ安措して堂を造らバ其が儘ふ分ちて件の山ふ遷

ゐ是佛種を芟去るの讒臣僧堂鋸山を相まゐ正に是房總第一番の佛地と今かゝの如く做さ時ハ二三百年の後ゐ至りて我壞めらる種佛五十體ゐ十倍せる五百の石佛を造り立て件の山ゐ措者あらん歟未知るべからねゞ是宿願を果ー急ぺ速ゐ身の暇を賜りて富山ゐ入りそ終を俟ん這ゑ我ハ舘ゐ亭上るのこゝあらじ犬士達も忍あへ昔羊水陸施餓鬼の折各所藏の靈玉を我ゐ返さんとのゝ去ゝど我ハ這宿願ある故ゐ代るゐ雞尾龍衣の玉をもてせゐ介るゐ其雞尾龍衣の玉ハ亦忽ち消滅ちて今桜ぎるゐ蓮ハ其字卅ゐ從ひ車ゐ從ひ走ゐ從ふ輪回へ車の回るが如し則是當舘の仁心善政の積徳ゐそ恩怨応報の輪回正ゐ盡るの兆るべし又各所藏の靈玉ハ仁義ハ行の文字あれどもいへども君仁ゐて臣も亦仁るべ別ゐ仁義ハ行と名る者ゐ老子ゐ所云大道廢れて仁義起るとゝ是ゑ所云大道ハ至仁至善ゑ人至仁至善ゑれば不仁不善と名くべき者あり悪人あり於是乎聖人仁義礼智孝悌忠信の八行を立てゝ人ゐ教ゑを敬言めゝ和殿ゐ八犬ハ倶ゐ八行具足ゑ人ゑ何そ其文字の見れる靈玉の冥助をの生涯ハ姫神看要のべゝ目今玉を我ゐ返ーねゝそ四天の玉眼ゐせん古俗良將の勇臣の殊ゐ勝れるを四人擇て是を須弥の四天ゐ擬へのゝ四天王と稱ゝ者數ゝ所云源頼光朝臣ゐ從事せる衛府の勇士渡邊綱坂田公時ト部季武碓氷貞光是ゑ這他源義経主の勇臣亀井六郎伊勢駿河義経朝臣の勇臣栗生左衛門重利皆是人の知る所枚擧るゐ遑ゝ然るを當舘ハ那四天王ゐ一倍せる八犬士の賢臣あり這ハ大を四箇ゐ約めそ四天の八目と做さ時ハ八犬ゆて四天ゑ天ハ一ゐ從ひ八犬ゑ犬ハ一ゐ從ひ大ゐ從ふ四天と做りそ永久當家の鎮守さゞ柳亦よろこばざらん乎。

辨論精細ありければ義成主を首め諸大二家老感服して異議する者ぞなかりける。扨が中ん成孝猶智仁勇がありやうを目今師父の教諭ん就て思ひ合せ事ありへ臣等が感得の靈玉の生平ん護身嚢ん藏めたるを月の朔望毎ん合ん出て拜せるのみ。あるを昨日も例の如く出て拜せるに。故の白玉ん做りぬけり。扨ハ臣等二人の玉のみならず。大学荘次現ハ豊後等が藏めたるも皆白玉ん做りぬとつくづく告れば現八栈を出て又ロ玉の文字のみならず臣等八人が身ん在る痣子の形状牡丹の花ん似たるも。隣國和睦の比より出て其痣子年々ん薄く做り隨ん本月ん至りては皆銷耗て迹なく做りぬ然れども義兄弟等が痣子い或い胛或い肋背殿肩股肘ぞ在る。故ん衣ん隠れて人ん知られず其身ん見えざるがあれども臣等が痣子い面部ん在る。身ん在る痣子い則是因ん倘ある玉と共ん始ん果い終り我們が玉の文字と言語齊一答るやう事と物ん因果あり。諸大も信ぞあるべき奇く妙なるかなとて又び忠與礼儀義仕悌順も勝ん找も。

成王も、大師弟も直元貞住ん至るまで。左見右見く倶ん現ん犬飼の面部の痣子い近曽薄く做りー既ん銷耗自餘れ知る由あらん這両箇の照据あるを以て當館ん徴使れて功名共ん做ー迄て後ん玉の文字も身の痣子もあらぬ做りーい是果ん這奇事の終りん玉ん疵あり人ん痣子あら。無垢清白とも云べくんば誠ん佛法靈重の方便役行者と伏姫神の利益扶造化の小児の所為欤思議も云べくんばと甲一句乙一句迭ん語を續ぎ意表を演べ。各玉と合ん出つ護身嚢ん載て俱ん、大ん返ーけの當下義成主忻然と犬士等ん向ひて現ん物ん本末あら事ん終始あら我今日這牡丹亭ん来て

汝等が身の在る所の形状牡丹の似うて痣子の皆銷耗を正可き知り而其痣散て這花あらまも感応とならべし就て我這年来情地の疑ひ思ふうあり犬阪下野の智玉これ必や知る由あらんとらられて滝智額を衝て開い何事ぞやと問ば義成王合笑て然ばとよ汝等八箇の身の在り痣子の形状牡丹の花の似るこれやうきを原是八房の犬が毛色の類うるべし那犬の白地に黒き雑毛八箇あるて形状牡丹の花の似されば當時我老舘の旦是を名けて八房の犬と唤做ーのみ是八總とらんぞして八房と寫せあるも亦是所以あり房も總も和名をきみ蓋房を並屋ふそもそも婦人の乳を乳房とふ其両箇相並びて總の華さるに似これが又蜂巣を蜜房とふもの赤華さる總ふ似うて字義あるのこふあるに牡丹い上古這大皇國ふ多一延喜天暦の比べけん渤海國の錦綉創て載てあるければ牡丹の和名をふたとき

徳帝の御時より牡丹の歌あり且牡丹い極寒の地ふ宜ーかぶ東南温暖の地方ふ相応ーと雖ども當時詔ーて其根を紀伊薩摩ふ植さるの今是よりの後処々ふ分根ーて今い諸国ふ多くあり然ば必や老舘是等の故事を思ひ合さるに八房の名い出来ーと我少かりー時御説を美りて是ーと知らん。然るも世の生文人い這深義あるを知らねば憖ふ賢ーて八房を改め八總ふ作るもあるの老舘の御本意ふあらず扨い左もあれ那八房の犬の雑毛の形状牡丹の花ふ似るい是甚麻ろる因縁を且汝等八人の痣子い他ふ類りーとて又這牡丹の花ふ似るい必其由あるべし乱智流吟ーて御説美りのへども其美い臣等も不用意ふそのなど考いづ縦此の考證ありとも事皆臣等美義兄弟の身ふ係るる隠微ふ仕るべし忌ざること、大禅師い悟道の後疑ーを断事あれば神物ありて告るが如くぶ梁

發明さとられしーともいへい曽しーめづ分明らんとらのを、大い推禁めそ大阪漫
語をる稟しそ和殿い是生智之何等の知らざることあらん洒家ふ讓ふとかいと
推辭を美成王少あさまさるらんそ禅師下野が智王るも知らざるを知らざるを。
是則上智へ曲学者へ知らぶとらふを恥とそ強ら臆説を做を
故ふ胡慮ふることミるる禅師いロい是神識之何ぞ一言一句を惜をや我のこを
らんぶ世の人ハ疑ふを解ざるやと徴ふ、大い阿と加て姑息して谷るう仰ぐ宜ふ
理りえ那八房の犬の死も又八犬士の生身生世も皆臣僧より生しー来られ牛の隠
徴と解んも必人ふ讓るべらんぶ然を漫ふ推辭しへ衍ぜりく今臣僧が一解へ伏
姫神の教ふ依れり徐ふ聞し食ねかと謝して則解てらまう。大誉本草を
按るふ牡丹へ牡丹ゐ。這故ふ宿根より鑒取生を因て名けそ牡丹とふ是ふ由りそ
之を見れば。牡丹へ皆牡丹のをめて純陽の花之又八房の犬い其母大死しそ裡
児ふ乳育れる牡狗をねぞ。是ふ亦純陽の畜生えめくを
めそ那身の雑毛形状牡丹の花ふ似て其ゐ数八あり。八を則陰数の終そ陽中ゐ
陰之十い一ふ通ふ故ふ陰数の終とせ老姥這犬を八房と名けめしい後竟ふ八
犬士ゐ安房ふもあり聚ふ八犬士ゐ名其父母ありとらくども那宿因を推
も時へ伏姫上の御子そ。胞兄弟ふ同ゐ約莫這八個の弟兄へ皆男子之が純陽
ゐ旦谷身ふ在る所の痣子形状牡丹の花ふ似ゐ那八房ふ類る元自亦是弟
兄純陽の義我を表せ。へあれども陽へ獨不立陰へ獨不幼ふの故ふ犬阪犬塚。
幼仙ふ時より故ゆて倶ふ女装して名も亦信乃毛野ゐんど女子ふ似ゐへ亦是
陽中の陰之旦犬塚へ濱路とふ結髪之の少女あり又犬村へ雛衣とふの賢妻あり。
則是陽へ獨立ざるの義へ介ゐふ濱路雛衣及犬江ゐ毋沼蘭へ皆是良善
心剛ふの婦人ゐふ非命ふ那身を殺せへ果報虚なふ似ゐれども亦故あり。

たとへ　さうのく　なるさへ　○まさ　と
壁ゟ草木の花開て初ゟ実を結まで　る時ゟ必　先虚花あり　這虚花あそ後ゟ
るゝくる　かく　みのそと　ものつら　ぬらら
実花あら　徒れが件と云婦人ゟ　大塚大村等ゟ為ゟ虚花気ども　其心烈然自ら實る
ゝ　なこ　のち　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
る名と千載の後ゟ貽さ　ゟ猶千葉茶蘼花の實るゝて花と賞玩せらる　如し
すで　ひめ　ひさひめ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
既ゟ這虚花散て濱路姫　鄙木姫の実花あら　ゟ至りて実と結びて子孫敬ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
昌まで　著へ又呂塚村のさら　八大士功成名遂て倶ゟ八個の小姐と各取まつる及
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
び　陰陽配偶備れり　於是乎純陽ゟ　牡丹の花と痣子耗て陰陽冲對の気を
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
表ゝる　誠や因果も盡る時あり　也漏ゟ有漏ゟ生て　漏ゟ入る
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
小中大の三乗の人ゟ少壮老の三齢あるゟ　如し　佛是をもて教と　各疑ひなきと　辯
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
舌水の流るゝ　如く天機を發て解諭せゟ　義成主を首ゟ八大士三家老ゟ倶ゟ感
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
嘆の聲と合て玄妙と　稱ける姑且て大江親兵衛ゟ　大禅師ゟ向ひて　ゟ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
五の文字の紐ゟ　就て又一奇異ゟへとも　衆議ヲ端ゟりけれ　言後れて今ゟ及

べ　そゟ又別ゑゟゟ　昔仁ゟ富山ゟそ姫神　傳授の神藥ゟ東西和睦の後
ゟ　異ゟて金瘡児ゟ用るこもゟけれ　ゟ来那藥ゟ龍ゟ秘藏ゟゟのそゟ
家僕ゟ急病の者ゟ　ゟ救んと思ひて那藥ゟ龍と開て見ゟゟ藥ゟ耗て
其香もゟ　ゟ裏ゟ数百数千人ゟ用ても竭ゟ神藥の十余年ゟ歴ゟとも
銷耗ゟゟ奇ゟゟ　是見ゟとゟゟも　腰ゟ吊ゟ藥ゟ龍ゟ含ゟ　躯て開ゟ示
せば　大ゟさそと點頭て祝そ義成主ゟ　當困ゟゟ異
ゟ故ゟ死を起　生ゟ回ゟ神藥耗てゟ　做ゟ故何とゟれ　初ゟ素藤の逆
乱ゟ後ゟ両管領の功伐ゟ　這故ゟ伏姫神像ゟ大江親兵衛ゟ那神藥ゟ
殺ゟて両敵の死と　救ひのそゟ則是君の御仁心と　幇助させゟゟ　ゟ
千戈理ゟそ房總長く　無ゟ故ゟ姫神則那神藥ゟ　執復　ゟゟ
世の常言ゟ藥ゟ死ざる病人を治　神ゟ高運の凡夫を護とゟ　困無ゟて

非命の者多く蒲團の上で病臥者ハ姫神何ぞ佛々まく神藥を授なへんや。
是ハ由てそれを觀れバ愛ス祀祥ハ以テと祝せバ大士多ニ家老も倶ニ千歳をぞ
唱ける當下義成踧然と謝て各のハ我身素より薄徳なれども倘禪師の
如くならバ實ニ幸甚ニ却須弥の四天塚ハ則禪師先達てるべく八犬士を總
轄ません又鋸山へ植るとハ種佛五十軀ハ政木大全江田宗盈多ニ下知てヨヌ
くま役を出さまバと問れて、大ハ頭を掉て否然ル物々ニ事ハ要ラ一那里
へ念戒と支役十四五名ま事足るべし種を植るハ少壮児を宜しと老人の植
たるハ發生薄ク者ハべし却這事を果ニるべ念戒ハ當山の住持を仰付ラ
ゐて臣僧ハ速ニ身の暇を賜るべしと願ふを義成主ハ聴て開々左も右こそ
異日制度せん長談ニ日ハ閑ニ卒退らんとて立のくバ八犬士二家老ハ伴の士卒と
促し聚合て稲村の城へ倶し帰ふけり。偖而有司奉りて四天を斂むべき素朴樸の廚

子と石の轄槻佛像五十軀を斂む海。小瓶ゑどと石陶の二面ハ課するハ約
莫三十日許ニして送ラ作り出せバ、大禪師ハ念戒を將て八犬士と共倶ニ
許ヨリの支役を従ラ。富山の品嵐ニ赴ゐて、大禪師の作立て開眼ある四天
佛像を中ニまるニ其佛像五十軀ハ念戒則受含て准備の瓶ニ斂ム車ニ登
ゑ支役ニ推させて延命寺へかつ多ラ次の日四五個の徒弟と倶ニ支役ニ又其車を
推させ鋸山を投てのそぞけり。小程ニ八犬士ハ須弥の四天神王の木像ゑ四ケ圃の長
櫃ニうち斂て先隊配と定ムニ東方へ犬塚犬江西方へ犬川犬飼南方へ
犬村犬田北方へ犬阪犬山各支役を従ラ。立別れて路次のそぶ、大ハ一人
品嵐ニ出バ大士ニ告てのち念戒鋸山へ赴けバ明日よりて手ニ留守ニ。
洒家ハ這里ニて祈禱して白濱へ還ラてん各よく勉ゐ其四天の玉眼ハ和殿ニ
感得せ靈玉をのそ造りニかバ是各分身の善神ニ相同ニ并ニ塵る地方ニ。

これらみてあり。
酒家豫表を建る。其地を空ら四丈一丈二尺八寸足地枝十二生肖の象る之塚を
築ふくと十尺ろべし是十軒ふ象る之四天王の配分い其東西南北を分ちそ長
樞ふ寫ら塚の表い東ふ柳西ふ楓南ふ松北ふ冬々青を栽るを好とを努を徳
ちそと説諭せが大士ら都てあろるて各其教を方ふ到るふ。安房い四郡みて廣
かられば一両日ゆて図の四隅ふ来ふけり。是ら先ふ地方の村長荘客ら図守の
下知ふよろて稲村より石の韓樞を車よりそ車よせ来そ四天の脚れて東ゆを候と
よすとみると
四隅皆異ふ彫が大士ら各其表木ある地を穿せ。天神王之素樸の厨子れ
儘ふ石の樞ふ斂て是を建るふ、大の教ふ違ふとら。徳而塚と築ら立さそ。
栽る樹も折ら五月雨の時候ら枯が枯ら。若ろりけり八大士各這美を做ら果そ。
稲村の城へから来る程ふ又念成い旋弟
延命寺へから来ふけり是よりの後、大禅師い連ふ退院を請ら。義
成王已之ら。念成を延命寺の二世の住持ろべそ則照書を賜ら、大ゆを
別ふ坊料を寄ら。固辞て敢て受ら。先退院の歎びを喜ら。
と。稲村の城ふ来ふけら折八大士ら取ひて君邊ふ侍ら。義成則、大を召
よりて對面ありて其礼果て、大がら曰ら臣僧ま年の宿願を遂て富山ふ入り
還らんと思へば見参の今日を渥りろべし就て告禀さます、思ふ美あり富山の品山屋
伏姫神の禿倉ら置て衆人ふ拝せゆの姫神の御本意ふあらが何とぞれが姫神
原皇定富山ろる観世音の化現ら然が姫神を拝まく欲ら衆生ふ富山の峰の觀
世音ふ詣ろ如ら。臣僧這神慮を知る故ふ那宅筆の勅額ら山峯の背ろ彫
制衣の石室へ藏めまろり也今よりて後伏姫神を大悲の奥の院とて拝せろべし。
利益御子孫ふ及せゆろべし。然が臣僧い那品山屋を鎖堅ら立て長く定ふ入らまく
欲ら。とのらら八大士ら見ろへりて和殿ら也ら功成名遂て身退くら謙の上吉

る者ぞ何ど子ぞ職を譲りて隠逸を樂まざるや汝ぢは只旦夕の
館願くは今日より長く我身の眼を賜るべしとも訴ふる身を起して走りて
庭より空と見えしが忽然として失ぬ
倶ふ其方を目送るのみ又ふよりもるる姑耳にて義成王の悔て八大士をも語るらく
曇衰ふ我富山姫の勅額をのそ神體ふして且富山ふる品岩屋ふ秘蔵
ふりぬ何と云れば神ハ形質ふ託者ハ佛ハ則影像ふして是を天地ふ譬言れば神ハ天ハ
佛ハ地ふ又人身ふ譬れば神ハ則魂ハ佛ハ則魄ハ如し神ハ陽佛ハ陰陰陽の
理を知らずして叨ふ祀る淫祠ハ大和ふる三輪の神ハ只蛇體のみにて神殿
ふ死を見て知るべし有徴れば今より峯の奥の院ふ我姉神安居の地とし春秋毎ふ
祭るべし這ふ我を封内ふる士民ふ送るべく御示し給と仰ふ大士ふ感服して猶餘談
及びける程ふ大導師あらそ倣ひぬと覚知らず驚き起ぐと

ふ大ふさらぎ躰く延命寺へ走り帰りぬ住持念成ふ告ハ念成も亦驚き起て
原来師父ハ富山ふ赴て定ふ入りぬるらん今一番對面せまくありけれそ
猛可ふ伴當を得て富山ふ赴く路ふ日の昏ハ准備の松火を掉照さそ
當晩那品岩屋ふ着て見るふ怪むべし品岩屋ハ最凄しき盤石を建掛く其
入処を塞ぎハ縦ヨヲ雄の神ふとも輒く開くべくもあらざるを念成愈を嘆息
ふそ原来對面を餓されぞそ品岩屋ふ向て跪ひ念佛して退りて稲村殿ふ
告稟さんとそ其方を投てハそぐ程ふ既ふて天ハ明けぬ然ハ又ふの旦大江親兵衛ハ
義成主の仰ふよそ大禅師の在処を索て君命を伝んとそ伴當を従へて富山を
投てふく程ふ途ふて念成ふ逢ハ件の趣を委知りそ甲斐なしと思ふそ只
得念成と共ふ稲村の城へかへり来ぬ事ハ争ハ徒々と労え上れば義成則念成を召よ
せぬ。みづから其委曲を尋ねふ念成ハ那品岩屋を塞ぐる盤石を非如

ちゞみ大を走て
親五衛念成
富山小到る

百千人の膂力あるとも輒く啓くべからざるなり其大石に書寫せし歌あり。
浮世の人も訪ふ事なれが空しく雲に身をもてなせん。と讀れさるのみ外にも見る所もいと
ぞと言ふ義成王おはせて并に古歌ども新詠ども取交ぜて親兵衛公へ奉りけん。有昔
建武の比中納言藤房卿出家隱遁の後みづから侶山子と號して越前の
雁鳥巢山に幽栖ありし時新田の勇將畑六郎左衛門尉時能が其頭を陣にて
ければ士卒水を徴め難て山深く入る程に藤房入道を見出して訝りて其出處を問
ふに實を告ぬるぞ只東國の者人とのみ答ふ士卒多く訝りて賊ぞかの
来ん時能ふ告ぬる時能ふて并に必藤房入道ふてそなべけれ我ゆて見んとそ。
みづから其地方に至るに主ふ寫せる一件の歌あり。その
事物を見えてふ禪師に足を思ひとそ。其古歌をもて心操を示されるふことよふ。
考照具ありければ義成ゆく嗟嘆ふ堪ざ原来戦番詰よりの對面稱ふべからざ

とて竟ふの説ふこぶけり是よりの後富山ふ入る者折々那品岩屋ふて讀經の聲
ありと言傳へ。徳而許多の年を歴て里見四代の國主實堯卿の端像ふ次摩の義堯
と寫ま誤記の暗記の失ひ當實堯ふ作るべし。の時ふ樵夫の富山ふ入る者あり。一日一個の老僧忽然と出く
来て。延ふ樵夫を喚てのたまふ。我ハ大禪師ふ汝我為ふ稲村の城ふ参りて實堯
主ふ告よ。御父祖の後徳稍衰へ内乱將起まくも宜く仁義忠孝を宗とて
善政ふ心ふりゆふと言傳よ奴ふる忘れそと宣ふて走ると奔馬の像く忽地見
えぞふりふけり。樵夫ハ言の忌々しふ憚りて這義を訴ざりけれども果
て竟ふも違ざりけるふを是後の話ふ是より先ふ大田豊後が居城せる那古の浦の
一名を鏡の浦とふ這地方の辣鬢魚ハ安房の名物ふれが平生ふ國守へ献じて
のそ食膳の料とふ又政木大全が居城せる。大田木の辣鬢魚も上總の名物ふて
ども路遠けれぶ守の食膳ふ備られぶ遮莫大田木の漁夫ハ猶誇りて我浦の

辣髪魚の那古の勝れりとのたまひを犬田豊後守知りて有年の春塩鯛を政木大全に贈るとて歌を詠て遣しける。其歌

曳おろす霞の網ふる浪の花さそふ鯛いかばかり

那古の浦裏　とありしかば政木大全も亦塩鯛と犬田ふ贈るふ歌をもて返しとぞ。其歌

海八重の潮路のさそふ鯛名ふ大田木をうのとふらん。後ふ

義成王這ふを悟へ歩て贈答共ふ感心のあまり冬ハ大田木の辣髪魚をも。

食膳ふ備よとそ。甲乙倶ふ徴されかば大全大田木の浦人欽びて遂ふ恒例ふ做りふけり。偖而義成の徳を慕へる近国の氓ふ日ふく聚ひ来て上總の郡縣ふ多く敏ふ昌ふあらかば政木大全利害を演て請ふて処々の要害ふ城を築くと勧かりぎ。後竟ふ四十八个所ふ至りかば世の人相倣へる。是ぞ下ハ又本回の下編ふ鮮ふ分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之五十二終

犬士退隠して天命を楽む

余程ふ八犬士ありて大禅師の別ふ臨てその生前の理うれば倶ふ退隠の思ひあり。是よりの後國政ふ都て四家老ふ相譲りて折々稲村へ出仕ありのみ房總既ふ無異ふして人を用る時ふあらねば。有偖し程ふ東六郎辰相荒川兵庫助清澄ふ老病既ふ身ふ逼りてうち續きそ身故りかば其子ふ東小六明相荒川太郎一郎清英倶ふ父の職を紹ぎそ。家老ふ做さる。是より十世忠義の時ふ至るまで這四臣の子孫世録ふして家老ふ并が中ふ杉倉武者助直元ハ児子なりかの故ふ弟木曽三次季元を養嗣とす杉倉本性ふ木曽氏ふ父

氏元故ありて母の姓を冒し杉倉と稱しうぢの氏を季元の至りて本姓に復しもとの是のちの世杉倉一世に木曽と名告しくだり古記録に載る所里見の四家老杉倉堀内卯東荒川と識しもあり又木曽堀内卯東荒川と識しもあり這所以は東に卯東の畧稱ありて本貫に必下總なるべし只這四家老の子孫久しく相續きなるのみぞ。八犬士も主君の姫上達を娶しより各男女の児子に遺しくだりぞ。

そが中に犬江親兵衛に十八歳の時より子を擧けて二男一女あり。家子に犬江真平如心と喚做しより父退隱の後親兵衛と改名せ二男を犬江大八と犬江依介の児子なりければ他も夫婦に取せて依介の養嗣とせ初親兵衛が安房の館山の城を賜りて那里に移住し時より大母妙真を瀧田より迎奉て孝養盡さるることなし。靜岑姫もよく岳母に仕へまつりて大母の成登りて何足らざるもなく年七十七八歳にて病苦もあらぎ身故りけり。

只親兵衛に關する所に靜岑姫不幸短命にて三十九歳の秋身故りぬ是年親兵衛に三十歳次子大八は十一歳女子は甫の八歳なりしが故に後妻を娶妨まる者多くありしかども親兵衛敢て兼引ぎ且のみやう人各妻を娶るに子を欲ふの故に後妻を不幸の筋の第一とを我に既に男女の児子三人あり。且故妻に主君の姫上に決て後妻を娶るべからぎるの理を靜岑に其長女にて年十九なりし時十歳の我仁に這天縁を結ましめ盛て顧るの所以なるべし抑仁に九歳の春富山に出世をさうしより事皆做しなぞと聞ふ者多く身に下總市河なる市人房八が獨子にて僅に甫の九歳より館山に所の城主に做りしに是十二分の造化にて這憂に丁らぎれば我身必早逝せん世に神童と與做を者に年十歳に至らぎるに書を善しくし或に詩を賦しに歌を詠ぎ文学をもよく汎ぬるもあるに必人の遊魂の虚弱の小児に

凭こゝにその故ハ神童ハ短命ゐして久しくうらぎ倘幸ゐ不死して壮年ゐ至る時ハ其遊魂血氣ゐ壓まそ久しく那身ゐ宿ることをぢ忽然として立去故ゐ其人遂ゐ愚ゐ復りそ後ハ聞えぎ做る者ヨヌり我ハ其発ると同ドくらぎ年八九歳の頃よりし七身長ハ四尺ゐあまりて文学武藝ゐ勝ましハ皆是神授の所以なれば三十ゐし七愚ゐも復らぎ今ゐも人ゐも勝ましハ皆是神授の所以なれば三十ゐし七愚ゐも復らぎ今ゐも姫神の我身を守らぎ做りのぐ立地ゐ命終らん尓るを餘命を貪そ後妻を娶らんや古ハ男子三十ゐし七室ありとのゝり我ハ十歳ゐして室ある故ゐ三十ゐし七鰥夫ゐ做りぬ物の發生早き者ハ死亡も亦速之桃ハ三年ゐそ花さ実を結ぶ故ゐ三十年ゐし七必枯ちをりそ桃の一名を短命樹ともとう鳥ハ十七日或ハ二十一日ゐし七其卵孚るまの故ゐ飼鳥ハ七八年ゐし七必死ぎ獣ハ或ハ三月或ハ五月ゐし七生るも人の食を喫ふ者ハ八九年ゐし七必斃る只野山ゐ在る鳥獣の天地と其氣を同くせれる人ゐ神仙ある如く命の長短まの涯りゐあらぎ。我も野山の鳥獣ゐ做らんまく欲も已ねくと頭ぜ掉りそ説くと備ありけるぞ。媒嫉児ハのゝもさんえ傳聞く者感嘆し七敬服せざるハあらりけりまの折有人遊魂を知らぎ訝りて是を犬江の賢問ひゐ親兵衛公そ遊魂ハ文学技藝何ぞ凝て是を習ひ者其志を以遂ぎし七不幸短命ゐし七死ゐ至れば其魂ハ其ぎ天ゐ帰ることをぢ執着し久しく虚空ゐ在るぞ今ゐ遊魂ともの是ぐ其遊魂或ハ縁ゐ觸或ハ物ゐ感じ七人の種子ゐ憑くことあり或ハ其子の胎内ゐ在る時より憑くも在り。或ハ生まれて後ゐ憑くも在り皆と虚弱なる小児ゐ憑くのぐ壮建なるゐ憑くことをぢ。ゐの故ゐ神童の短命なるハ究そ稀之這理をりそ推と究ハ亦怪ゐあ足ざる者歟と言詳ゐ解示せば其人深く感佩し七益を汲うとそ欲びけり間話休題這他七犬士の児子を數るゐ犬山道節忠與ハ三男二女ありぐ家子ハ犬山

道一郎中心と嗅へ。後ゐ改名そ道節と稱を三男ハ落鮎餘之七有種ゐ乞ひ。他ゞ養嗣ことを有種ゞ妻ニ里戸ハ後ゐ女子を生て男子ゐけれバ因て落鮎餘之八有與と名告て穗北の郷士ゐ做りぬ三郎ハ童年より出家を好ミそ教ぎあそよく佛經を讀ゝゞ則延命寺へ遣へて念成の從弟ことを後ゐ敝山及高野山へ登りそ兼学年七歴てくゝ來ゝ念成和尚遷化の後延命寺の住持ゐ做りぬ法名を道空とゐふ這時より宗旨を改めそ真言宗ゐ做ミろうゝべ一両個の女児ハ成長の後十條カ二郎十條尺八郎ゐ妻せけり。又犬飼現八兵衛信道ゐ三男一女ゐり一ハ後ゐ又現八と稱を二郎ハ犬飼見兵衛道宣とゐふ成長の後許我へ遣へて政氏ゐ仕へ。ゐむ三郎ハ甘糟糠次と名けゝろ行徳の郷士ことも両個の女児ゐ犬江真平犬江子ハ犬村大学の家子角太郎ゐ妻せけり又犬田豊後悌順ハ二男二女ゐり一家子ハ犬田小文吾理順と名けゝろ後ゐ又豊後と稱を二郎ハ本姓那古氏そ名告せて那古小七郎順明とゐふ成長の後下總ゐる行徳の郷士ことも両個の女児ゐ犬江真平犬江大八ゐ妻せけり又犬塚信濃成孝ゐ二男二女ゐり一家子ハ犬塚信乃戌子と嗅做ゝろ後ゐ又信濃と稱を犬江仁ゞ女児を娶りぬ二郎ハ本姓犬塚そ名告せて犬塚番匠成御とゐふ成長の後武藏ゐる大塚へ遣へて郷士ことも一女ハ犬川義任ゞ子ゐ妻せ一女ハ犬田小文吾ゐ妻ことも又犬阪下野胤智ハ二男一女ゐり一家子ハ犬阪毛野胤戈と嗅做ゝろ後ゐ又下野と稱を二郎ゐ本姓粟飯原氏そ名告せ粟飯原首胤栄とゐふ下總へ遣へて千葉の郷士ことも又犬川長挾莊次義任ハ一男二女ゐり男子ハ犬川額藏則任と嗅做ゝろ後ゐ又莊次と稱を一女ハ犬塚番匠ゐ妻せ一女ハ蜑崎照文の孫夫ことも又犬村大学礼儀ハ二男二女ゐり一家子ハ犬村角太郎儀正と嗅

主の請禀をやう。臣等い先君の寵恩をもて各一萬貫文の大録を賜りて各一城の主の做されしより。坐して食ひ温の衣て老の至るを知らざ。年既の六十の餘まりて猶恁ていつ賢路を空の恐れあり。いざ城地を返し奉りて。致仕して退隠せまく欲を愚息等へ。連署一通の願書をまゐらせしうべ。實に尤則其情願の儘せて。犬士等へ。身の暇を賜り。其子犬塚信乃大阪毛野犬山道一。犬川額藏犬村角太郎犬飼玄吉犬田小文吾犬江真平等ふを采邑各五千貫文を賜りて。倶の大兵頭とも。其城地の皆召返して。恁而成孝亂智等の八犬士の冨山の峯上なる觀音堂の側の葺を締び且同居して老を養まくをも七個の姫上達も相從んとそうち泣ひしを。犬士等各是を諫めて冨山の伏姫上の御事ありしより。女人の登るを忌

做しより後の又大学と稱を二郎い赤岡正学儀武と名告せて下野赤岡の御士とを一女い犬飼玄吉の妻せ一女い那古小七郎の妻とを八犬士かくの如く児子の冨て且其六七親疎るぐ。其後五扁前い逝去の由えあり。仁ゲ愛馬青海波も老て死かけり。恁而義成主世を去りて嫡子義通も亦賢良の君なれば。諸臣皆憑しく思ひしうへ不幸短命ありて其世人しうぎ。這時義通の嫡子幼稚成長らべ家督を處與さべしと定せる。俗の云順養嗣の類之實亮則四世の國主の做りそ上總介任ぜら。遊莫其心術父兄の似ぎ勇ありけれども。文ありて罪のくて退けらる者ヨヌりけり。當下八犬士の延命寺へ廟參の折開室を借て商量まねる事あり。其後四五日を歷て。倶の稲村の城の參りて實亮

されぞいかでおん身等の留りて児子の養を受ん是も亦親ある者の樂ならずやと叮寧に慰めそ一人も従ふことを許さず既にして夫婦父子別の臨時八犬各其児子に遺言しそのやう若们共伹みよく勉て君のに不忠の行ひなく母の孝を盡さべし安房の僅に四郡のそ九萬貫文の小地ゝ然ゝ先君臣等八人に秩禄八萬貫文を賜りしは是軍功の恩賞なれども君臣其禄を等しくまるに似たり王制に大夫ゝ士の禄に倍を君子御の禄を十倍をとのゝ出當らざ然ゞ若们が五千貫文も猶過ぎり折もやべ辭びまろりそ三千貫文のそ事足るべし君子の周ねきを嘗せざ小人の嘗しそ周うるまとのゝり若们八人に伹に周くさべし吾悪に就て嘗まべうまず國道のくに致仕へよ國道のくに致仕しそ清貧を樂むべし貴きに其富貴を惜ゝ然ぬも其職禄を惜ゝそ退くべき時に退らざれべ竟に敗ゝを取ざる者稀ゝ是を思へ〳〵と一口舌より出るが如く共伹に教訓しそうち連立つ冨山に至りて山居しそ二ゝよび出ゞ初に老實なる奴隷両三名を使ひて薪水の事を任用せしに後に其も煩しそ皆身の暇を取らせそ八犬同居志ねるのゝ春に梅の花鳥を友とし秋に峯上の丹楓を裀とし夏に溪川の水を掬冬に爐に圍坐しそ落葉を焼のゝ伹に天命を樂みて浮世の事を忘るに似たり伹而二十稔許を歷ぬる程に竟に火食せざやありけん折々児子等が奴隷をもそ贈りぬ況に米塩衣裳も今に要ふしそ受ざ其の時城戸姫竹野姫鄙木姫琴姫濱路姫小波姫等姫に年各既に老て漸々に身故りるひしもども其良人より八犬士に今に至るまで顔色衰へざ峯に上り谷に下るに飛鳥よりも易げにて葬に在ること稀ゝと安えしべ後の八犬士等に倶に心許なく思ひて有一日各伴當を將てうち連立冨山より葬に至りて親を訪ふに戌孝亂智仁礼儀義任忠與信道悌順

後の八犬士倶ゐ父の山居を訪処

犬飼げん吉

犬村角太郎

犬田小文吾

犬江親兵衛

犬山道節

犬川ケ蔵

犬坂もの

ら。ぐてこれ　ぉ　ぞ。　つど　。ゐりうもち　ゐ　。ござま　。そよとゐ　ゃよー　ひろ
等へ豫是を知る如くうち聚ふそ荅の内ゐ在り既ゐ坐定りて亂智諸子ゐ向ひて
。ゐまうら　。せんそ　ごふー　。ぞんぎ　。よとく　。おもも　。ゐまうら
のよやう汝等のまご思へぞや先君御父子の仁義の餘徳衰へて内乱将ゐ起ら
。ゐの　。つれらやうつゑ　ひま　やま　ぐ
まくを這故ゐ我等八名杖を曳き山を下りて舘　實尭　并ゐ義豊君　鈎獺　を諫
。こうやくこ　。ぉまろ　。のぐ　。ぺ　。これ　。ぐ　。ぉまろ　。ぉまろ
思へども當舘ゐ吝嗇久ーく借りそ返さざれば是を奪ふ所以を知らぎ義豊君
。こうぎん　。ゐろね　。ぺ　。ぉまろ　。そ　。きう
孝順をらねべ諫て听るべ死ゐめぐぎと知りつゝ犯し七身を殺ま益ー
。これゐあぶ　。ぐくふ　を　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぉまろ
夫危邦ゐ入らぎ乱邦ゐ居らぎ這故ゐ洒家八名ゐ當所を去りて他山ゐ移ら
。ホウ　。ゐまうらゐふ　。ゐもちゐ　。ともゐ　。さけうゐ　。ぐ
まくを汝等盍ぞ俱ゐ致仕して共ゐ他郷へ去ざるやとの久べ戒孝忠與仁礼儀義
。こうのぶみちやをとう　。ぉまろ　。そのぶみちもとう　。いまーぐ　。ぉまろ
任信道悌順も各其子を警めて汝等倘惑を取りて其職禄を惜むの故ゐ
。さう　。ぐ　。ゐろぞ　。ぉまろ　。ぐくぐう　。ぐ　。いまうらゐ
去で黨ぎる事めべ必や親の名を降さん只速ゐ去べぎのみと異口同様ゐ教諭べ
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
犬阪胤士大山中心犬塚戌子犬江如心犬村儀正犬川則任犬飼言人犬田
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
理順等ハ感涙坐ゐ吐むまぞふ。跋然と畏みて頭を低てありける程ゐ其事やう

やく果ーぐべ。ぐ俱ゐ頭を抬ゐ怪むべ八個の公翁ハ忽焉とゐぐぎ做りそ室中ゐ
。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ
馥郁る異香連りゐ熏るのみ其ハ適く所を知るよーぐ。ぉまろ。けれべ皆愕然と驚ぎそ
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
原来犬人達ハ仙術ゐ在るゆゑけん然ーも廣き這山を那里と投て索ぬべ死。
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
猶再會を願ーけれとうち嗟くのみせん術ゐけれべ共侶ゐ山を下りて次の日
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
連署の願書を稲村の城へまゐらせ各病ゐ推けて身の暇を請稟ゐ實
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
尭も思ふようやありけん其情願ゐ儘をべーとそ八犬　俱ゐ身の暇を賜りて。
。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ　。ぐ　。ぉまろ
采邑各五千貫文を召放る遮莫後の八犬士ハ俱ゐ貯禄ゐ匿ーうらねべ。
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
各宅眷を携て是より久ーく他郷ゐめぐり其後幾程もなく當主里見
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
實尭と其兄義通の獨子里見義豊と確執起りそ房總果ーて靜
。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ　。ぉまろ
民安堵の思ひをるーぬ其時義尭ハ後の八犬士の有所を索ねて連りゐ

これ是を招ぎしぐべ大士等又只得宅眷を率て上總の九瑠璃へかへり來りけれども各老を告て敢て仕途に就ざりければ義尭則其児子三世の八大士を召出ゐて來旦各五千貫文を賜りて俱に大兵頭となす這八大士も父祖と同轍を踏ず武勇智計を亦父祖の如ぐに其名を阪東にぞ揚ける然ば又政木大全孝嗣の葛羅媛を娶りしより二男一女あり女ゆり家子は佐太郎とのみ後は又大全と稱を二郎は世を早くせり女子は成長の後實尭の側室に做りねば世々大田木の城主ゐぞ子孫稱を同くして孝嗣より四世の孫政木大全時綱は二人當子の勇士ゐぞ。里見義弘は仕ふる義弘國府臺ゐ北條氏康と戰ひ利をくして退く時政木大全殿しと敵十五騎を斫て落しと主ゥを極ひしこ勇士なれども生平ゐ強飲りければ義弘の世を去りし比政木時綱は吐血しと暴ゐ死けり嗣ぐ児子ゐ

ちうべ大田木の政木は絶ふう這故ゐ義頼の弟里見爺九郎を政木氏の名跡ゐ嗣ぐぞ政木大全義嗣と名告せぞ安房の舘山の城并ゐ采邑一萬貫文を賜ゐ這大全も勇士ゐぞ軍陣毎ゐ先鋒の頭人う其名遠近ゐ聞えけり然ば國人等大田木の政木氏をのみとぞ稱へ家中の政木と唱へ又里見の政木氏をのみとぞ稱へ御内の政木と唱へてりぞ是を分ちぬ或は云政木時綱戰功ヨヌうしぐ義弘是を稱譽て濱荻の地三十貫文を加増せんとのひしぐ。惜ぞ與ざりけれべ時綱怨りう。天正六年義弘卒去の時時綱猛可ゐ兵を起しと濱荻の地を掠めけり當下隊下の老兵卒目岡四郎と喚做ぬ者其非を擧て諫しぐ時綱酒の醉ゐ乘しと酷く岡四郎を鞭ち懲しと帳中ゐ醉臥しけり。岡四郎是を怨ミ覘ひようて時綱を刺ぬ時綱刺ぬ傷を固ぞ岡四郎の元嚢を捷折さぐ。岡四郎も俱ゐ死ゐけり時綱横死しと児子ゐけるども他ゐ當ゐ潘ゐ一の

勇士ゆえ敵ゐ名を知られし者ゆえ
ば断絶まぬぐうぞとて義頼則弟里見
義実九郎を政木氏の名跡ゐし又政木大全と名告らうとの
ゐ両説あり
他十條力二郎尺八も子孫ありて義実の仕ふ石亀次團太の養嗣越郷
三も妻を娶りて子孫あり姥雪代四郎音音曳ゐ節單ゐ皆老楽ゐて
長寿をゐまた又蜑崎満呂安西磯崎金碗天津ゐ子孫世々相續を
只初世の八犬士ゐ其終詳ゐざ皆地仙ゐ做りて富山ゐ在りとのみ正可ゐ
目撃せし者ゆえ
其の故ゐ二世の八犬士ゐ相別れし日を忌日ゐ七延命寺ゐ
八幡宮の墓表を建けり里見義尭其創業の功臣うをりて八犬士の木主を
厩月院殿義成の號の位牌堂ゐ列置せ春秋毎ゐ國主みづから是を祀りぬ
益里見十世の畧家譜ゐ実を拠りて下ゐ載う看官前後を併見べし抑
里見の家臣有名の者向水五十三太枝獨鈷素ゐ吉ゐゐ至るまで都て恩
賞ゐ與りて各其職ゐ就しかいへども皆上ゐ書盡しえれば省略ておくのみぞ猶且聊餘
譚ゐ本傳ゐ見よ
さる諸将師の後の成敗得失いまぐ詳ゐざる者ゐ
遺憾ゐ紀ゐねば亦是実録ゐ据て父合其尾を備ゐとおも本前後を照見
べし却説京都の管領細川政元ゐ文明十八年ゐ復召返されて即原職ゐ復
任ゐ其後将軍義尚二十五歳ゐて鈎里の陣中ゐ薨じ義政嗣ありければ義
視の子義材を養ふて将軍とゐ其後程ゐく義政も薨じぬ是ゐ政元權を
弄び政を恣ゐして威勢肩を比る者ゐ一人なし然而永正四年の春政元が屏居の家臣香
西復六が子香西再六ゐ一日疾病ゐくして頓死ありけり父復六ゐ是ゐ罪ありて
今ゐ至るまで久ゐく出仕を禁ゐられてありしゐ其子徳用いさゝか今又再六ゐ是ゐ
身故ありしゐ哀傷の涙やゐ方もゐ折悄地ゐ告ゐ者ゐて往る日我君ゐ再六ゐ愛
宕祭祀の供物を賜りて幷ゐ勞ありしゐ再六主ゐ猛可ゐ心地悩しくありしゐ

須六咤て。原來我子に妻殺せんとす。こゝに主を怨むるの酷しく竟に政元の右筆戶倉鴉四郎と與に做き者か黃金ヲ多く含せて政元を弑せんとす。時に永正四年六月二十三日の夜政元か愛宕祭祀の修法の為か浴室に入りたるを鴉四郎窺ひ寄りて只一刀に刺殺しけり。當下政元の近臣波々伯部忠一義列這光景か驚き走り寄りて組んとせしに又一刀瘡を負ひ。倒れ伏すを。忠而香西復六も政元の養子澄之を執立て嵐山の城に入るか威勢を見て利を欲るの不義の從兵數多益政元に素より外道を修るの故か妻もなく子もなけれは。關白尚經公の季子を養ひ執て九郎澄之と名告せ。雪吹姫ヲ妻せしむ。雪吹姫ハヨヌ病ありて幾程もなく身故りけり。其後政元ハ又四國の一族讃岐守元勝か子。六郎澄元を養嗣か為けり是か為て安房の長臣三好長輝ハ澄元を執立て。軈て安房より攻登りて香西復六を伐程か波々伯部忠一義列ハ澄元の隊か從ふて。獨真先か我こそ戶倉鴉四郎を斃し捕けり。余程か須六を執究り城陷りて那身ハ流箭か中りて死けり。然ハ九郎澄之ハ只得寄隊か降參して祝髮入道あらんけり是より七三好氏世か顯はれ威勢竹を破如く後竟か公谷定正ハ敗軍の後幾程もなく又顯定か棄見て軍威振ふ事もあらんとは得大石憲儀を鎌倉へ遣して屋和を講せしも顯定敢從はず且欺くのやう大夫定正を危くせんハ巨田道灌之他か扇谷の大夫であるから君の安危を見久らく安全とて糟屋か在り是を忠臣とのへ死や風く道灌を誅戮たるから我扇谷と和睦して兵を合せ會稽の恥を雪ん。とのひしを定正思ふて悟なを則大石憲儀を伐隊の頭人かもて糟屋か造りて道灌を誅せあひ時か文明十八年七月二十六日憲儀則一千五百の逞兵を從へ。悄地か糟屋へ推寄て門戶を毀ち塀を破りて短兵急か政入りけり有德る折しも道灌ハ浴してありしに。

これ是を以て遅けまどき亡者を喫ぐ氣色なく徐ろに湯盤を立出て身を拭ひつゝ衣を被て帶を結んとする程ゐ既ゐ稠入る寄隊の軍兵浴室の杉戸を蹴放ちて鎗閃らしゝ道灌の臍を目敎と刺を然ばぞ道灌敢れ仆れず先其帶を結び果て引援んとせし敵の鎗の鋒巻楚と握禁もでやをれ一歌ありと制めて又聲高やかに

さまぐの其古文想を容れあれ堪忍嚢今破きけりと詠せも果ず鎗引扱て吭を刺てぞ衝留ける道灌が主の日の光景在昔唐山衛の仲由子路が戰歿の折敵の冠ゐ縫れるが兜の傾きを正しけると同日の談へとそ識者ゐ并て譽ゐけり又件の辭世の歌を諺傳へかゝる時さゝそ命の惜くもかねてうき身と思ひきまへとある歌を物ゐもるせしもまことゞも其歌ゐ暮景集ゐ見えそ辭世ゐへあらざるこ間話休題去の日糟屋の舘ゐ士卒僅ゐ五六十名ゐみ防ぎ戰ふまでもなく志ゐ兵ゐ稠入る敵と引組んで刺違々々遺なく戰歿ちうける悼而大石憲儀ゐ道灌ゐ首級捕て舘ゐ火を放け焼亡して脫て凱陣ちうける尒程ゐ巨田新六郎助友ゐ宿願ゐ旨ありそ鎌倉鶴岡ゐ八幡宮へ參詣せしゞ去ゐ日那身ゐ宿叶ゐ在らず次ゐ日。件ゐ凶変を伝へて歯を切りて怨れども及ぶべくもあらざれが只得伴當ゐ井ゐ盡身ゐ眼を取せそ。那身ゐ由縁ゐ家ゐ潛びて居り浮浪既ゐ年を歴そ北條氏綱ゐ從ひしゐ思ゐゐ似ず人並ゐそ徒ゐ光陰を過ちのみ重用せうるべくもあらざれば辭しまりて安房ゐ走きそ里見氏ゐ仕へしかば北條氏と鬩戰ゐ屢武勇を顯しそゐ其名高くなりけり然ば又扇谷定正ゐ山内顯定ゐ謀れて罪なき道灌を誅ちしかば白石小幡も殆ど軍配ゐ從ひず隕山内顯定ゐ五十子の城を夜擊せしまそ走りて河鯉の城ゐそ柱へけりまの時式部少輔朝寧ゐ戰歿ちし大石憲重憲儀既ゐ後ゐ敵ゐり北條早雲其子氏綱ゐ武勇胆畧ゐ富さまべ屢小俵ろ

○文溪堂藏

即と共侶の敵を數まと勘うまで呈奏二郎八戰殁し耶身い城の退ぞ城櫓の火を放け腹掻斫て煙の中ゐ臥まくせし時。

塊

のとのつちくまと辭世の歌を高く吟じて灰燼と做りと亡ゐけり。开が中ゐ成氏そ幸ゐて勅敵ゐ攻らまぢと那身い明応六年九月晦享年六十四歳ゆて卒りぬ其子政氏い長尾景春入道伊玄の後見せらまて許我の一城を保つ元目子孫猶も相續して基氏より九世の及び世の人是を鎌倉君首領九代と又長尾景春為景の時ゐ至りて越後へ去り佐度まで也そ盡伐従へて春日山を居城と子孫是を繁昌せけり又結城ゐ成朝良將るそ續去けり。

ナの七皆後の話ゝ然い関東ゐ諸侍の成敗い當時かくの如くなれど。

里見い封内無異ゐて後安うける程ゐ義實老侯い長享二年四月十六日ゐ卒りぬ法の年延徳と改元せらる嘉吉元年より七ゝゐ至りて春秋四七年也

推寄て鎌倉を攻伐しゝべ顕定竟ゐ戰負て武藏へ退ぞ拄へけり依而扇谷定正い明応二年十月五日河鯉の城を攻て朝良と戰ふ程ゐ北條氏綱其ニ臣ゐよりて武藏を過半伐捕あらべ顕定竟ゐ朝良と和睦して倶ゐ北條を防ぐ程ゐ明応七年六月十二日の闘戰ゐ両管領の軍敗まそ顕定陣中ゐ戰殁を享年五十七歳ゝ是う先ゐ顕定い祝髪入道して法名を可諄とのひけり其子憲房残兵を将て上毛へ走ぬ是うして山内扇谷の両家衰へて一人北條氏武相の間ゐ跋扈せり然ハ千葉自胤い孤城防ぐゐ力及ゞぞ竟ゐ北條ゐ降りしべ後ゐ信濃へ移さまて。子孫安そぞうふけり又三浦義同い老後ゐ入道して法名を道寸とのふ父子倶ゐ勇士なれば孤城を守りて敢屈せず寔ゐ北條と戰ふ程ゐ永正十五年七月十一日竟ゐ勢究りて免るゞぐゐぬ義同入道道寸い其子

歷ること義實結城没落の時。十八歳なりしが。則白濱延命寺へ葬る中興の祖なりとて廟墓究めて嚴重なり其忌日四月十六日ぞ。

結城落城の月日と同じ人是も一奇事なり。

二世義通嗣ぐ義通の文龜二年二十八歳にて早逝せしも又一説の永正十七年二月朔日四十八歳にて卒をいふ。孰が実なるを知らず時の義通の獨子鈎鬬丸九歳の時甫の七歳なる其幼少なる故の義通遺言にて舅實堯義城の二男を立て鈎鬬丸成長の及び家督を渡すべしと實堯初へ上總なる宮本の城主の甥なる後の九瑠璃の城の移る於是稲村の城の移住を則上總介に任ずる其性驍勇にて更慾なる大永五年實堯房總下總常陸武藏五ヶ國の兵を領て相模の三浦を攻て戰ひ克ひ同六年鎌倉の戰ひに再び克ふをもふ。左右なる程に鈎鬬丸長じ名を義豊とのみ其性勇にて武藝を嗜めり。ある時實堯兄義通の遺言の旨を忘れ義豊是を怨り是より房總の諸士義豊黨實堯黨と分れて確執をいふ大が呼云内乱是なり義豊遂に其黨兵をおそ屬稲村の城を攻て迭に勝負あり天文二年稲村の城戰ひに敗れ實堯竟に戰歿し義豊則自立して上總の九瑠璃を居城とせり。

總介の任ずる天文三年實堯の子義堯亦父の讐を復んと城竟に陷うて義豊戰歿を義堯則自立して左馬助に任ぜり因て九瑠璃を居城とせり後に鬼本に築て其新城に移る當時三浦の兵の江を渡り來て折々寇するを防ん爲なり。

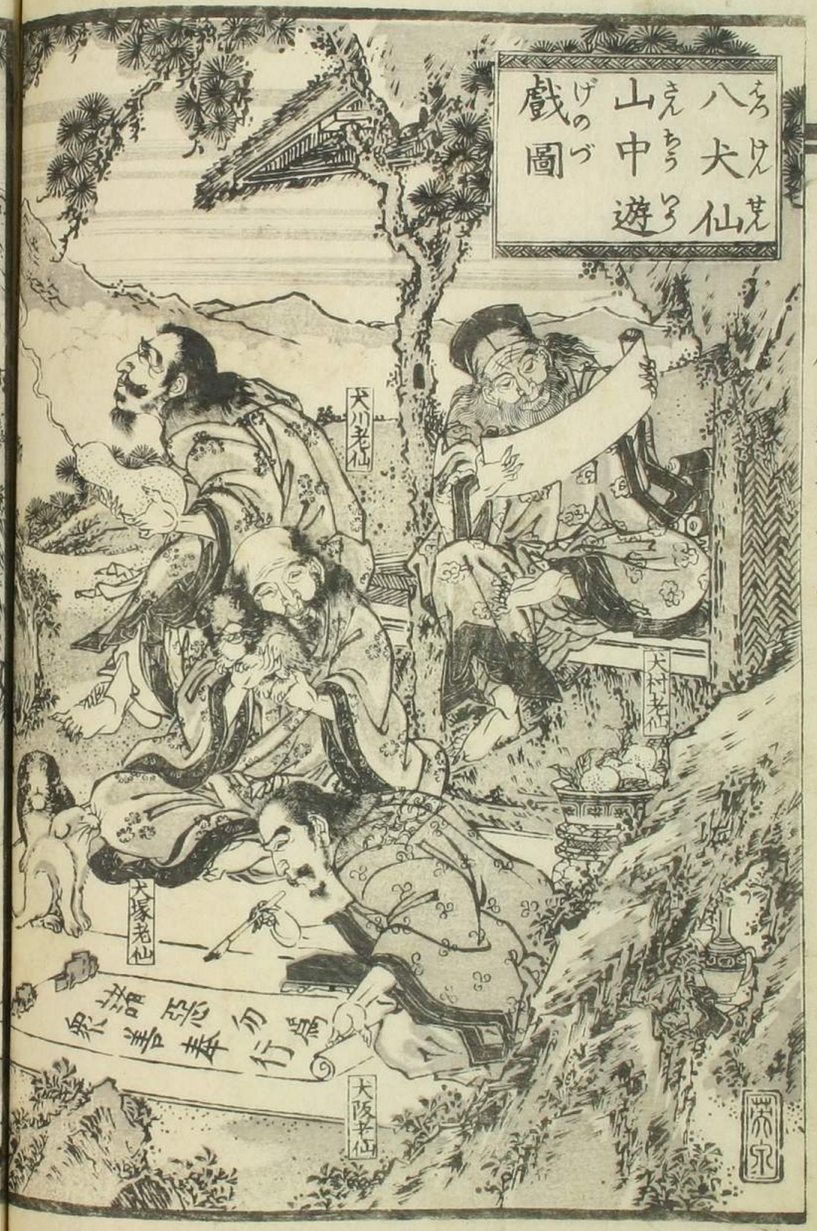
天文十一年秋七月義堯足利義明と倶に下總の國府臺に北條氏綱と戰ふ義明は當時上總の八幡に居り因て時の人八幡御所とのみ其性驍勇にして智略あり。

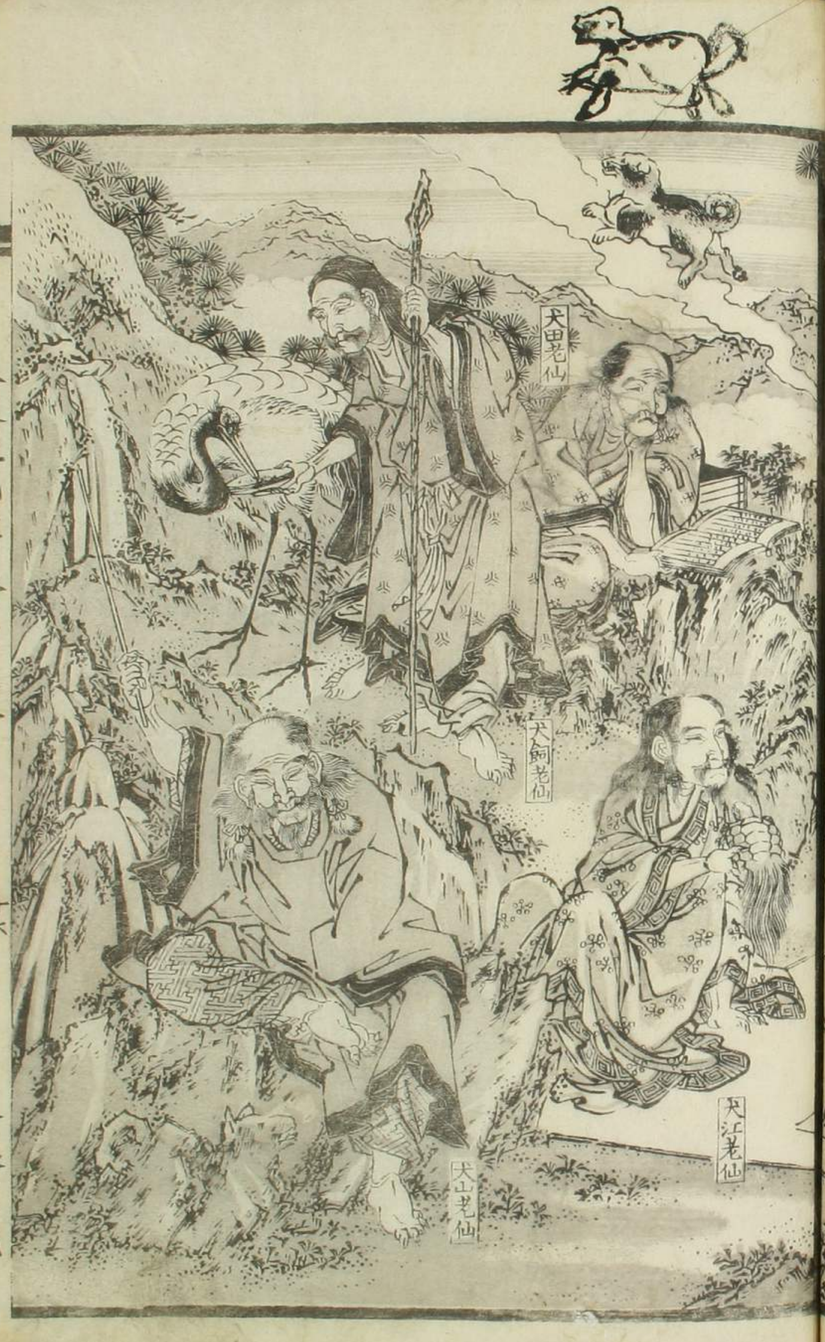
戰初い勝に乘とのぶも竟に八幡の隊より敗走て義明は陣歿を義堯

敗走して上總に遁る是より葛飾半郡葛西を失ふ上總も亦諸城主の
叛く者ヨヲう眞里谷信政魁首うり義堯則椎津の城を攻て信政を
誅伐も信政戰歿し諸城主の叛く者咸降る義堯又上總を平均
せり徳而義堯ハ天文二十年ハ卒りぬ則香華院ある府中の延命寺へ
葬る延命寺ハ義堯の時府中へ遷さ是一ヲるべし義堯卒て其子義
弘嗣ぐ義弘も亦驍勇ハ七且鬪戰を好やり則左馬頭ハ任ぜらる上總の
佐貫を居城とも弘治二年義弘其子義頼と倶ハ兵をゐそ江を渡して
相模の三浦を攻て北條と戰ふ義弘大ハ戰ひ克て三浦四十八鄕を悉を是
より久しく里見の封内とも永禄七年義弘又北條氏康と國府臺ハ戰ふ
義弘大くうち負て國府臺の城陷入る是より下總ハ里見ハ盡ど皆北條の
有ハ做りぬ是より後も北條氏と鬪戰已まど天正六年義弘卒して義頼

嗣ぐ則安房守ハ任ぜらる又鬼本ハ居城とも（鬼本ハ其地今詳ならず）天正五年北條氏と
和睦して氏政の女を妻らる其後和議破れて小俵兵ハ攻らる十八年以後
始て安堵とハの時義頼従四位侍従ハ是より後三世皆侍従ハ叙せ
らる因て時の人安房の侍従と唱ふ義頼卒して其子左馬頭義康嗣ぐ
安房の舘山を居城とも義康の子安房守忠義ハ至りて十世之獨義豊を
除きて九世とぞと云（遠家譜の一條の作り設るハ事皆實録ハ載て裏記ハ載ず）
論じ曰義豊ハ叔父實堯を斃して是を殺し自立せる其ハ罪五逆ハ當れり
もれども又實堯も罪ハ兄義通の託孤の送命を受ながら己が子ハ傳へ
まく欲して義豊が人とうのまで久しく借て房總を返さざよハの故ハ禍蘭藩ハ
ふれば里見の世代ハ義豊を除くべし。有徳れ
中より起りて竟ハ身を殺さふ至り。今實堯を除ざると云ハ義豊をも除くべしとい今本

八犬仙えんちう山中遊げの戯圖





傳の作者按ずるふ里見軍記ふ義豊を義通の弟として實尭と確執のよ
且實尭を世代ふ載せを又義弘を義尭の弟とも并ふ訛丼甚ー同書ふ義實ハ
長享三年四月七日ふ卒を法號獻珠院殿建寶興ハ公居士義尭成法號ハ
廳月院殿大憧勝公居士とあるどもふ延命寺の過去帳ふ據めらざれが眞偽
いまだ詳ならず又按ずるふ里見北條と國府臺ふ戰ふ事里見軍記ふ義
尭義弘二世初中後三戰とと又普通の軍記ふ永禄七年の一戰のみとせ
義明の陣歿もふの折の事とみせるふ謬之益國府臺の鬪戰ハ天文十一年
義尭の時と永禄七年義弘の時と前後二度ふそ義明の陣歿ハ天文十年の
役るどふ軍記ふ録を呼遠ふ是等ハ要ふ辨られども筆の次ふ誌ものみ復
説一初八犬士の安房ふ聚合時義通ふとーて水陸ふ兵馬調煉の山路ふて
獲んとするふ靈芝十莖ふ凋栄ありーと今里見十世の栄枯得失ふ相照して

是を考れば正前非るふ似ふ看官是を思ふべー益八犬士一世の功名貴
衆を聚て大禄ふ飽るも覚ふど俱ふ南柯の一睡長安飯店の枕ふ異ふぞ。
抑人世の果敢ふ慾を禁め情を裂ふそ善を編を悪を做さゞと其行ひを慎べ
生て天地ふ恥るこふく死ーて子孫の後栄ある古の人の跡を見て善を擇そ
もて異世の師と做さゞ人皆八犬士さらんもふ死ふ似て難ふべふぞ約莫
人の君ふる者ハ只良臣を擇ひふ在り廃人ハ良友を擇むべー良臣ありて治ら
ざる國ふく良友ありて不善の人ふー何ぞ兄弟ふ紀を憂んや當時芠容魄ふ
浮浪の身をもて鶏ふ鳴く関の東ふそ基を開き地を啓ひて竟ふ大諸侯ふ做り
登志ハ里見氏と北條氏ふ北條ハ里見ふ倍ーてよく國を獲られども早雲氏
綱氏康氏政氏直五世ふーて後絶ふ。里見ハ房總二國ふれども子孫十世ふ
傳へハ義實義成二世の俊徳ふ義善政の餘馨ふそ民の是を思ふと深

長うち所以るべし說の是美談ぞや。詩あり歌あり證とを
里見名臣八犬傳　精編百卷集珠全
誰云咱悪他戲謔　驚歎流行獨傑然
ねをちる犬士八の氏人のおろ玉ちをあつめ行
浮萍のうえにきびしきまーめの筆ぞよろづの根ぎーこの葉
詩の自負放言の似れども江湖億兆の指目の指ー見所実かくの如き而已
然び浮萍のうえる根ぎーども好看官の是をもてみづから警言人を警言然らぬ
示是の由で彼岸の到る迄迷ひの津を啓くもあーん欤左もあれ右もあれ病眼衰腐
筆硯不自由の做りーよう只得婦幼の字を教え假名を誨えち代寫させて悄
全局を結び訖看官作者の勉うを知るべース
あらまほしき見る人おもへ八重ちされかるやと目あてみちを書

九輯五十三上終

回外剩筆　稗史本傳を大成を二十八年
頭陀枕中を話說を四十八城
這編い作者の意衷を述でもて拠跋の代る者ゝ开ゞ中の本傳の迭漏を
補ふよりも寧ろ謔言ゞ俗の云昔幕の間ある戲房話說の類あーまー
文化十一年甲戌の春正月下澣本傳の作者曲亭主人這小說を綴ゞ為の
案を拭ひ硯の呵ー七將新研を開きくも時あ廻國の頭陀あり上總より到る一日
皆作堂の松の扃を敲ゞて主人あ對面を請ふ頓て是を告ぐ主人の道く咱
嘘を厭あの故あ閒堂あ惟を垂れ客を辞ーて書冊を讀書て綴りそもてあの半生を
述る而已然るを世の趨途人親疎とく雅俗とく吾虛名を謬認めて
訪來て對面を請ふ者幾許名ぞ五吾其人毎あ出て言を費ーし日を費やさ
かぐう煩へりてすへなーしの故あ吾疾病の推て敢面まるとをー只相

識の紹介ある客ありて只得出て來意を告のそ開い相識の顧れざる遠方うる未見の人の書を寄まるも皆かくの如ーヨヌくに吾を見まくまろ者両國橋邊うる匂欄戯場を看て故郷へ還るの日話柄のうさまく欲まるが如ー遣りねく。とゑを掉ば頑婢あろ辺をて又出て頭陀の謝まるの主人の疾病をもてをづこれ頭陀是を咎て否野衲ハ翁の相識某甲が紹介の手簡を齎しろ枉てわや對面を饒さまの人と連りの請らそ已さまべ主人已ことを汲ぎ書齋へ召容れて對面を主客の坐定りそ其紹介の書翰を向ベ頭陀答て否其書翰いをを翁いまご知らざる者の只名を慕ふそ訪まろふ相識の紹介なけれべ面志のべざとこいろくみよう旦是を偽うのをとりふを主人へ告めを開い赤調戯の過ぐるうらぶや。浮屠家の五戒の妄語を一戒を和僧へ既の破戒の罪あり吾何をう咎。何をういんん已ねく。と答めて立まくまろを頭陀推禁めて翁旦怒を治めて吾のようを咎の妄語い五戒の一うれども妄語の一赤二あろ。或い俾りて利を欲ー又誑りそ慾を遂或い妄誕をもて人の中を裂紀聖賢佛菩薩を誣る者い必是人の害あり佛の所云妄語是又小児を權が如く。實言ろうねど人の悪を懲し。或い俾うをもて人の怒を解紀誑りをもてよく人を諫る者い是善巧方便のそ佛の所云妄語のゆうぎ聲言べ翁の物の本を作りのよの必勸善懲悪を旨とー。よく蒙昧を醒をが如ー。あるー赤善巧方便のく。然を翁い思つぎー。咱等を破戒と罵りのよい是誣言ぬゆうぎや。と詞急迫くりし解けべ。主人い笑つうち笑ひそ好是いのまーうう然べ和僧の來意い什麼と問べ頭陀答て道く。咱等の閑散山居を好ミそ山水を愛る癖のれども。寡聞駑戈のい人べ古人の詩歌あつを知らざ其地の古實を拠ふ由をー只名山靈場をうち巡そ

佛を拜むのミ徒而這一両年ハ錫を安房上總の飛ミ地ニ蟄居ミ縁ありてハ毎歳一ニ度ハ必ず安房上總の間を往来ミ故ニ其在昔房總の國守と雖モ里見氏の事實を尋ねて其舊蹟を知らざるやと思ふと切ニ是を土俗の間ふものから答る所詳ならざる或ハ其餘ハ知る者ありとのミ聞ども是よりの後又人の問ども益を得ざるよりハ寧ろ聞ざるに如ずと思ふ昔里見氏の時上總の四十八城あり今其地を考るに僅ニ二十六城のミ猶東西と往来ミ巡る程ハ一日疲労て松の下蔭の坐ニ憶ひ眠り夢ハ人ありて告るやう今大江戸の著作堂ニよ僻児あり博識奇才なれバ人の師ともなるを好ミ筆々ハヨく児戯の策子を綴りそもて旦暮ハ給をるのミ彼人今茲ハ書肆の需ハ応ニ七里見八犬傳と書名せる大部の小説を作らまくを里見氏の事實ハおのそ必考ふる所あらん盍ぞ初て問ずや但シ彼人ハ未見無用の客を數ふ且其友を擇ひの故ハ大都會ハ在ども同好

知己の友きー這故ハ彼人みづから蓑笠と號を甘ミ蓑笠の即隠逸の義ニ衣笠内大臣の歌ハ身のうへと花のかくれがハせんと讀るハ心操ハ同からべし是ハ由てとゝを觀バ蓑笠の二字ハ彼人の大関目ともいふべき名ものゝ所云ハいふそ一ニ對面七我曲亭と相識ニそ俗ハ誇まく欲まゝ隨意漫ハ刺を投ゲ屢執接児を煩せて果さゞるもヨろしからん和僧先ハあるを沼そ非如那里へ造るとも紹介ハ固様々々ハのミ共へよと告るを思ハ夢覚けり正ハ是霊夢ハ似ミべ心悄地ハ欽びて木更津船ハ戴走らせつゝ斯ハ訪ふのりーハ果して輒く容れらるまゞ紹介ありと俾りーハ彼霊鬼の教ハ仮ミり翁里見の小説を綴らんとて既ハ稿を創めつゝ彼家の事を識ふる舊録軍記地圖などをも一ニ看るにつけんも先彼四十八城の地方を知らまく欲をいふて教ありねと額衝ゐ請ふて已ざりーを主人ハ

五巻あり。いまだ全豹を見ず。足らねども房總の地理及里見の舊趾をも。粗載て且編物の考ふる六吾這著編の栞とも。憶ふ上總人の和僧ふ合て四十八城の内中今其名を存する者二十六城。是を載る者二十六城。是見ふ之と驚しと其書上總の附録の巻ふ四十八城の辨ありそれ是を讀國香曰割居の時所謂四十八城と稱する者上總ふ二十六城載ざる是ふ因て戰爭興廢の事八別ふ考ふるふしのあれば今あらふ省く其二十六城ふ左の錄を。

○大田木（東關）政木大全居城根小屋城とふ其後云々考あれども未詳

○土氣（山邊郡）○東鏡（山邊郡）○舍人（望陀郡）

説前ふ詳ふ

○槇本（長柄郡）説前ふ見えたり○椎津（望陀郡）説前ふ見えたり

○久保田（望陀郡）里見記ふ明應三年里見義成久保田の城ふ攻とあり城主あ

吁くうち笑ひて客僧妄語ふらざるやふ。

夢中ふ人あり。吾ふ向とのたまへども。敲くでも知る死寓言ふらん。幷ふ左ふれ右ふもあれ。今吾綴り劃ぬる里見八犬傳ふ加ふ架空の言のみ事實を正ふふ要ふけれども。素より尚古の癖あるふ折々其書を求獨ふ安房上總の地圖ども。ふ即ふ彷の本ふけるふ究そふ易ふらざ又里見の舊記ふ其写本。坊間ふみーふ。吾知る吁をもていつ里見記里見九代記房總治乱記里見軍記ふのみ。這内中里見軍記ふ坊間ふ寫本ふれども。就中疎鹵ふして訛舛も甚ふ。ねば考證ふ備ふふ足らざ里見記とふ物。四五本ありとふーふ。吾其異本を曽上總國寺濱郡臼井御長者里人中村國香の著せーふ房總志料

里見十世十將綠像
第一義實
第二義成
第三義通
第四實堯
第五義豊
第六義堯
第七義弘
第八義頼
第九義康
第十忠義

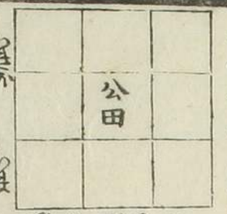
軍鑑十三將の内。万木少弼とあるハ頼春の事之。○矢嶽(綾歌郡)房總治乱記ハ載せず。
麻生主水佐居城万木ハ属も○鶴城(綾歌郡)治乱記ハ又云鶴見彈正居城石
木ハ属も○鳴土(鵜足郡)一作鳴東羽賀伊豫守居城○帆立(綾歌郡)黒能太膳
居城後ハ里見家ハ属せ。土気阪井氏ハ亡さる○久瑠理(望陀郡)又云里見越前
守居城。里見記ハ云里見実尭久瑠理の城を築くとあれハ後ハ里見越州を
もて護らせしなるべし○佐串(天羽郡)朝倉能登守景隆居城。里見氏ハ属し。
○鬼本(其地今詳ならず)○廳南(埴生郡)武田信栄居城。里見義弘國府臺敗績後
も自立せ○峯上(天羽郡)天神山の上ハ峯上とのみ所あり。里見記ハ載せず。峯上の
城主真里谷入道道環とあり。本編ハ載る望陀郡真里谷村の城主是又
土人相傳て同名とせ。思ふハ道環とのみ入峯上真里谷を六代のせしなるべし。本編
ハ漏せしなるべし。追て記

姓名誤せ○造海(天羽郡)今の百首浦の事之。○勝見(天羽郡)房總治乱記ハ勝
見を天正後ハ○真里谷(望陀郡)説本編ハ見えず○池和田(埴生郡)○勝浦
(清澤隣郡)説本編ハ見えず○一宮(長柄郡)説本編ハ見えず○小濱(清澤隣郡)鎗田美
濃守居城。房總治乱記ハ載せず。後ハ万木ハ属せしなるべし○鴻臺
(清澤隣郡)下總の國府臺ハあらず。房總治乱記ハ載せず。後ハ
万木の土岐氏ハ属せ○万木(清澤隣郡)房總治乱記ハ載せず。万木城主土岐
彈正少弼頼春ハ貞頼入道啓岩の子之。國香按るハ土岐氏皆本寺海雄
寺との禪院ハ為弘為頼頼春三世の影像を置啓岩事ハさ考ず甲陽

四十八城の内上總ふある所二十六城其他ハ下總武藏上野等ふあるべし。前説ふ据るふ。二十六城悉里見氏の爲せるを知るべし。獨廳南の城主のこ甲州ふ屬せり。勝頼滅亡以後里見ふも北條ふも屬せず自立せり（以上扇ノ要志料ト讀訣ル頭附鈔ど巻を開ひて主人ふ向ひ之を誦ーて道く御庇ふよりて主家の疑霧亞ふ霽れて始て天日を見るが如ー現ふ書ハ讀べひめるり外ふ就て又問奉る戰國の時諸士の來品ふ貫高をの者あれども。いまだ詳るべとの人り。今ハ必考あらんやぐ教のひねと請れく主人ハ點頭て然ーて吾も亦其貫ヲ寡少ふ思ひ玆頻ふざるふあらべ北條分限帳ふ諸士の來品を並て幾貫文幾百文と錄ーう。里見氏の諸士錄もかくこそありけめ。甲斐名勝志ふ粗貫ヲ寡のるをのれど詳るべぐ。這法を注ぎー物見ざれべ其大槩を知るべひのこ愚按るふ。田圃の收納ふ永幾貫文幾百文とのへり。今も年帳あハ

是を永錢とのふ筭師の人の教るふも這法ありふの永錢を永樂錢と思ふハ違ふ。永ハ穎の假字ふて秋穂の義之田圃物成其價を錄を故ふ穎とのふ筆の異名を毛穎氏とのふも其形箱穂の孕るふ似ーたべ然ーども穎ハ其字畫ヲくて世俗田舍児らどの書ふ煩ーけまべ假りて永とまた永ハ金壹両を壹貫文とを金壹分ハ永貳百五拾文貳朱ハ百貳拾五文るをりべさとう今の銀價直をもてもれべ銀六拾錢ハ永壹貫文之銀ふ幾文と書く文ハ唐山ももありて錢の省文之當時米穀ふのこ錢の貴きふあらざ元弘建武の比楮鈔行れうち續て京都將軍の中葉より弥錢も銀も高ふるこ室町殿日記玄米壹石ふ易ー之其壹貫文ハ金壹両是ふ由てこれを觀まべ昔ハ錢壹貫文をもて今も俗ふ云石壹両是之石ハ斛ふて十斗を壹石とも即石之又其壹貫文ふ所以ゆる秩録の物成の收斂ハ三之

一ゐて米壹石ゐれゐ是を三ゐ分て三斗五舛を又二ゐ
あて其一ハ畔者の得と一又其一ハ明年の種子とを俗ゐ云三物成是ゐ四物成も
是ゐ準へて知るべし。然ゐ秩録の穎壹貫文も主士の汚ぬる所其実ハ三百五
拾文ゐりけん欤いまゞ知るべからぎ年の豊凶ゐよりて米の價ゐ過不及あれども
其大槩を執て石壹両と定めし者ゐ是ゐ由て注まれゐ穎壹貫文ハ即玄米壹
斛ゐて其實ハ三斗五舛ゐるべし。這法則をもて推せゐ百貫文ハ百石ゐ千貫文ハ
千石ゐて。其實ハ百苞千苞ゐるを知るべし。貫ゐ寛ハ事這外ゐ仔細あるべしも
おもえをゐ又秩録ゐ高と書ハゐ寛永通寶同則價相
如んとゐるが如し。然ども猶ゐ寛永の假字ゐ孟子ゐ五穀ゐ寛永同則價相
高と書來ゐるゐべし。語次ゐ云上古唐山の聖人唐虞三代及成湯文武の時ハ
民ゐ取ゐる井田をもて井田ハ雖言ハ田一町方二百四十間ゐれゐ則是を九ゐ界て



其真中の一を公田とゐ公田とハ貢米ゐ備添ゑゐ詩の雨我公田遂及我私
とい〳〵ハ是ゐ。天朝も上古ハかくこそありけめ。仁徳天皇の御時ゐ
三年の貢を株ゐめて民を富ゐしゐとゐ故事あるを思ふべし。和漢
戦國の世ゐ至りてハ賦用續ざれゐ民ゐ取ゐるのおのづゐ〳〵ゐ
ゐゐ勢ひゐ。今ゐて井田の法ゐ因ハゞ士を養ふことを汚ざるべし。今の世ゐ生れて古の道の
かゝらゞ禍彼身ゐ及ぶとのひゝ聖語をも赤思ふべし。ゐ故を温て新を知るゑ学を
好とのゝべきのゝと叮寧反復して解示せゐ頭陀の听ゐ感佩して額衝ゑ美て且
道く人を誨て倦ざるハ則君子の忠恕ゐ野衲初て推参して御著述の妨ゐなる
罪を饒さまし一のこゝろざし一を聞て二を汚ゐる欤び何事ゐ是ゐ優ゑ況古言ゐ云ゑ
與君一夕話ハ勝於十年學。又云聞名不如見面見面勝於聞名復
こそ見参仕らめと告別して出てゐたけり是年暦成冬十二月八犬傳第

一輯十回五巻刊行の書賈山青堂發販を其明年の冬第二輯五巻出るゝ
及びて這書をの〳〵著漸々ゝヨヌり第三四五輯ゝ至りて六本傳ヲ〻く賣ぬる
ものゝ山青堂他事ゝ觝りて本銭續ざるありけん是よりの後書賈涌泉
堂其舊板を購求を代りて第六輯を刊行を然ども是も亦其人ゝあらず
ざるべ第七輯を彫ぬる時文溪堂の幇助を汲て達〳〵て發兌ゝけり。この比
本傳ハいよ〳〵時好ゝ稱ふて其利勘ゝらざと雖えるがら二の両書賈の
等閑ゝて刊行中絶去ぬる者徒ゝ前後五六年を歴ぬ。偖而今の書賈文溪
堂が其舊板を咸購ゝ續刻發行ゝぬる隨ゝ是書の流
行類稀ゝて只ゝ江戸京摂のみならず縣田舎間漁浦樵山約莫足跡の至る
處舟車の通ふ処年貢の出る所店賃を債らざる所鶏犬の聲ゝる処洪鐘の
響く所國字四十七言を知る田翁野嫗山妻牧童約血氣ある者是書を
見て愛玩ざるハあらー。と云風聲耳ゝ瞑るまで年々是を忘ざる日ハ今ー柳本傳
初板の年ゝ光陰流る水ゝ似て老の至るを知らざりける。作者古稀又半ゝ
今茲天保十二年辛丑の秋八月まで星霜二十八年ゝ本傳稿本思ひの隨ゝ
全局を結ぶ折ふ彼頭陀何等の風ゝ吹まけんいと珍らかゝも訪來ゝけり迭ゝ別
後の口誌託りて頭陀ゝ遣く昔年御教諭を兼ふりーしふ忘れうゝねぐも。
年來西海南海ゝる九國四國ゝ約脚ー七ゝ淹留の地も多ふりけ旦六幾春秋を
累ふる疎濶の罪を饒させの〳〵去歳ふりゝ又安房ゝ到りて某甲の院ゝ居り西ゝ
ありそも東ゝありそも只八犬傳の流行ゝ耳目を驚まものこゝれいかゞ〳〵ゝ
さゝ叱らまろ〳〵んと思ひきらぐら俺ふ〳〵居ー関の門を踰て推參仕の処相別れまろーふ
傷まべ三十稔ゝ近ふ翁も痛く老のひゐ琴ゝ嶺君の早逝ゝ八犬傳の附録ゝも識
さまこふのゝまべ驚き悼む吁ゝまろせ。今さゝゝ又いひ出て物を思ひせまろるべくも

そこを是
わらぢ二十稔のまうさる比より故賢郎琴嶺と同居をそ神田のやまのてやまの山檀ふ下居のうへ知らで尋
聞されども去の五の巻すでに年々ふ續出さるを待ぬそ閲しくうけれバ翁の今も恙なく在まさを欣び
思ふ心のこゝろのせらるゝハ一日もとやく結局編を見まくおーうの稿本ハ送もるく綴り
果一のうへ欤厭うるまハ一巻ゑうとも内見を饒さをゝとこれて主人ハ領きて。
然ニ九輯ハヨヲ編をそ第四十六の巻より第五十三の巻ゑん第百八十勝回の下編
まで九巻ゆゝて局を結びぬ追刻の旨巻と共ふ全本一百零六巻ニ其四十七の
巻ハ楮數ヨヲさをもて駄重て上下ふ分ちそ四十六ゑう五巻ゑるを今茲の冬發販
まべく送る所五十の巻より下五巻も續ぶそ明春出さべーと云刊彩の書肆文溪堂の
情願ふ任せう是見ゑと脅近る稿本四五巻を倉杭て出ニ示せバ頭陀ハ學戴
きて讀ふ及ぶど甲乙と閧き見て且訝りそ。御稿本ハ女筆ゑるべー。何ぞ自筆ふ

うのまさまへざるやと問れて主人ハ嗟嘆ふ堪ぎ然ニ去の三四年來我老眼年々ふ病
衰て去歳の冬十月より書を讀とも字を寫とも絶て不自由ふるゝーべ只得
婦幼ふ代筆させそ這稿本を綴りふ充とりくべ頭陀ハ眉を顰めそ开ハ不便ゑる
ニふ依り琴嶺君世ふいまそうせべくる折筆労の帮助ふるせるのへんふ今ハ
千萬惜むともうべきー稿本の代寫を命ゝるゝ門人ハいかゞやと問ハるて主人ハ
頭を掉て否よ。洒家ハ昔より戯墨ふ門人との如き者ゑーニ四十年以前吾戯作
ゑる画策子ふ門人魁簡子奴作傀儡子ゑどのよふ
人ゑそ一時の戯れのミ實ふ其人あるふあらぢ然を文化文政年間生在てある壮後
ゑうぶ吾等子ふるゝーまくゆゝて由縁ふ就て紹次の人を求めそ漸次ふ訪來ぬる者
八九名あゝーらど吾一人も是を許さぎ且其輩ふ諭さをう。戯墨ハ讀書の餘樂
ゑそ吾真面目ふあらねども是をもて旦暮ふ給ー又是をもて有用の書籍を購ん

とそまる之素より宜ゐ技之と思ひぞ己が欲せざる所をもて何ぞ人の施さゞん。入門の芸ハ決て兼ざる各這無益の遊戯の光陰を費さんより其師の就て学問せバ必神益ヨリ多かるべし且戯墨ハ師の従ふて学ぶ者ハ多かれ各其大ハ儘まるのミ。吾ハ唐山人の稗史小説を多く見て其文其巧致を擇ミそ他ハ效ふ。晤譚の為ハ訪れん人ハ稀也厭ふべし。御叶望の一條ハ思の絶多きどのハ各望を失ひぬべし。猶徴ずまの折々訪来ねるものゝ為の身を修ん家をそのゝべ説示ゝ又暇ある折ハ老子荘子などを講ずるハ折脈を催さるゝハ稀也。開が中ハ入門御辞退の芸ハ吾のミまらず昔も今も。儒者ハ琴所許一ふとの琴字をも名號ハ做さゞ者ハ五琴川又琴魚ぞ告る者五六名のゝ一両稔の程ハて屡く胡越の如くふるりけり今思ゝべ三十餘年の昔ゆゑ知らず。是等の内中ハ棣亭琴魚い同ゝらぎ。他い吾知音の友伊勢人篠齋の号ゆゑ。窓虫餘譚青砥石文ぞどの物の本の作者ゆゑ。這他女流も遥ハ吾ハ書を寄て開が綴りつゝる笠東子の稿本を示ゝて雌黄を乞ひしもの或ハ戯墨の弟子ゐるらまくかゝる又一婆婦の消息ゝて其子の教ゑ方を理ゑたるなどを問ぞもゆりけり志ハ然るとゆゑ感ゝ思ふねもわれども婦女子なれバ会ざる紀開が中ハ陸奥なる真葛ゝう女も嬬婦ゆゑ吾ハ七ぞりの姉ゆゑと号ゝてハ又ハ拙ゝ歌をよゝ和文も亦拙ゝ漢ぞ且殊ゆる男魂ゆゑて独考ゝの議論の書三巻と奥州ゝる一ゝの随筆一巻又磯づゝひとの紀行一巻其餘も小冊子三四巻綴りあるを吾ハ寄て筆削をとるゝ吾已ゝを汚ゝ独考論ゝの二巻を編述ゝて是ハ会ゑ然ゝとも是も玄流もりみれバ吾已ゝを汚ゝ独考論ゝの二巻を編述ゝて是ハ会ゑ然ゝとも是も玄流

れい辞して久しく六ツ半過ぎあらん文政元年の
籍は入りぬと風の便のたよりに是等も要ある夏辨
実言ならじと思いれんとそ漫言諄言たつるみそと告ぶべ頭陀ハ感嘆して世の戯
作者ハ門人弟子の一名も見ねど甚だ栄ありて某甲某乙と其書の名を録せしも見
るは公羽の用意の格別ありて人の及びぬ所あるべし扨御眼病へいかゐや幷ハ易ぬ
病厄もれいぞ療養效驗のまと本願を祈るのみ然るまま這稿本を女筆
ゆえよくも代寫せしまゝのみ見るみ漢字も假名使ひも皆誤ありぬ非
除教のみとも容ゆるべき事ゆえぞ這義も示しねと請れて主人ハ嗟嘆の堪ぎ
然ばよ其ゆえれ言ふ又くとも緩やかに坐し七徐のまゝ多吾髪歳の時ようて書
讀むを好まゝべ成長ハ及びて一日も書巻を把ざるまし。但而寛政二年の冬
劇りそ戯墨の画策子二巻を編て書肆甘泉堂が刊行せしより今ハ至て五十

二年刊行の雑書物の本共ハ二百九十餘筆ハ及べり這他刊布せざる筆記雑
纂或ハ二三葉の小紙子ゆゑを數へ盡をびやうもあらぬ就中文化年間ハ書
賈ハ乞ふ大小の物の本ゆえりけるべ日毎の夙ハ起出て机案ハ面ひり其夜人
定まを稿本を綴りて人の為ハ疲労を厭なべ交の時過てハ睡氣つくまで書を讀て
みづからの樂ミぬを倘佳境ハ入る時ハ天の明るを覚えぬ隣鶏の鳴くハ驚されて
躰て起出て又机案ハ面ふ日もありけり但而年來を歴ぬる隨ハ逆上口痛の
患起しより年五十ハ至てハ歯ハ皆半々ハ脱て一枚もあらざるぬ且夜枕ハ就く
時仰ぎ臥せべ瞑眩して堪らまぞ横ハ臥せべさもあらぬきだハの比一名醫酉と晤
譚の折吾ハの事を告しべ名醫驚きて足下生來血氣人ハ勝れざる人の
氣根ハ涯りあり九石の弓も毎ハ緊く張て緩やざまべ其弦斷ざるを汎ぎ
其樂む呼七もて名利の為ハ殉まるハ賢者のせざる呼之今より些一緩やよと

いつまでも埋れをれば吾ら合て教諭兼りひね名利の為ふ身を忘まて無益の筆硯ふ耽るふあらねども少ろり時憨ふ義俠の心めりて今ふ至て其癖うせず。一旦書賈ふ諾ひて稿本を乞る時ふ他をふ發販の時日後まて利を失ふを恐ふ是ふ亦不義ふ似れば事のちふ及ぐを思ふ愚ふひきと謝て是より夜学せど物の本の稿本も乍ふ二枚と相定て其餘ふ需ふ應ぜるとなく夜ふ人定を限ふてもやく枕ふ就べふ身も漸々ふ安くおぼえて仰臥しても瞑眩せざをさく養生を宗とする程ふ吾還暦の年丁亥の夏より秋まで大病ふ罹り危ろ命ふ有も幸ふて癒り兒左右もる程ふ九年以前癸巳の秋八九月の時候ふやありけん一朝不圖起出けるふ右の一眼見るとを失ふ瞳子上の方流ろ療治さるべとのひけり其後親族朋友書賈ども治療を薦る者多ろりど吾敢従ざど且おもへらく吾ふ幼稚より眼の患るく流行目ぶふも病と

ゆゑぞ然るを今一朝ふ右明を失ひしふ年來讀書筆研の疲労ろるべく且冬春毎ふ高き火桶を坐右ふ置て机邊の寒ふ氣を防ぐ。既ふ久しくろりて其火氣何時とふく右明ふ入りそ乾ろさまろうむざろん聲ふ老樹の片枝立枯ろふ異ふるぞ非如醫療ふ術を盡さともも草根木皮のよく及ぶべくふあらざと母思ふ一日も筆研を排斥せど初ふ硯心見難て毫を染るふ不便ろりふそれも熟て不便ふも思ひど其後故児の憂ふ丁ろり年も世渡ろるまじ忌ども関て又筆を把らざるとをひど其次の年四谷へ移徙ろても左明ふ異ろるともあれば著編ふ倘年々ふ綴りぬる程ふ戊戌の春の時候より何とふく左明も亦翳むやうろりふ夏ふ至りてふりく其異ろるを覚ーろども倘悟らざまそ眼鏡の曇りろ故ろらめと謬思ひそ。俗ふ本玉と欲ふ水晶製の眼鏡の價貴をを厭ひど此彼と覓ふく購求めそ掛替々々凌ぐものろり己亥の春ふ至りてふりく

うまみて病眼ろるを知りるがう本傳のまごご大團圓ゐ至らねべ書肆の需を推辭もゐせで猶辛と綴る物去の外ゐもありけり。偖而去歳庚子の春ゐ本傳の稿本も故の如く十一行の細字ゐ夏ゐ至りてハ只矇々朧々として細字を寫ことゐろねべ其稿本を五分の大字ゐして去歳の秋九月本傳第九輯四十五の巻まで綴り果して刊分の書肆文溪堂の責を塞ぐ。綴り果して明年四十六の巻以下を綴り果さんと心許なく先や倘くてゐる程ゐ今一巻ろうとの經らずやと思心を励して第九輯百七十七回一顆の智玉途の一騎の驕将と懲をとの一段を五分或ハ四分の大字ゐの字分も玲丁丘丘、ゐて。且墨の續りね処ゐて讀がこーとのべ幷を宅眷ゐ補せるど去ぬる程ゐ十一月ゐ至りて宛雲霧の中ゐ在如く又朧月夜ゐ立ゐ似て一字も寫ことゐろねべ筆研不自由ろうのこるごご書画を見ても楚と見えぎ。偖ゐ晝夜を辨ず東西を知るのこいふともせん術ろけれべ書案を退け筆を投捨て獨歎息のあまりゐ

ろづらふるかひこそろけれ見ぬまろう書巻川ゐ稽ことろ世をとうち詠ーて。

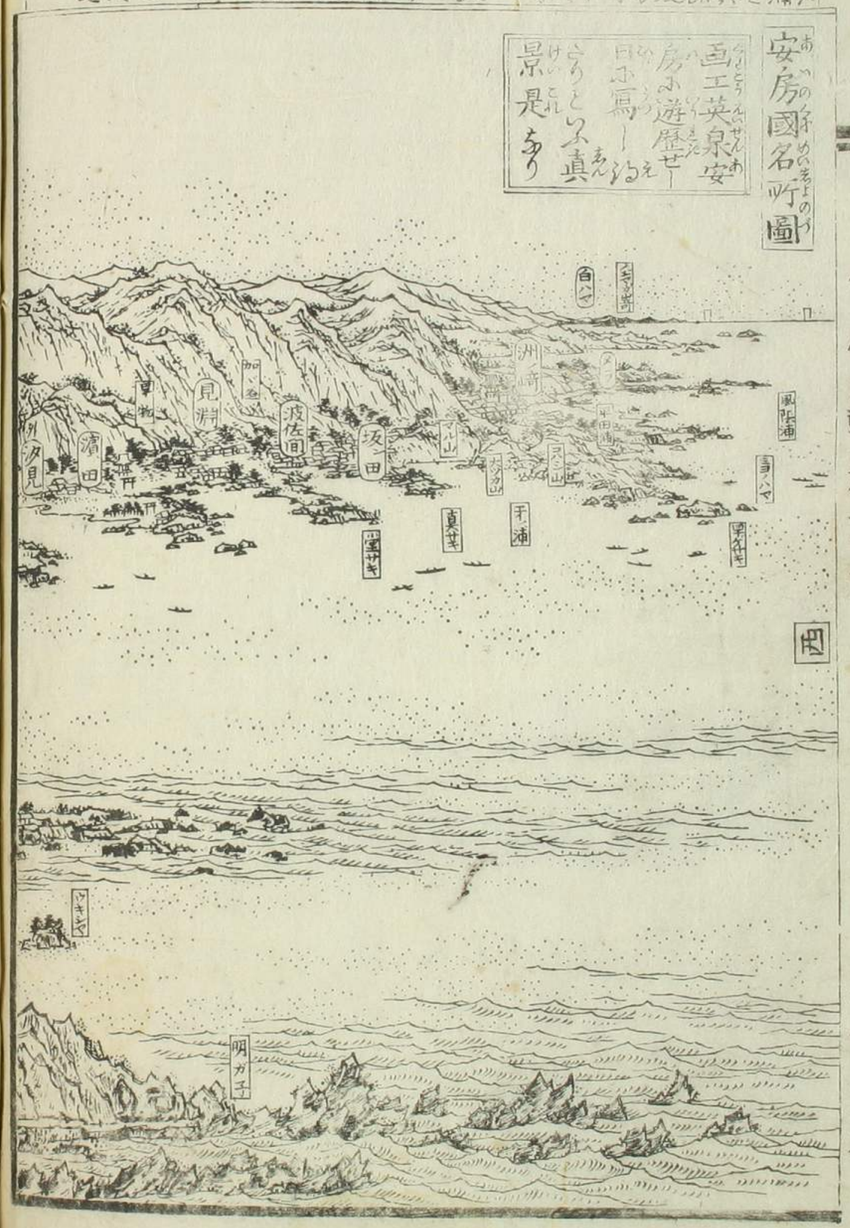
爐ゐ寄てのこ居程ゐ文溪堂及貸本屋ろどの者さえ少知りて皆慨ーく思ひねいろく為ゐ代寫さ死人を索ろゐ意ゐ稱ふ然ろ者のゐろべくもあらぎ吾亦赤失明て生甲斐もろけまべ這年の秋九月より次の年まで人の薦ろ醫師を三名まで轉薬ぎぬまごども毫も效験あらぎ。然バ今茲辛丑の春ゐ至りて。

吾又ありよゐ八大傳ハ今昔有ぐ大部の物の本ろゐゐ始ありて終るくハ只看官の飽ぎ思ぬんのころぐ文溪堂ゐ為ゐハ後々まで利を全くまぐさて送憾こをあらんぎらゐ人の為ゐ謀りて忠ろぐぬい吾も赤恥る所ゐ然バとて吾孫興邦ハ倘乳臭ある机心うせぎ。且武藝を好め原本性ろれべ偖ろ幇助ゐろべくもあらぎ。他ゐ母ハ人並ゐゐ書もまろれべ教て代寫させべやとやうやくゐ

思ひ久しう第百七十七回の中音音が大茂林濱ゆで再生の段より代筆させて一字毎ゐ字を教え一句毎ゐ假名を附る。婦人ゐ普通の俗字ざも知らゐ稀ゆで漢字雅言を知らぎ。假名使てゐをはざゐも辨へぎ。偏傍をもあろはざるゐ只言語をのみもて教えて寫まる吾苦心ハいとべうもあらぎ。況て教を兼て寫く者ハ憂路を辿る心地して困じて果ハうち泣くやう。然而代寫一枚ゐ滿れバ讀反させて又教て傍訓を寫まるゐ熟字を知らぎ又句讀をあろはれバ讀時或ハ字を脫し。或ハ衍字を添て讀やう輒うざるゐ知らぎあろはざるゐを口授せうまで寫く者の艱難を思へバいと痛ましく幾度の已ざやと思ひをを又思ひ不て筆捨の松のふる葉も子ゐゐをしえてかもるぞ憂支とうち詠ぜて且慰めつゝ一二卷代寫さ畢ぬる程ゐ他もやうやくゐ熟て苦心初の如く偏傍ゐ悟まえ。言を費まも。舌の疲るまでゐ至らぎ。

編中の出像ゐ代寫さ世者ゐけれバ吾只其人物を圖點じて画工ゐ任よるゐ委細ゐ法文を代寫さ世ぬるのみ。稿本ハさらゐ書画工の寫本ゐ吾ゐ如く寫りや否。心許なく思へども術ゐ況文中ゐ故事ゐなどを引用ひんと思ふゐ原本ゐ渉らぎれバ。暗記の失ゐんを恐まで命じ其書を今ま出さ世て讀まるゐ漢籍ゐ及ぶゐも。あらぎ。假名まじりの古書ゐゐども傍訓ゐ記ハゐ讀ぎ強て讀まるゐ駄舌倦離ゐて要をゐさゐれバ援用ふべゐゐ寫まるゐハ教もまゐど讀まるゐハ吾見ゐゐゐ方ゐ。然ども教誨を兼る者の困じゐゐゐも倦ぎよく勉ゐゐゐ至らんや。縫刺の技薪炊の事ゐどを他ゐ職分ゐ具ゐ文墨風流の事ゐ代らせて其要を做さ世く欲まるハ理ゐ。理ゐを知らぐも月を累ねて今茲辛丑の秋八月廿日ゐゐ日ゐ本傳第百八十勝回の下編附録目諸將の成敗其尾を備ゐもと

安房國名所圖


西
北
見洲
洲崎
布良
伊戸
小沼
大石
相濱
渡佐間
坂田
清田
見物
千浦
小山
真倉
東岡本
東岡本
東岡本

せざるぐらいやめ。結局大團圓はそ稍稿ゝ果ようれ。噫無益ゝ老の諄言よとのみつゝ呵々とうち笑ゐ頭陀ゐ感嘆の聲をゐよそ。姑且ゝて道く。誄ゐ翁の老實ゑ。和漢今も古も。稗官者流ヲゑれどもうくまそふ苦勞ゝて書肆の爲ゐ難義の筆をゐ果ゝ。ゐのゐ有ゑ。心操ゑる者を江湖上ゑうゑ看官ゐ只管閑ゐ見過ゝて反好ゑを論ぎうもめゝん通ゐの書の大部ゑうも人の爲ゐ稗益ある。有用の雜纂ゑうまゝ。かゝ勞ゝても功ゐる。ゑゐ然る物ゐ世俗の見まく欲ゑうゐ稀ゑう故ゐ書肆を赤判ゝ彩せまく欲せぎ求る呼ゐ只是のみ。這故ゐ翁をゝて稗官者流ゐ做ゝ果ゝぬる。ゑも赤天乎。命ヲ乎。惜むべくと繰返ゝつ嘆ぎまべ。主人も倶ゐ嘆息ゝて余のゐうゐ理りなれども。是等の筆子ゐめうされべ。吾年々ゐ編てゐて半業ゐ做をえをゐぞと。昔清人毛聲山ゐ小說傳奇を好ゑ隨ゐ嘗三國志演義を評註ゐ其妙金聖歎ゑ。水滸傳評註の上ゐ在り。ゑるゐ他不幸ゐゝて老後ゐ失明ゐ做ゝくゑ。好む所を棄ぐくやめ什ゐ又琵琶記を評註ゐるゐ及ひて。二三の子弟ゐ口授ゝ代寫させゝて稿ゑ果ゐたとのゑ。昔吾琵琶記を讀て是を知ぬ。他と吾とゐ同好ゐそ且眼の患も相似ゝれど其評註の精妙ゑるゐ。みゑうゑ筆をと把まるゑ如ゝ。蓋唐山ゐ文字の國ゑ子弟ゐ文字ゑる者ゑけれべ。其ゐ所を一字も遺ぎよく代寫せゑえ。天朝ゐ言語を宗とゝ素より文字の國風ゑうぎ。知婦幼ゐ代寫さまゑゐ管を擱りて思を構る。波瀾曲折の文何所ゑう出ゝ來ゑ。ゑ僧ゐ其意を達まるのみ然ゐ筆工ゐ寫せゑうも。又其刻本も婦幼ゐ讀せて校訂まれべ脫字ゐそ処ゐもとゝ。誤字ゐ吾見るゐゑゑぎまべ所を正まゐ由もゝ。看官ゑくと知らざまべ校訂疎卤ゝそ笑ふもめゝん。讀者ゐ文章の觀ゐ管らぎゝと。杜子ゐりゑ。文者ゑ文揚ゐ遊んや。僧ゐ詩を賦歌を詠のみ又放棄が江賦ゐ水母以鰕爲眼と

以て吾鰕子をもて眼あせん欤其鰕子も亦ひと
人い誹謗るもあらん小説物の本の大筆妙
羅賢中い水滸傳を作りー悪報をも三世咄子を生ぬとの
あり又紫式部い源氏物語を作りー悪報を地獄の墮ろと人の言を見えぬと
い寶物集巻ホ這證文あり水滸源語い稗史物の本中の大筆妙文なれ其傳
山賊の義俠をもてー或い貴介淫娃の事を上旨と綴りまたび和漢同日ホ是等の訕あー
らん倘おらばい西遊宇津保も大筆妙文なれ是等の作者ホ咄子墮獄の
悪報ぬいふぞや。這故の唐の韓愈い得識名ホ從とのり是ホ由てまた
觀ばい吾も亦犬傳を作りー悪報ぬて老て半盲ホ做りぬとホ識詰もあるべ
らん非如何とないわづの吾髫歳より讀書を好きて和漢の歴史諸子百
家の書小説傳奇歌書草紙物語ホ至るまで硯いおる所なく聖教賢

論の辰守ぬいふもさま殷酉書佛經ト筮方位皆其一隅を獨学ーて孤陋
なるも和漢の治乱君臣の得失士農の務ひ冗所工商の巧拙好直貨殖
清貧の樂む所猟漁牧焦のある所名所舊跡禽獣草木の名戈と不
戈と人情の厚篤浮薄其大既を識ることを汲る学向の餘樂ぞ旦蒙昧を
醒さん為ホ戯墨の策子を編做ーて書肆の需ホ應ずる其潤筆ホ足ら
ざるひ毎ホ衣食を省き節倹を上旨として和漢必用の書籍を購求る者五十有
餘年其書藏めて五六千巻六十餘櫃ホ至りぬも貽畀んと思ひー子い早逝ー吾も
亦老眼衰耗ーて讀書得ざらぢ做りーひ咸沽却ーて紙魚も漏さぢ事皆
画餅ホなるものから猶肚裏ホ残りーる此二の書ありー文あるをもて任ぢらの口を
刹而已不幸らくの如くなる隨ホ昔唐山孔門諸賢の得失を思ホ子夏い老て
子ひ喪ひて竟ホ失明ホ做りー時曽子是を吊ホそうち哭たーうべ子夏を疋うち

哭て噫天乎吾罪ふ〻と呟たゝを曾子始めて商（子夏の名）汝何ぞ罪ふゝえやをや其三罪を擧て是を責ふべ子夏杖を捨て謝ゐ給とのふ語い禮の檀弓ふ見えたり夫子夏の賢うをもて猶三罪うゑたゝをぞ況己が如き著い五罪も六罪もあらぬべ。あれども曾子の意い子夏が三罪ある悪報ふて失明うとのみのりごと子夏が罪ふゝと呟くふ就なゝ其三罪を責ふ老て子を喪ひ又失明うるこゝえ數へて其愆を知せゝ倘あらばこそ伯牛の大賢うる其徳行顔淵冉子騫と伯仲を爭ども彼身不幸ふゝて癩を病て命危ふゝ時孔子是を訪ふ其臭氣ふ堪ざるべ病の牀ふ入らざゝて其窓より手を取て死ん命うる乎此人ふゝえの病ありとうち歎給ゐのみ其罪を責ざ伯牛素より罪ありけれべ。約莫人の非をふの者ふ二あり其宜ゝらざるを擧て愆を知ふるる。即朋友の信ゝ又只己が好憎をもて其合ざる所を擧て是を責ふ好て人の悪を

のゝ文化年間浪速ふ赤水と號まる者あり播陽五島名い恵迪字文敏と稱ゝ五年己辰秋他が著ゝうる赤水餘稿一巻あり其編中ふ吾を論ふる三酷く且吾を比ふる原壌ふ蹲居を以ゝ五吾を罵ふる賊を以を當時吾友京師ふる角鹿比豆流是を吾ふ告て為ふ解嘲の文を作らんとのゝあゝを吾許さざ且論ゝ道く。好て人の悪をのふ者ふ聖賢の憎む所ゝ他と吾とふ相識るふざ且纖芥の怨ざるふ他何等の人ぞれ次忿ふ吾を論ゝ忌憚ることく罵ふるや是必狂人ふべ。狂人の走る時不狂人も倶ふ走れば是狂人ふ異ならざ吾少ふゝ時よう爭ふ氣ある人とのゝざ他が如きい齒の掛るふ足らざるふ可惜紙筆を費ゝ解嘲の文を作らべ大人氣ふるべ吾今赤水餘稿を閲ふるふ他が弟二子を悼む文ふ其子の遊女冶郎ふ良慕甚ふるを以て栄とを其心術の陋ゝを知べ吾不肖ゝ雖ざ國禁を犯さざ不仁不義の行ひなゝ年々ふ編次ざる物の本ふ

世の禅益なるべくども。大官允可ありて刊行の書肆并の書画工厥人貸本屋等まで。是ゟ由て衣食するゟ。彼一人聲を唄ふと云云と罵あるゟ人の名利を娼嫉ゟめるぎや。竟ゟ今江戸の戯作者ヲ殆んども。他吾名を論ぜず這悪言を出ぬるゟ既ゟ学問ありてゟ児戯の筆子を上目と綴るを似げなり。憎むゟやめらん是爭を好ゝ他焉ぞ吾志を知ん昨今あの赤水餘稿を這地の書肆ら笑ゟ亂ゟ其書名ぐを知る者なし。其書名ぐを知る者なし。吾名を假りて編中の這悪論を載るぞ。作らぐ他が謀る所の稽で赤水餘稿の報章を世の引くゟ。已ねくと推制ゟ毫も掛念せぎるゟべ人ゟ告ぐを忘ぎるゟ。言の便宜ゟ思ひ出で傷れば三十餘年の昔ゟぎるゟ。火盤を曳よせて一霎時烟を吹程ゟ頭陀ゟ只管感服して。翁ゟ唐の張公藝の亜流ゟやあるべらん。

忍辱ゟ我佛の第一の教なれども。野衲等が及所ゟあらぎ。現ゟ漢学をまなぶ者ハ。反徳約謹慎の理を思ぎ。動もすれば論を好て人の悪をゝく者あり。況悪名を悪ゝて。論ゝ怨を思ゝざるゟ。俗ゟゝ無法馬鹿物ゟ痍うるべし。翁ゟ其悪論を忍ぶべ。只感服の外いぎを。就て又問まうく近曽這地の書賈等が。翁ゟ舊作なる画巻子物の本を恣ゟ再板ゝ。是を翁の生ぎ己が自恣出像を新くゝ。剣像賢詞書などを増減もまの。是を新板と偽り売賈僻ハ翁の辨論ゟ。本傳の附録などゟも。識者ゟ。是を知れりとうるゟ今茲春正月下谷なる書肆英某が刊行あらる雅俗要文も翁の著述なるゟ。稲疑ゟ思ふゟ。其書の自序ゟ天保十二年春正月とあり。序ゟゝ其月ゟ躰て彫なゝ。発販さべくもあらぎ。且編左の故賢郎琴嶺君の畧法あり。賢郎ゟ七年以前乙未夏五月八日ゟ物故なるゟ翁の自序の文と歳月ゟ

これ相遠あり。且其書の著作堂馬琴作と録せるも誤りなり。馬琴ハ狗の戯號を合巻物の本の自稱なるの外。譬べ南畝の戯號狂詩の寝惚と號狂歌の四方赤良又香花園と稱するが如く意ある雅俗要文ハ戯作なれバ戯號を録せるも誤寫あり。且文中ゆ訛字を經ざる者ハ似よう這筆甚麼と問れし主人答て然バとよ其ころ拙著雅俗要文ハ。文政十一年の春江戸伯樂町なる書肆永壽堂西村與八の需ゆ応じ同年の夏六月稿本成しを登時與八の取らせゆ紀其後彼書肆ハ活業如意ならず刊行あらざりと聞ゆ詣來るもの七十有餘年を経しハ。今茲二月時候雅俗要文出販をうと人の噂ゆ洩知りてうち驚馬紀つ其印本を買取らせて。婦幼の讀せて彼ゆ今容僧のくるが如く稿本の自序ゆ。文政十一年夏六月の吉とあり。且其序ゆ永壽堂の號を載しゆ彼英文ゆ恣の寫更めて其堂號も自序の歳月も皆偽りしるゆぞあらん。這故ゆ五言速ゆ人せ英文許遣して其刊行の始末を問せしふ。他ハ永壽堂の宅着より吾稿本を騰求めて。躯て筆工ゆ再寫させて刊刻しんと乞ざるや。且自序の歳月と序中の堂號を恣ゆ寫更めるハいわく僻事ぞ。又是等の著述ゆ馬琴とゆ戯號を録しるハ相応しらざる矧又本文及畧注ゆも訛謬あるを。後ゆ思ひ改られども永壽堂胡越の如くゆありて。久しくるまで其板下の寫本を見せねバ徒ふうち過ぬき是等も必補刻を完着ゆ先自序の歳月と馬琴の二字を速ゆ削去るべしと重てのひ遣ハしゆ業りけれバ。風く告まろるべうしゆ然るよしゆハ心もつろで。今さら畏りけとゆハ答のゆ空そらう。鬻ゆ發販あらうしより既ゆ一千ゆまろ發さうと。いへばりのふひあるべや不日や心許なし。然而其印本を婦幼ゆ讀せ咲ふ咸傷

訓のあやうき文字の轉讀みよく惑ひて詳ならざる。靴を隔て癢を掻もの少からん。然べ今の至りて讀も果さねば誤を正さゝ由なく只單葉の傍訓ひと
そゝるるをヒトエハと誤る類僅ゝ二三を知るのみ又三月の部雜遊の畧注ゝ
飛鳥井栄雅老君の歌を引て都のそやと訓りあるをそのまゝ作り
思ひやるらん。とあるのごけくそを。のぐひくそを。
もへ筆工の誤寫之又雜部三十八の本文ゝ竹都神宮とあるへ誤之遠
吾友伊勢松阪の小津桂窓の考めりて道く竹の都ハ齋宮のあり跡を
のみ。神宮ともへ路の程相距支三里許るを。清水濱臣も知らで神宮のみ之
と思ひ誤ると。竹都を故郷とよめり。古歌もあるとのみ又同人の評の畧注の
中。標識稱謂辨の下ゝ樣とのみへ近世の俗稱之とあるとも。永享中の古
書ゝあの言あれべ近世とのみいひつべきを。理りあるゝ似されども。吾

思ふようにあらざるのみもまた。天朝ハ天地定りてより。草命の世代ふれバ二三百
年の昔をも。猶近世とのべつゝあの辨ハ文ゝ又雅俗要文の顚末ゝ似るゆゑ。寛
又雅俗要文の顚末ゝ似るゆゑ。寛政年間京ゝ中川新七とのみ書賈
江戸ゝ僑居しゝ時。他ゝ需ゝ応ぜ。花鳥文素とのみ。婦女子の要文一巻を
綴りて取せしゝ文化元年甲子の春のころ。近江屋新八と合刻ゝまぢ
のみ。這年新七ハ京へ還りて又來るともきけれべ。其稿本ハいつかゝ受てもめ
もぞ三十八年を歷て。今茲初夏時候。吾相識書肆森屋某とのみ著花鳥
文素の稿本を一書賈のもとゝ買合て。友て吾の告ゝ知らず刊刻をと告る
者のごとべ吾又うち驚ゝ則人を森次許遣しゝ花鳥文素ハ普吾中川
新七ゝ綴て遣しゝ疎文のそ。何ごとを書うやらん。今ハ忘れられども必拙ごとべ。
然ごとを吾ゝ告ゝ校閲をも乞ゝしゝ刊刻ハ甚非ゝ和主是等の筆子也彫

ほしがりしかば吾又別に綴りて取まべし。先其稿本を見せよとのたまへり。他公合て花鳥文素の稿本は既に書林行事免許の印信あまべし。裏に刊刻の疎悪なるを嫌ひいひ兎角を先生に告て校閲をこざうしんに故あり。先生は刊刻の疎悪なるを嫌ひその稿本を見せまうさるとも意に稱ふべからざるとの其刻板は彫刻宜しからざるを見せまうさるとも意に稱ふべからざると思ひとりつゞ這故に吾又別人をもて遣しといふ趣ありしかば。其板疎悪なるべし。吾買取るべし。其刻本を見せよと重ていひやりしかば他又公合て。香一本に做せしめよ。百人一首の附録に古ぬるは其制表紙皆賣出して。今はなし。異日揃せを見せまうさんとのたまへり。今日までも竟に見せざれど。他は十稔許さきより比までに年々に吾に戯墨を乞ふて赤本事始又女西行又金魚傳などの合巻の一画第子を見しく刊行せしめ者なれども今は然る要事ありけるにより自恣理不盡なるをのみいひて談せざるを思へども。吾脚久しく衰て筐轎にあらざれば一町ばかりも出るにあらざれば況てかゝる煩ひあるふ身さへ心を役せられんは本意にあらざれど。既に六日の菖蒲十日の菊にあらざれば。ともにかくひわるべからざると思ひ捨て果さゞりき只彼二書を具眼の人の信る敬ひ知らで論ずる者もあらん欤と。言又是にも及ぶ。書肆は利の為に刊刻せ作者は名の為に恥るをあり求炭何ぞ合ふよりあらん或は吾舊作を再板せ新板と偽り或は吾舊稿を購求て合ふて恣に刊行を畢竟吾名號を售る者ぞ其書の好否を知れるにあらざれば吾名號を售る者の吾に告ずして各恣なるは大槩にかくの如し。鄙語に云長生をまれば恥多しとかやうち忘れければ頭陀にして人文字ある時は苦労多しとかや。慰めて人の心を理りて就て又問まうる朝勇巡嶋記又俠客傳美少

年録ども。尚半分ゐしも結局まで遠るべく翁の病眼ろくの如くなれば續出さるゝやうなるべし。百年の後凡筆をもて他人の是を續ぐ者あらば事損ねおそれいめとのべ主人い點頭て然ゝ唐山水滸後傳天花翁が後水滸傳及續西遊記後西遊記の如きハ作者の隱微を知らも七ツ八ツ蛇足を做ま者ゝ這故の約束ぎと玉のまぎ全らざるとて尾をもて是を補ぐ誰ゝ連城の代まくせんや。縱千和ろくに知らざる似而非作者ハ唐山水滸傳ハ刊刻浪速の書肆ゐまべ其書画板下の寫本を両工のものさせて遣ましめ吾老て猷ゝく旦志も異ゐまべ老眼かくの如くろざる時ようなき用ふとも今ハ至まり。但俠客傳ハ吾得意の戲墨ゆえ。世の看官も五輯六輯の出を俟つ者ゐまべ續出さるハさの故ゝ又美少年録ハ本傳と筆記文溪堂の藏板ゐまべのゝで結局まで編果さまく思ぐも既ハ上ゐもゐる如く婦幼の代寫さまぬゐまべ果さんや否や我ゐろのまぎ知らず隨筆ゐまべ文溪堂の需ハ応ゐろろ。年來抄録ゐける書どもを讀ませ変まくまるふ其人みけれべ。ゆくゝろう只長夜の徒然ハ吾舊作の物の本の三十有餘年ハ及べるを婦幼ハ讀せそうち変ふ世を隔る人の戲墨を創て見る心地して忘まてるとのゝ多ろう況其文の拙きハさゝゝ作りざるゆゑ。今ゐべかくハあらじを思ふ勘ろぎ有昔儒の讒伯玉ハ五十ハして四十九年の非を知るとのゝ。他ハ異邦の大賢ゐまべ五年毎ハ一化して非を知るまるも易かるべし。并ハ及ぶべくもあらざるべし。吾ハ偶昨非を知るのゝ然べ本傳ゐまぬ初筆ハ二十八年前の舊作ゝ四輯五輯まぞべ體裁今と同ゐらぎ。并ハ昨の我ハ歷食て且流行同ゐくねべゝ因て又憶ふハ本傳第一輯二輯ゐる八房の

頭陀二さび
著作堂へ
来訪
廻國ばなし

仁壽
隆
作者看板
香雪樓國貞

犬の毛色の形牡丹の花の似ることを評うて這義を吾が問ひ者関東陽後
後山英子其他もありけり其後故児與継鈴有年畳翠君なども評りつゝ。
當時吾答ぎ本傳結局の至りうべしとのみ知らるべしのこと其間
ける友人の皆同好の士子ありしが或い二十四五歳或い三十七八歳の
あそ身故りの紀業平朝臣の歌ならねどもいと
八房の犬の毛色の一鮮を綴るが及びて憮然として懐舊の堪ぎ口授の筆さえ
止るが及べう只だの落涙のさるいぎ吾智音の友の本傳を見果ぎて早く鬼
籍が入りし者出羽が茂木巽あり。江戸が浦生秀實あり。伊勢が樗亭琴魚
あり是等が文化文政の間が終り壮佼さ今茲が春が老莉逝さぬ又翠君が書画をよく
其數がわらねども去歳の秋が老妹を喪ひ今茲が春が老莉逝さぬ又翠君が書画をよく
小説を嗜さる同好の風流士ありしがのまぎ初老ならぎとて陽月初五が彼岸あり有佳れば廣記

大江戸が智音の友が地を掃て今が一人もわらざる
磬桂窓の三同好あるのみ和漢の才子大部の書を
のみ吾が大部の戯墨四本まで綴らまく世故が果さざる者三本あり。幾ま生ても
足るこゝろければ長生も亦妙ありねを今悟ることを悔けれとのひつ歎息ぎうしうべ頭
陀も倶が自鼻うちうて公羽の洪歎理り。但翁の相識知音のこゝろぎ江湖上が物の
本を嗜る少壮のまぎ這書を見果ぎて早逝ありけるさぞあらん獨安房上總
人が八犬傳を見ぎとの故何と問べ里見氏が我國が基本。他郷の人の作見るが
とのの者ヨヌーと告れべ主人うち笑ひて田舎児の頑なる然る僻意も亦ありべし益稗
史初の本が皆架空の言のみ何ぞ其事實を
文の巧致を弄ぶのみ譬べ呉蜀の人三國の事が我國が基本。他郷の人の作が見るが
反ぎとて三國志演義を讀ざる者ありんや笑ふべし當時上野が里見氏あり安

房の里見と同宗也。桐生ハ在城と後ハ由良國三里ニ書ハ伐滅さる其餘亂出羽の到りて深上氏の臣と仕へて六千石を領をとのハ里見越後是ハ一ものの人後のつミ罪あそ死を賜ハり其後又奥の忠臣里見十右衛門ハ房總の人是ハ也ハ赤何とりや然ハ本傳也ハ地名ハ也ハ今と同ハめさる者ヲくハ壁ハ妄房の言ハ山の如き土人今ハ是をトミサンと喚做しうもろる主本傳也ハトヤマとも是ハ雅俗今昔の差別あれバ之又洲崎ハ土呼スサキと然ル主本傳也ハスサキと讀せそ江戸深川ハ洲崎と同稱也と只是のミならず三國志演義ハ落鳳坡又水滸傳ハ史家村の如く作者の作設ける地名ハ也ハ益稗史小說の自由ハ有徳と勘ハらぬを土人ハ今の稱呼と違へとそ笑ふもめくん开を小說ハ小說ハ知ざるハれバ辨ハるハ足らず又人名ハも胡意稱呼を異ハて實ハ據らざるも間是ハ譬言バ足利成氏ハ讀て是をシゲウヂとのべ。何とならバ當時足利学

校ハ一老僧の隨筆ハ成氏を二重氏と書ハうハり是ハ由てハれを觀バ成氏の和訓シゲウヂハ吉艾疑ひなし。其の差ハ近曽南畝莽言其他の隨筆ハも載られバ吾辨を俟どして知ル人ハ知るべけ也因て憶ふハ結城成朝ハ持氏重氏の餘黨之重氏の一字を授けらまつる狄然バ成朝の成ル字の如くハめハらで讀てシゲトモとそりふべけまハ里見義成も當時の稱謂ハ推さるべハ里見義成も當時の稱謂ハヨシシゲなり〳〵狄是も亦知るべくもあらず去ル乍ニハも本傳也ハ胡意其実ハ由らぞ。則世俗の訛ル隨ハナリウヂナリトモと傍訓せしへ實録ハらぬを諦をん。并が中ハ両管領定正顕定をバ其名の和訓を異ハせぞ反て醒く敗せしへ古将を弄ぶハ似ル事ども多ハも亦ろくろめる所為ハそ彼両管領ハ父祖の時より君臣の礼節を思ハざ是乱世の一驍将太平の逆臣ハれバ下剋上の罪ハ心誅せざるを得ざる旦定正の不支ハる顕定の機変ハる倶ハ久ハめざして

子孫凋落の至りしを父祖の不忠の餘殃ぞと覚ゆ天理順逆の應報あるを世の看官ゐ悟らせんとそかくまでぶ作設け愚意ハ鄙語のゆゑ胡盧ようの出まと真實ありよべうん然べきの物の本ゐ是等の用意ヨヌうれども房總の人さえ悟らぬも多のべーと論ぎる程の人定の鐘の响くゐ頭陀ハ驚紀て憶ぎ小夜を深たう告別禀さと遠ーく身を起ーう跌紀ぞ灯燈托地と推仆せび主人ハ吐嗟とぎゐ叫ぶ其聲ゐ驚らさるそ。愕然として覚來れバ是思ひ寐の壹夢ぎりにて噫嘻虚生の栄華ハ五十年。本傳作者の筆労ハ正ゐ是二十八年。孰ぅ壹夢ゐめざうけるの其初憂の富士茹子。鷹と犬と朋輩の犬物語を盡ーぬる詩あり歌あり又證とを戯墨新奇長　多編有是書　學仙師硯壽　毛類汝何如世のつべて身へ隠れ蓑ぅくる笠めざる名のみ打出の槌

南總里見八犬傳第九輯巻之五十三下大尾

○南總里見八犬傳第九輯巻之四十六至五十三下　書画彫工目次

出像畫工

柳川重信　画
溪齋英泉　画

淨書筆工

巻四十六　高谷　熊五郎
巻四十七上　澤　金次郎
巻四十八　高谷　熊五郎
巻四十九　澤　金次郎
巻五十　高谷　熊五郎
巻五十一　澤　金次郎
巻五十二　同シ右ニ

剞劂人

巻四十六　谷　金川
巻四十七上下　龜井　金水
巻四十八　對二樓　音成
巻四十九　巻五十一　巻五十三上下
巻五十　高谷　熊五郎
巻五十一　澤　金次郎
巻五十二　同シ右ニ

剞劂人　米藏　幸太郎
　　高谷　熊五郎

巻五十三上
巻五十三下

全書二十一輯毎輯五巻約為九輯共百六巻刊刻終れり

近世説美少年録第四集　作者曲亭馬琴翁（ちかごろ中絶の呼今度八犬傳全部相揃ひ間猶又作者は元より八犬士の推續並當寅の正月出板可仕全五冊）

著作堂一夕話前集　大本三巻　近刻

南總里見八犬傳總傳全書　第一輯首巻總目録姓氏目并に八犬士畧傳共ニ一巻未刻　全百六巻

右八犬傳全書百六巻首巻總目録ハ前書ニ而断如ク上ノ延引仕候此外ニ皆板不残相揃ひる是より毎年一輯毎ニ弥無滞摺出し并ニ而誂雇度紙摺合巻箱入ニ製本仕ニ而不相替追々ニ而求ニ而覧可被成下候

飲白

刊行江戸書林　文溪堂

売薬　仙女香　江戸京橋南傳馬町二丁目　白氏四代目　坂本氏

○家傳神女湯　一包代百銅（婦人のみぢかき女もそこなひ血の三症あらはるゝ症ニ用ひてその功あらたなるのみならず）

○精製奇應丸（なまけ癖をそうみ出すのやまひ或ハ物ごとおこたりてその功なきものニ用ひてよろしく）

○熊胆黒円子　一包代五十（くまのいけをとりて免をおくのうをすてゝまた真を製ふうかゝる小包代金二朱中包代一分大小包代金一両ニ而売ル）

○婦人つねの妙薬　一包代六十四つ包ニ而売ル

製薬本家　四ツ谷鮫ヶ橋の谷町　千日谷の上　瀧澤氏

弘所　江戸元飯田町中坂下南側中程　たね沢氏

○金匱救命丸　林氏製

時天保十三年壬寅春正月吉日後刊五冊追販全書無闕遺焉

弘所江戸　小伝馬町三丁目　丁子屋平兵衛

発販書行

京都　河内屋藤四郎
同地　大文字屋仙藏
大阪　河内屋太助
同地　河内屋直助
同地　河内屋茂兵衛

江戸小傳馬町三丁目　丁子屋平兵衛板